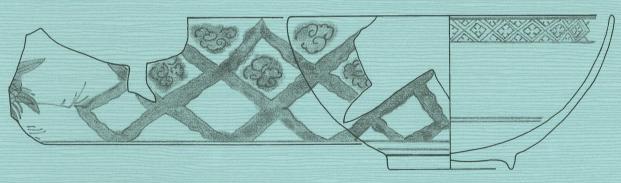
# 高知城跡

— 西堀地区試掘確認調查報告書 —



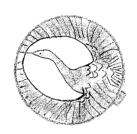


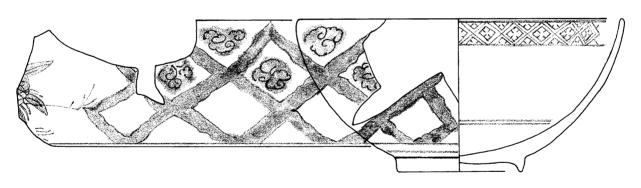
2009. 3

高知市教育委員会

# 高知城跡

— 西堀地区試掘確認調査報告書 —





2009. 3

高知市教育委員会



調査区遠景(西より)



堀西岸検出状況(東より)

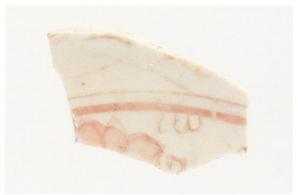


瓦溜4遺物出土状況



SX1と焼土層(東より)

#### 巻頭図版3



景徳鎮窯系色絵皿(54)



同



初期伊万里皿(333)



肥前産染付壺(351)



ガラス製簪 (326)



尾戸焼蓋物(240)



鉄釉溲瓶(252)



焼塩壺(288)

国史跡高知城跡は、山内一豊による慶長6 (1601) 年からの大高坂山上への築城に緒を発し、その後、享保12 (1727) 年の焼失を経ながらも、宝暦3 (1753) 年までには復興を遂げました。そして往時の姿を伝えた天守を初めとする本丸及び追手門は星霜を重ね、国の重要文化財にも指定され、その偉容を南国の青空に誇っています。

現在の城跡は周囲の建物が取り壊されましたが、高知公園として多くの県民や観光客が訪れています。一方、防御機能を失った内堀の多くは埋められ、また堀内にも市街化の波が押し寄せ、本来の近世城郭の姿は大きく変貌を遂げています。

この事態に臨み、高知県では、かつての城跡の姿を取り戻すべく、平成16 (2004)年に「史跡・高知城跡整備計画」を策定し今後の整備の方向性を示しています。

今回の試掘確認調査は、古絵図等に描かれた城西側の内堀跡及び屋敷跡等の確認を目的として実施されました。その結果、内堀西岸のほか上級武士の屋敷跡等に関わる遺構や遺物など多くの成果を得ることができました。

この報告書が、高知城及び城下町の歴史を理解するために新たな役割を果し、地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、財務省高知事務所をはじめ、調査に御協力いただきま した多くの皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成21年3月 高知市教育委員会

## 例 言

- 1. 本書は、高知市教育委員会が平成19年度に実施した高知城跡西堀地区試掘確認調査の報告書である。
- 2. 調査対象地は、高知市丸ノ内1丁目24-2に所在する。
- 3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成19年度から20年度にかけて行なった。

平成19年6月20日~7月4日、対象地面積3,500.93㎡、調査面積185.4㎡

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体 高知市教育委員会

調査事務 同 生涯学習課主任 高石敏子

調査担当 同 生涯学習課指導主事 梶原瑞司、浜田恵子

- 5. 本書の執筆と編集は浜田が行い、遺物写真は梶原が撮影した。
- 6. 調査にあたっては、財務省高知事務所、高知県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々 の協力を得た。
- 7. 発掘調査にあたっては松田直則、池澤俊幸をはじめとする諸氏から助力を得た。また、絵図・ 文献調査に関して内川清輔、吉松靖峯、筒井秀一、陶磁器の資料調査について赤松和佳、日 下正剛、鈴木裕子、はじめ諸氏のご教示を賜った。(敬称略)
- 8. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。 三谷哲彦 松木富子 島村加奈 恒石陽子 邊辺可奈子
- 9. 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。
- 10. 遺構の略号は、土坑: SK、柱穴及び小型の穴: P、性格不明遺構: SXとした。
- 11. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は「07 KC」である。

# 本文目次

第Ⅰ章	調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第Ⅱ章	遺跡の地理的・歴史的環境
1	. 地理的環境
2	. 歴史的環境 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第Ⅲ章	調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第Ⅳ章	調査の成果
	- 脚重 V D D 大 『P1 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	TP2 ······ 11
	TP3 ······ 12
	rpa · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	ΓP6·7···································
	rps · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	rp9 ····· 52
	1179
第Ⅴ章	考察
第1	節 史料にみる高知城跡西堀地区の性格と変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第2	節 高知城跡西堀地区、検出遺構の性格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	挿図目次
Fig. 1	高知城跡西堀地区2007年度調査調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Fig. 2	寛文己酉高知絵図(抜粋)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Fig. 3	享和元年高知御家中等麁図(抜粋)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Fig. 4	高知郭中図(抜粋)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Fig. 5	高知城跡及び周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Fig. 6	調査区位置図及び試掘坑配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Fig. 7	検出遺構全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
Fig. 8	TP2セクション図・・・・・・・12
Fig. 9	TP3平面図・セクション図、TP1・4・5柱状図・・・・・・・・13
Fig. 10	TP6・7平面図・セクション図 ············15
Fig. 11	SK1~3平面図・セクション図、SK1出土遺物実測図・・・・・・・・ 17
Fig. 12	瓦溜1出土遺物実測図(1)
Fig. 13	瓦溜1出土遺物実測図(2)
Fig. 14	瓦溜1出土遺物実測図(3) 20
Fig. 15	瓦溜2出土遺物実測図(1) 21
Fig. 16	瓦溜2出土遺物実測図(2) 22

Fig. 17	瓦溜2出土遺物実測図(3) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· 23
Fig. 18	TP8平面図・セクション図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 24
Fig. 19	SK3~6·P1·2平面図・セクション図 ······	• 25
Fig. 20	SK6·SX2出土遺物実測図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· 26
Fig. 21	瓦溜3出土遺物実測図(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 22	瓦溜3出土遺物実測図(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 23	瓦溜3出土遺物実測図(3) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
Fig. 24	瓦溜3出土遺物実測図(4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 25	瓦溜3出土遺物実測図(5)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 26	瓦溜 3 出土遺物実測図(6)	• 32
Fig. 27	瓦溜3出土遺物実測図(7)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 28	瓦溜 3 出土遺物実測図(8) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 34
Fig. 29	瓦溜4出土遺物実測図(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 30	瓦溜4出土遺物実測図(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 31	瓦溜4出土遺物実測図(3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 38
Fig. 32	瓦溜4出土遺物実測図(4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 33	瓦溜4出土遺物実測図(5)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 34	瓦溜4出土遺物実測図(6)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 42
Fig. 35	瓦溜4出土遺物実測図(7)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 36	瓦溜4出土遺物実測図(8)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 37	瓦溜4出土遺物実測図(9)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	45
Fig. 38	瓦溜4出土遺物実測図(10)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 39	瓦溜4出土遺物実測図(11)	48
Fig. 40	瓦溜4出土遺物実測図(12)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	49
Fig. 41	瓦溜4出土遺物実測図(13)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 42	瓦溜4出土遺物実測図(14)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	51
Fig. 43	TP8包含層 II 層出土遺物実測図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	52
Fig. 44	TP9セクション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	53
Fig. 45	SX1·TP9包含層II層出土遺物実測図······	55
_	SX1 出土遺物実測図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	絵図にみる堀西側の変遷 (1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig. 48	絵図にみる堀西側の変遷 (2)	82
Fig. 49	高知城内堀跡推定位置図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	85
Fig 50	昭和20年戦災図(抜粋)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 85

# 写真図版目次

巻頭図版	ī1 調査区遠景(西より)、堀西岸検出状況(東より)
巻頭図版	夏2 瓦溜4遺物出土状況、SX1と焼土層(東より)
巻頭図版	取3 景徳鎮窯系色絵皿 (54)、同、初期伊万里皿 (333)、肥前産染付壺 (351)、ガラス製簪 (326)、
尾	是戸焼蓋物 (240)、鉄釉溲瓶 (252)、焼塩壺 (288)
PL. 1	調査区遠景(西より)、TP2瓦礫出土状況(南より)・・・・・・・・・・95
PL. 2	TP3堀西岸検出状況 (東より)、同 石垣出土状況 (東より)・・・・・・・・・96
PL. 3	TP3石垣出土状況(南より)、TP6完掘状況(南より)・・・・・・・・・97
PL. 4	TP6 SK1·2検出状況 (西より)、同SK1遺物出土状況 (南より) · · · · · 98
PL. 5	TP8瓦溜4遺物出土状況 (北より)、同 · · · · · · 99
PL. 6	TP8瓦溜4遺物出土状況 (326)、同 · · · · · · 100
PL. 7	TP8南壁、同SX2セクション・・・・・・ 101
PL. 8	TP8 SX2検出状況 (北より)、同P1礫出土状況・・・・・・・・・・102
PL. 9	TP9焼土層 (SX1-1層) 検出状況 (北西より)、同 南壁セクションと焼土層
PL. 10	TP9 SX1 遺物出土状況 (336)、同セクション (南より) · · · · · · · 104
PL. 11	TP9 SX1 セクション (南西より)、同 (南東より) · · · · · · · · 105
PL. 12	SK1遺物出土状況(6)、瓦溜4遺物出土状況(286)、同、同漆製品、同、同、
SX2	遺物出土状況 (56)、TP8作業風景
PL. 13	SK1·瓦溜1出土遺物·······107
PL. 14	瓦溜 1~3·SX2 出土遺物 ······ 108
PL. 15	瓦溜 3 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
PL. 16	瓦溜 3 · 4 出土遺物 · · · · · · · · · 110
PL. 17	瓦溜 4 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
PL. 18	瓦溜 4 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
PL. 19	瓦溜 4 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
PL. 20	瓦溜 4 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
PL. 21	瓦溜 4 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
PL. 22	瓦溜 4 出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
PL. 23	瓦溜4出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
PL. 24	包含層 II 層·SX1 出土遺物····································

# 表目次

Tab. $1 \sim 13$	遺物観察表 (陶磁器·土器) · · · · · · · · 57~	69
Tab. 14	遺物観察表(石製品・金属製品・ガラス製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	70
Tab. 15 · 16	遺物観察表 (瓦)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70・	71
Tab. 17	絵図・史料にみる高知城跡西側の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	80
Tab. 18	瓦溜4陶磁器・土器の器種別出土点数と組成比・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	90
Tab. 19	瓦溜4陶磁器の生産地別出土点数と組成比・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	91

## 第1章 調査に至る経緯と経過

高知城跡西堀地区は、国指定史跡高知城跡の西側及び南側に接している。また調査地の北側は、平成17年に旧営林局跡地の調査が行われた地点であり、高知城内堀の西岸の位置が確認されたことにより、平成19年7月に国指定史跡に追加されている。こうした経緯や立地環境から、該当地においても内堀の範囲を確認し、高知城西側部分の整備保存を進める必要性が高まってきていた。また、対象地はもとの高知地方・家庭・簡易裁判所の敷地内にあり、南側では平成13年に県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、近世の屋敷地に関連する遺構、遺物が多数検出されている。

高知地方・家庭・簡易裁判所が新庁舎に移った後は、当地点は空き地となっていたが、その後、検察庁の仮庁舎建設が予定されることとなった。工事は旧庁舎の基礎を利用し、遺跡への影響はないと判断されたが、学術目的の確認調査を行うことが望ましいとの指摘が高知県教育委員会文化財課よりなされた。その後、財務省高知事務所、高知県教育委員会、高知市教育委員会が協議を行い、高知城の内堀の範囲と近世遺跡の広がりを確認するための学術調査を実施することに決定した。

これを受けて高知市教育委員会が試掘確認調査を平成19年6月20日から7月4日にかけて実施した。調査にあたっては、管理者である財務省高知事務所の協力を得た。なお、対象地はこれまで「高知城伝下屋敷跡」としてきたものであるが、高知城内堀跡の確認を受けて、遺跡名称を「高知城跡」に修正した。



### 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

#### 1. 地理的環境

高知市は土佐湾に面し、東部には高知平野が広がり、市域の西部及び北部は東西に山地が連なる。河川は、鏡川が市の西北部から湾曲しながら東流して浦戸湾に注ぎ、国分川が南国市北部及び香美市西部域から西流し、江の口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。現平野部のほとんどは古くは内海であったが、その後鏡川などの堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

高知城跡が立地する高知市の中心市街地は、北部は標高400~600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返されてきた地域でもある。一方で、平野部に内陸深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には、浦戸湾に注ぐ鏡川、江の口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなった。

#### 2. 歴史的環境

#### 周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽島下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元I式土器や礫石錘、縄文後期~晩期の条痕文土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期~晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。また、柳田遺跡では弥生前期の大篠式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するかろーと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区の長崎より、県下唯一の有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺遺跡より出土している。また、尾戸遺跡からも弥生前期の太型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代では、北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在する。また、高知市西部から南部にかけての丘陵部には、7世紀中葉の横穴式石室をもつ朝倉古墳や、塚ノ原古墳群が存在する。また、平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などの遺跡が確認されている。

古代では、白鳳~奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺跡がある。この他にも、高知学園裏遺跡や東久万池田遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡等がある。記録の上では、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地

するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城である。大高坂氏が暦応2年~3年 (1339~1340) に北朝方の攻撃を受け敗退 (駐1) した後は、天正16年 (1588) に長宗我部元親が岡豊城から大高坂山に移り、その後同氏が浦戸へ移る天正19年 (1591) までの間、大高坂山が長宗我部氏の居城となった。天正16年『長宗我部地検帳』の『大高坂之村地検帳』には「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などの記載がみられ、城下町形成の様子が窺われる。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世の遺跡では、高知城跡の他、高知城伝下屋敷跡、弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などが確認されている。高知城跡は享保12年に焼失するが再建され、現在、国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査では、ピット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩関連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、上級~中級武士の屋敷跡である弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などの調査が行われ、近世城下町の様相が次第に明らかになってきている。近世の窯跡には、尾戸窯跡、能茶山窯跡がある。尾戸窯は高知城の北西に位置する尾戸の地に、承応2年(1653)に開かれた藩の陶器窯で、文政5年(1822)に窯場が能茶山に移転する。文政3年(1820)には、城下の西方に位置する能茶山に能茶山磁器窯と陶器窯が開かれている。

開成館跡は慶応2年(1866)に土佐藩が創立した勧業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応3年に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「寅賓館」と改まり、明治4年(1871)に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫三郎と板垣退助、福岡孝弟による、会談が行われている。

#### 築城と近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年(1601)に長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長6年9月に築城を開始した。慶長8年(1603)には、本丸の建物と二ノ丸石垣までが竣工し、慶長16年(1611)に三ノ丸が完成して高知城の竣工に至った。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたためその名を忌んで、慶長15年(1610)に「高智山」と改めた。

正保年間 (1644~1648) の『正保城絵図』 (駐2)、及び慶安5年 (1652) の『慶安五年高知郭中絵図』 (駐3) によると、城の南側と西の搦手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文9年 (1669) の『寛文己酉高知絵図』 (駐4) (Fig.2) では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御米蔵」「御作事場」などの藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東·西·南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川が堀としての役割を果たした。 城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を搦手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江の口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられ

た。上町、下町と郭中との境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江の口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

#### 高知城西側の景観と変遷

高知城の西側内堀に接する一帯には、西大門から西に向かう「西大門筋」と、内堀に沿って南北に延びる筋があり、これに面して侍屋敷が並んだ。寛文9年(1669)の『寛文已酉高知絵図』(Fig.2)には、堀南西角に藩関連とみられる屋敷の絵が描かれており、そこから西大門に至る南北の筋には、堀の西岸に沿って「福岡内丞」「桑山伊左衛門」らの侍屋敷がみえている。

しかしその後、元禄11年 (1698) 10月6日、北奉公人町から出火した火災が城下に広がり、北奉公人町、内堤、帯屋町筋、大門筋、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷176軒、町屋1933軒、貸家2000軒余り、寺19、橋12箇所が焼失する被害 (離5) となった。さらに火勢は城内にも及び、下屋敷、太鼓丸が焼失した。この大火の後、堀西側の侍屋敷は撤去され、前面の筋は広小路となった。(離6) また、享保12年 (1727) 2月には、小高坂越前町から出火して城内に及び、追手門他の数棟を除いて城郭の大部分が焼失した。火災は尾戸から大川筋、愛宕町、一手は京町、種崎町、農人町、山田町、鉄砲町にも及び、被害は侍屋敷205軒、町屋1163戸、郷分397戸に達した。この享保の大火の後、延享4年 (1747) 9月27日には、城門の呼称が変更される (離7) とともに、搦手側の「西大門筋」も「西弘小路」と改められた。

その後、嘉永年間 (1848~1854) には、堀西側に南北九十六間、東西八間の馬場が設けられた。  $^{(\pm 8)}$  近代以降

明治4年(1871)の廃藩置県の後、高知城は明治6年(1873)に、本丸と追手門などを残して表御殿、奥御殿など殆どの建物が撤去され、高知県の管理のもと公園に指定された。その後、南側の内堀は北岸を埋めて幅を狭くされ、南西側では明治8年(1875)に旧裁判所が設置された。堀西側の敷地は旧営林局、裁判所などの国有地となった。

昭和16年に始まった太平洋戦争のなか、昭和20年7月4日の大空襲によって高知市の大部分は焼土と化した。この終戦の混乱の中で、昭和20年8月27日に高知市は建設局を設け、同時に建設委員会を設立して市街地の復興再建にあたった。昭和20年11月4日には連合軍が高知に到着し、後続部隊は朝倉と日章の日本軍旧兵舎に駐屯して西弘小路の電気局が軍政部に当てられたが、この時、瓦礫の山と化した市街地を清掃するについて、市街の瓦礫を高知公園の堀に廃棄し堀を埋め立てて公園や県庁への市民の往来を安易にすることが、軍政部から指示されたという。(駐9)こうした経緯を経て、東側と西側の堀の埋め立てが行われた。

埋め立ての後、東側の藤並神社沿いにあった堀跡は公園、西側の堀跡は裁判所と営林局などの国 有地となった。西側の堀跡はその後一部が国指定史跡に加えられ、現在に至っている。

#### [註]

- 1)『蠹簡集拾遺』
- 2) 『正保城絵図』 国立公文書館所蔵
- 3) 『慶安五年高知郭中絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵
- 4) 『寛文己酉高知絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵
- 5)『南路志』巻七十「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」
- 6) 『高知市沿革略史』 『高知市沿革略史』 は松野尾章行著、濱口真澄校の自筆本で、明治35年成稿。
- 7) 『皆山集』
- 8) 『高知市沿革略史』
- 9) 『高知市戦災復興史』高知市1969年

#### [参考文献]

平尾道雄「第二編 近世|『高知市史 上巻』高知市1958年

『高知県の地名』平凡社1983年

『角川日本地名大辞典39高知県』角川書店1986年

『高知城下町読本-改訂版-』土佐史談会・高知市教育委員会2004年

『特別展-絵図の世界』安芸市歴史民俗資料館1998年

『史跡高知城跡1-高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1994年

『高知城跡 - 伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年 『高知城三ノ丸跡 - 石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2001年 『高知城伝下屋敷跡 - 高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年

『史跡高知城跡 - 本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2004年

『史跡高知城跡 - 丸ノ内緑地試掘確認調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2006年

『尾戸窯跡』高知市教育委員会2007年

『開成館』高知市教育委員会2007年

『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008年

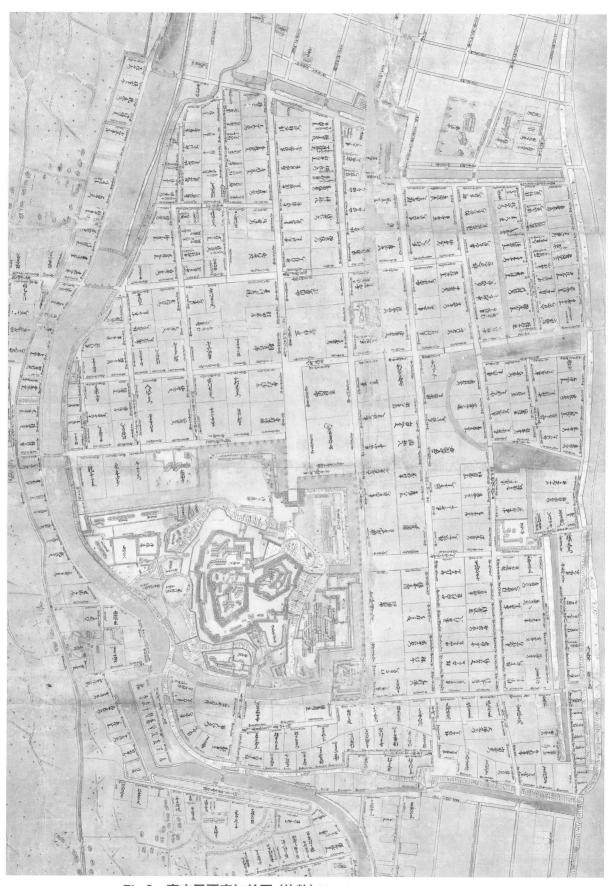


Fig.2 **寛文己酉高知絵図 (抜粋)**(高知市立市民図書館平尾文庫所蔵)

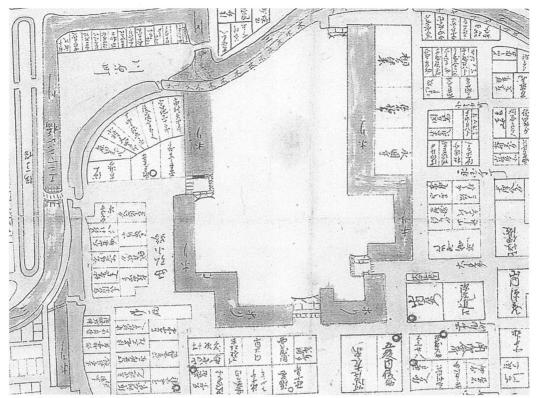


Fig.3 **享和元年高知御家中等麁図 (抜粋)**(安芸市立歴史民俗資料館所蔵。『特別展 - 絵図の世界』より転載。)

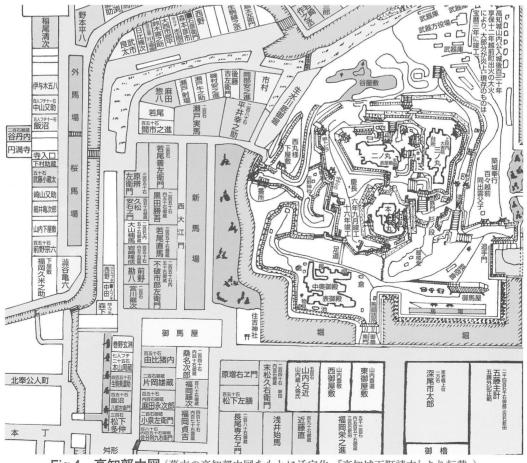
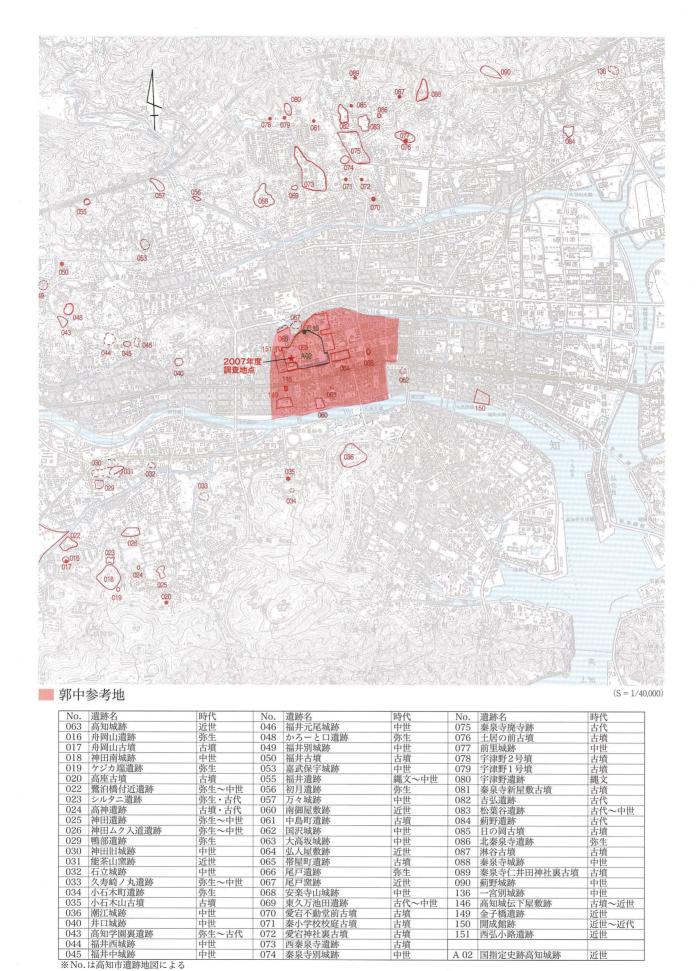


Fig.4 高知郭中図 (幕末の高知郭中図をもとに活字化。『高知城下町読本』より転載。)



高知城跡及び周辺の遺跡 Fig.5

151 西弘小路遺跡 A 02 国指定史跡高知城跡

近世

中世 ~古代

※ No. は高知市遺跡地図による

## 第Ⅲ章 調査の方法

調査においては、高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査対象地の東部側に5箇所の試掘坑 TP1~5を設定した。また、西部側にTP6~9を設定し、内堀外側に広がる近世遺跡の有無を確認 した。ただし、今次調査区においては、後に行われる高知地方検察庁仮庁舎の建設工事で、高知地 方裁判所旧庁舎の建物基礎を引き続き活用することが予定されていたため、基礎が残存する南側部 分への試掘坑の設定を避け、調査を断念している。

試掘坑の掘削にあたっては、重機を用いて表土と撹乱層を除去し、近世の遺物包含層面に達した 後は、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。

検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図、平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。

水準については、高知市丸ノ内1-2-20に設置されている一等水準点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内の3点  $(T-1\cdot T-2\cdot T-3)$  について座標を測定した。

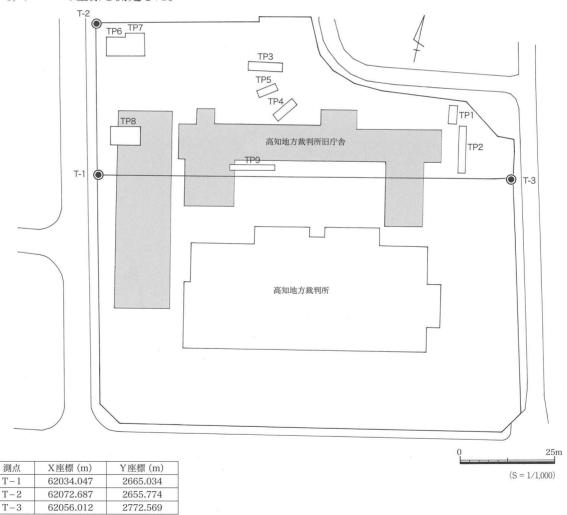


Fig.6 調査区位置図及び試掘坑配置図

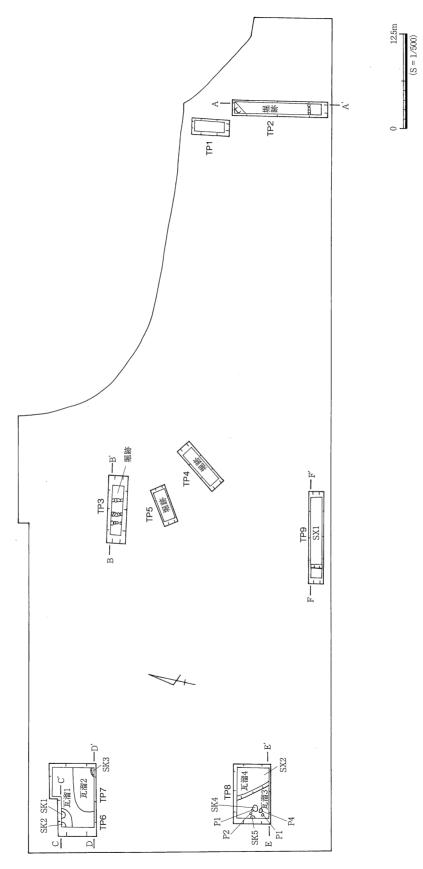


Fig.7 検出遺構全体図

### 第Ⅳ章 調査の成果

今回の調査では、調査対象地内に設定した9箇所の試掘坑のうち、東部側の試掘坑 (TP1~5) で高知城の内堀跡を確認した。また、西部と南部に設けたTP6~9では、近世の土坑6基、ピット3基、性格不明遺構2基、瓦溜まり等の近世の遺構と遺物を検出している。

以下、各試掘坑毎に堆積状況、検出遺構と遺物の内容を述べる。

#### 1. TP1

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区北東部に設定した試掘坑である。TP2~5で確認された瓦礫層(昭和20年代初めの堀埋め戻し埋土)は検出されておらず、当時には、該当地点は堀外にあったことが推察される。

#### (1) 層序 (Fig.9)

現代の整地層である I 層: 円礫を多く含む暗褐色シルト層 (標高  $2.7 \sim 2.9 \text{m}$ ) の下面に、I 層: 角礫を多く含む褐色シルト層が堆積している。I 層からの出土遺物は確認できておらず、年代は不明である。

#### 2. TP2

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区東部に設定した試掘坑である。幅2mのトレンチを南北12mにわたって掘削し、試掘坑のほぼ全面で堀跡の埋土を検出した。南岸の検出を試みたが、岸は調査区外に出るとみられ、壁の立ち上がりは検出できていない。しかし、試掘坑の南端部では、堀の南岸付近に設置されたとみられる近・現代の石垣の一部を確認した。また、試掘坑の北端部ではTP1で検出した「層と堀埋土の境界を確認しており、昭和20年代初め頃の堀北岸が該当地点付近にあったことが推察される。

#### (1) 層序 (Fig.8)

現代の整地層である I 層: 円礫を多く含む暗褐色シルト層 (標高2.7~2.9m) の下面に、昭和20年代初めの堀埋め戻しの埋土が堆積している。試掘坑の北西隅では、 I 層の下面に I'層: 角礫を多く含む褐色シルト層が堆積し、堀の埋土1層がこれを切っている。

#### (2) 遺構と遺物

#### 堀跡 (Fig.8)

試掘坑のほぼ全面で堀跡の埋土を検出した。近世の堀北岸と南岸は未検出であるが、試掘坑の北西隅では、堀埋土の瓦礫層(堀 -1 層)がI 層の堆積を切っている状況が検出できた。両者の境界は南西から北東方向に向かって延びており (Fig.7)、堀が埋め戻される昭和20年代初め頃の北岸付近の形状を示していると考えられる。堀跡の深さは、掘削を表土下1.7mで止めたため、未確認である。

埋土は1層:暗赤褐色シルト層、2層:黒褐色粗砂層である。このうち1層は焼土と被熱し変色した瓦片や煉瓦他の現代の遺物を多量に含んでおり、終戦直後に堀を埋め戻した際の埋土にあたる。

2層からは近代の遺物が出土するが、被熱した瓦礫類は含まれない。それ以下の堆積状況については未確認である。

堀跡の南岸付近では、北を前面とする東西方向の石垣と、その背後にあるテラス状の高まりを検出した。石垣に使用された礫は石灰岩からなり、径30cm前後で、粗い面取りが施されている。上下2段を確認するがそれ以下については未確認である。石垣の背面(南側)には近代の遺物を含む2層:黒褐色粗砂層がテラス状の高まりを形成しており、石垣も近代以降の改修によるものであった可能性が高い。石垣の前面(北側)には1層が堆積し、被熱した瓦礫類が多量に出土していることから、昭和20年代初め頃まで堀南岸がこうした形状を保っていたことが分かる。

#### 3. TP3

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区中央部に設定した試掘坑である。幅2mのトレンチを東西9mにわたって掘削し、堀跡の埋土と西岸を確認した。また西岸付近では、近・現代の石垣とテラス状の高まりを検出した。西岸と石垣は南北方向に延びており、平成17年度に北側の旧営林局跡地(高知城跡西堀地区平成17年度試掘確認調査)で検出された堀跡西岸とも、位置関係が対応する。

#### (1) 層序 (Fig.9)

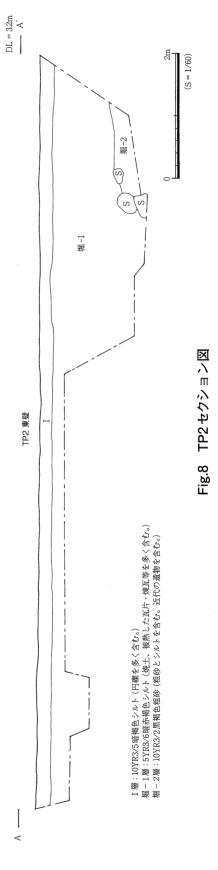
現代の整地層である I 層: 円礫を多く含む暗褐色シルト層 (標高2.1m~3.2m)、その下面の II 層: 灰黄褐色シルト層 (標高2.1m以下)を検出した。堀跡は II 層を切り込んでおり、 II 層の東側で石垣と堀の埋土を検出した。 I 層は、堀の埋土と II 層の上面を覆うように堆積している。

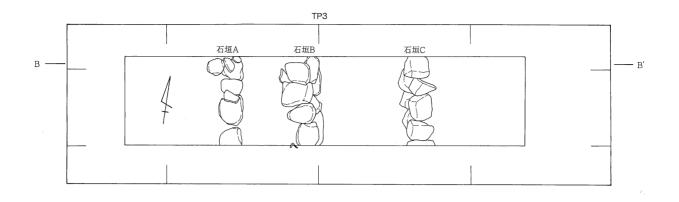
#### (2) 遺構と遺物

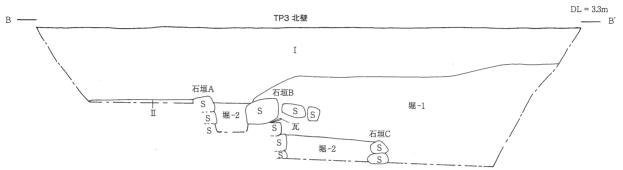
#### 堀跡 (Fig.9)

試掘坑の西部で堀跡の西岸、それ以東で堀上層の埋土を検 出した。

埋土は1層:暗赤褐色シルト層、2層:黒色シルト層を確認した。1層は焼土と被熱し変色した瓦片や煉瓦等の現代の遺物を多量に含んでおり、TP2検出の堀-1層と同様に、昭和20年代初めの堀埋め戻しに伴う埋土にあたる。2層からは近代の遺物が出土するが、被熱した瓦礫類は含まれない。遺構掘







I 層: 10YR3/3暗褐色シルト (円礫を多く含む。) II層: 10YR4/2灰黄褐色シルト 堀 – 1層: 5YR3/3暗赤褐色シルト (焼土、被熱した瓦片・煉瓦等を多く含む。) 堀 – 2層: 10YR2/1黒色シルト (近代の遺物を含む。)

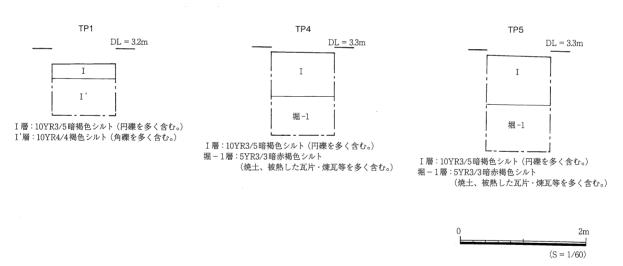


Fig.9 TP3平面図・セクション図、TP1・4・5柱状図

削を現表土下2.1mまでで止めたため、以下の堆積状況については未確認である。

堀の岸はII層を掘り込んで作り出されており、II 層の東側前面とその前方の2箇所では石垣が検出されている。3箇所の石垣 (Fig.9 – ABC) は何れも南北方向で、ほぼ並行して設けられている。岸 (Fig.9 – II 層) の前面に設けられた石垣 A は径 $30\sim50$  cm 前後のチャートと石灰岩からなり、東側を前面とする。石垣 B は、A の前面から1.2 m 東側に前面を揃えて設けられており、石材は径 $30\sim50$  cm 前後のチャートと石灰岩である。石垣 B の背面には、近代の遺物を含む2 層:黒色シルト層があり、II 層と石垣 A に高さがほぼ揃っている。石垣 C は、B の前面から1.8 m 東側に前面を揃えて設けられている。石材は径 $30\sim40$  cm 前後の石灰岩で、礫の形態、大きさとも不揃いである。石垣 C の背面には、近代の遺物を含む2 層があり、背後の石垣より4 60 cm 程低い面にテラス状の段が設けられている。

石垣Cの東側前面と2層の上面には、被熱した瓦礫等の遺物を含む1層が堆積していることから、石垣B・C及びテラス状の段部は、昭和20年代初め頃までの堀西岸の形状を示していると考えられる。また、石垣B・Cの背面にある2層からは近代の遺物が出土しており、石垣B・C及び段部が近代以降の改修によるものであったことが分かる。なお、石垣Aについては、石垣間や背後の堆積層からの出土遺物が確認できておらず年代の特定ができないが、礫の規模や形状等は石垣Bに類似しており、これについても近代以降のものであった可能性がある。

#### 4. TP4 · 5

高知城内堀の範囲を確認する目的で、調査区中央部に設定した試掘坑である。ともに、整地層 I 層の下面で、堀跡の埋土 (1層:暗赤褐色シルト層)を検出し、堀の範囲内にあたることが確認できた。(Fig.9) 西岸の推定位置部分については、旧地方裁判所庁舎基礎が残存しており、確認できていない。

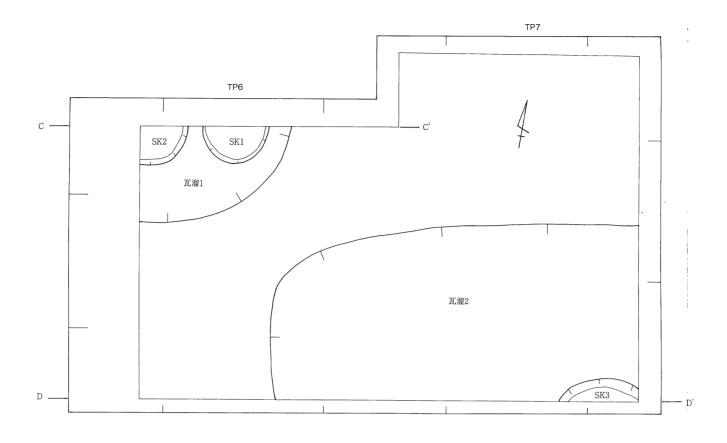
#### 5. TP6 · 7

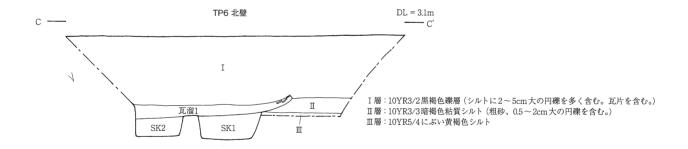
調査区の北西部に設けた試掘坑である。該当地点は高知城内堀の範囲から西側にあたっているため、堀外側での近世遺跡の広がりを確認する目的で、5×5mの試掘坑TP6を設定した。TP6では瓦溜まりが広がりをみせたため、さらに東側にTP7を設け調査範囲を拡張した。北西側で近世の土坑SK1・2と近世の瓦溜1、南部側で近世の土坑SK1と近代の瓦溜2を確認した。

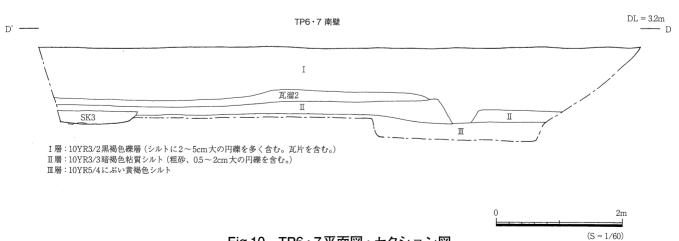
#### (1) 層序 (Fig.10)

近・現代の整地層である I 層:黒褐色礫層(標高  $1.9m \sim 2.9m$ )の下面に、近世の遺物包含層である I 層:暗褐色粘質シルト層(標高  $1.7m \sim 1.9m$ )が堆積する。その下面には II 層:にぶい黄褐色シルト層(標高 1.7m 以下)があり、ここより土師質土器片が出土している。

近代の瓦溜2はI層の最下位で検出され、近世の瓦溜1とSK1・2・3はII層を切っている。







#### (2) 遺構と遺物

#### ①土坑

#### SK1 (Fig.11)

TP6の北西端で検出された円形土坑で、上面を瓦溜1によって切られている。西側には同様の円形土坑SK2が20cmの間隔を空けて並んでおり、2基が組で機能した可能性がある。

北側の半分が試掘坑の外側に出るが、平面形態は円形とみられ、規模は径100cm、深さ40cmを 測る。床面は平坦で、壁がほぼ直高して立ち上がる。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、炭化物を多く 含んでいる。床面からは径20cm前後の砂岩角礫が出土している。

出土遺物は磁器染付中碗・皿、白磁水滴・蓋物蓋、器種不明の青磁体部片、陶器中碗・擂鉢・蓋・ 小瓶、土器小皿、鉄釘、漆器椀である。

図示したものは、1~6である。

1~3は磁器。1·3は肥前産の染付皿である。1は口縁部輪花形で、外面に梅文、内面に花文を描く。3は内面に草花文を描くものである。2は肥前産の白磁水滴である。鳥を形取ったものとみられ、上部に穿孔をもつ。型押し成形貼り合わせによるもので、内面にユビオサエとユビナデ痕が残る。4~6は陶器。6は備前焼の擂鉢である。4は鉄釉の蓋で、宝珠形の摘みをもつ。5は小瓶で、外底に回転糸切り痕が残る。鉄釉は黒褐色に発色する。

SK2との関係性からみて、SK1は18世紀末から19世紀に比定される。

#### SK2 (Fig.11)

TP6の北西端で検出された土坑で、円形土坑SK1に隣接する。

検出規模は東西確認長70cm、南北確認長60cm、深さ30cmで、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。 SK2は深さ、埋土、形態等がSK1に共通しており、位置関係も隣接することなどからみて、両土坑 が組になり同時期に機能した可能性がある。

出土遺物は肥前系の染付広東形中碗1点、土師質土器小皿1点である。

SK2は18世紀末から19世紀に比定される。

#### SK3 (Fig.11)

TP7の南東端で検出された土坑である。

南側と東側部分が試掘坑の外に出るため、全体の規模、形態は不明であるが、東西検出長124cm、深さ20cmを確認している。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

#### ②瓦溜まり

#### 瓦溜1 (Fig.10·12~14)

TP6の北部で検出された瓦溜まりである。

出土遺物は磁器染付中碗・皿・鉢・蓋物蓋・小瓶・水滴、白磁皿、青花皿、陶器中碗・鍋・土瓶蓋・ 甕・火鉢、土師質土器杯・中皿、鉄釘、硯である。

図示したものは、7~33である。

7~19は磁器。7~10は染付中碗である。9は肥前系の広東形碗。7は能茶山窯の端反形碗で、外

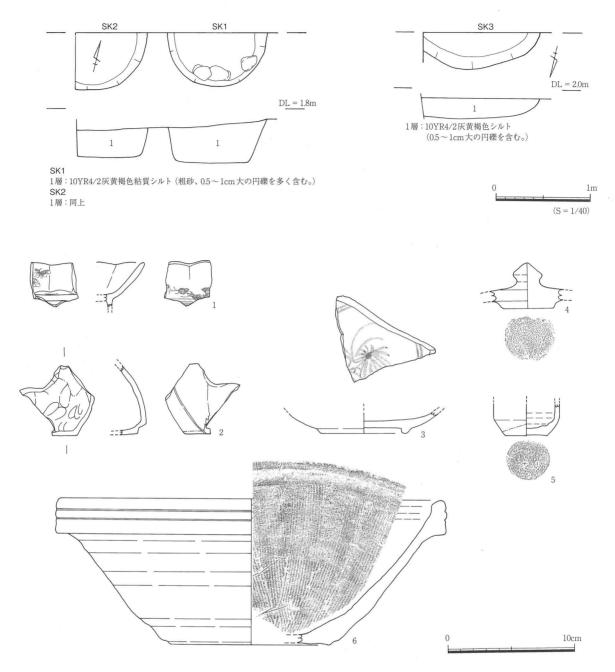


Fig.11 SK1~3平面図・セクション図、SK1出土遺物実測図

面に草花文を描く。8は関西系の端反形碗で外面に宝文、口縁部内面に雲を描く。10は肥前産の青磁染付碗、13は青磁染付碗の蓋である。17は肥前系の蓋物の身。14~16は蓋物の蓋である。19は肥前系の火入れで、山水文を描く。11は肥前系の白磁小杯である。12は景徳鎮窯系の青花皿で、17世紀前葉~中葉。口縁端部の釉が部分的に剥がれる。18は肥前産の水滴か。

20~24は陶器。20は肥前産の灰釉丸碗である。21・22は鍋である。21はオリーブ黄色を帯びる透明の釉を施釉している。22は把手に陽刻による唐草文を施すもので、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。23は土瓶蓋で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉する。24は瀬戸・美濃産の火鉢で、外面に灰釉を施釉し、部分的に青緑色の釉を流し掛けする。

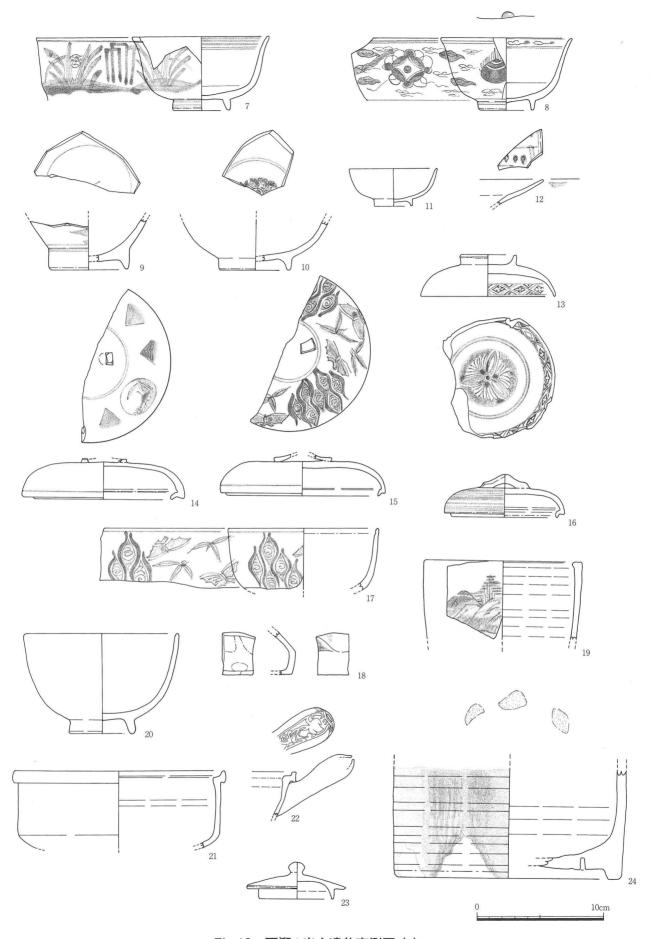


Fig.12 瓦溜1出土遺物実測図(1)

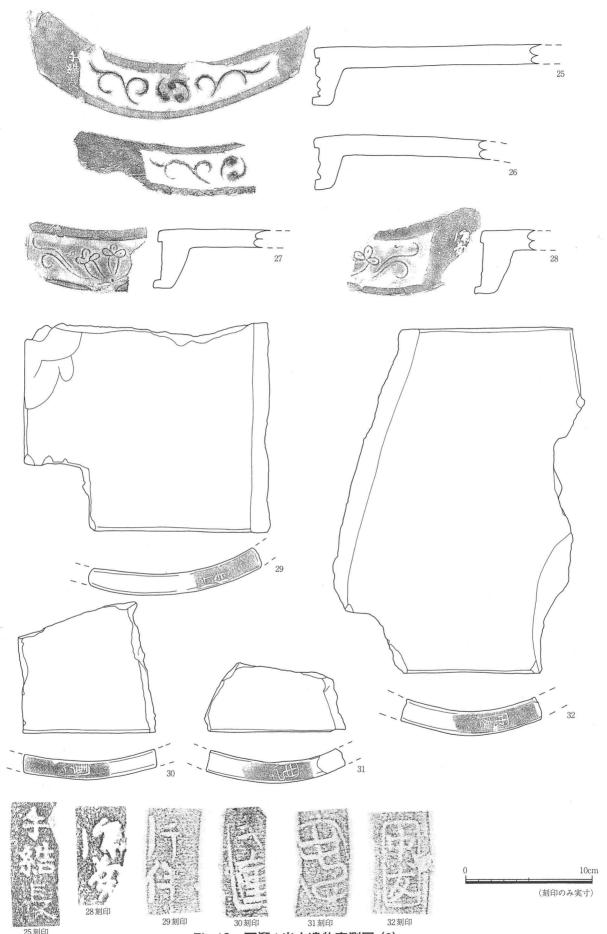


Fig.13 瓦溜1出土遺物実測図(2)

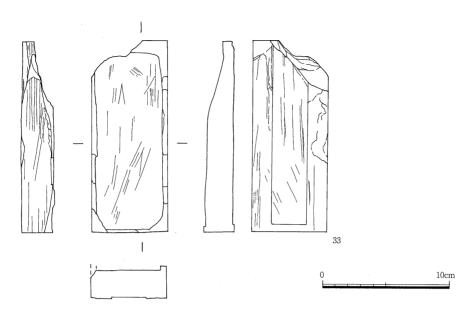


Fig.14 瓦溜1出土遺物実測図(3)

25~28は軒平瓦、29~32は平瓦である。25は中心飾りに三ツ巴文、両側に均整唐草文を配する。 瓦当に「手結長」銘印をもち手結産(高知県香南市夜須町手結)と推定される。27・28は、中心飾り は丁子か。28は瓦当に「片□」銘印をもち片地産(高知県香美市土佐山田町片地)と推定される。29 も「片□」の銘印をもつものである。30は角枠内「□キ重」の銘印をもち、安芸産(高知県安芸市) である。31は小判形の枠内に「中己」の銘印をもつ。32は角枠内「中友」の銘印をもつ。

33は硯である。粘板岩製で、砥石に転用されている。

図示したものの他、尾戸窯の灰釉中碗、関西系の鉄釉甕、銅緑釉を施した陶器土瓶、尾戸窯の白 色系土器杯等が出土している。

瓦溜1は19世紀中葉~幕末に比定される。

#### 瓦溜2(Fig.10·15~17)

TP6からTP7にかけて検出された近代の瓦溜まりである。

東西確認長5.9m、南北確認長2.8mの範囲に、多量の瓦片が12~18cmの厚みをもって廃棄されている。瓦の間からは肥前系の染付端反形中碗、瀬戸・美濃産の染付磁器碗、染付水滴、瀬戸・美濃産の火鉢等の19世紀~幕末の遺物と、酸化コバルトによる染付磁器、青土瓶他の近代の遺物が出土している。

図示したものは、34~53である。

34は肥前系の平形中碗で、外面に青磁釉を施釉し、内面に呉須で松葉を描く。高台内に銘をもつ。 35は染付小碗で、外面に松・梅・亀と波を描く。36は染付の壺又は火入れである。外面に型紙刷り による蓮弁文と手描きによる草文が施されている。肥前系で、近代の製品か。

38は能茶山窯の擂鉢で、外面と口縁部内面に鉄釉を施釉する。近代の製品とみられる。37は水注類で、注口の上面に長方形の切り込みをもつ。39は瓦質土器の火鉢で、外底に円形の三足を貼付する。

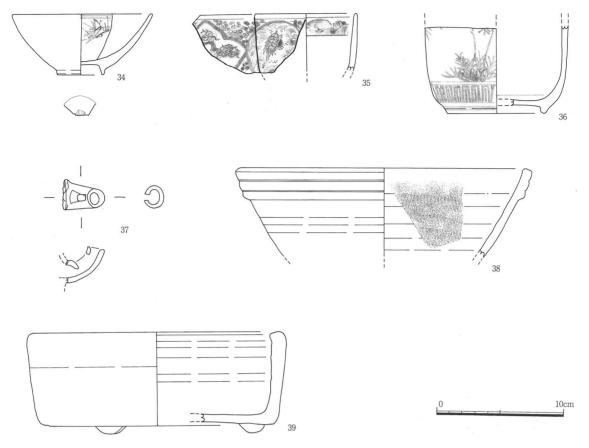


Fig.15 瓦溜2出土遺物実測図(1)

 $40\sim45$ は軒平瓦、 $46\sim53$ は平瓦である。 $40\cdot45\sim51$ は「布直」銘印をもつもので、布師田産(高知県高知市布師田)と推定される。 $52\cdot53$ は「片治」銘印をもち、片地産(高知県香美市土佐山田町片地)と推定される。

#### 6. TP8

調査区の南西部に設けられた試掘坑である。該当地点は、高知城内堀の範囲から西側にあたっている。そのため、堀外側での近世遺跡の広がりを確認する目的で、5×8mの試掘坑を設定した。

#### (1) 層序 (Fig.18)

近・現代の整地層である I 層と撹乱層の下面で、近世の遺物包含層にあたる II 層:暗褐色粘質シルト層(標高 1.7m $\sim 1.8$ m)を検出した。その下面では、II 層:にぶい黄褐色シルト層(標高 1.7m以下)が水平に堆積している。

江戸後期の瓦溜まりである瓦溜 $3\cdot4$ は $\blacksquare$ 層の上位に広がっており、瓦溜 $3\cdot4$ の直上まで  $\blacksquare$  層と攪乱が及んでいる。近世の土坑 $SK4\sim6$ 、ピット $P1\sim3$ 、落ち込み状の遺構SX2は $\blacksquare$ 層の上面で検出した。

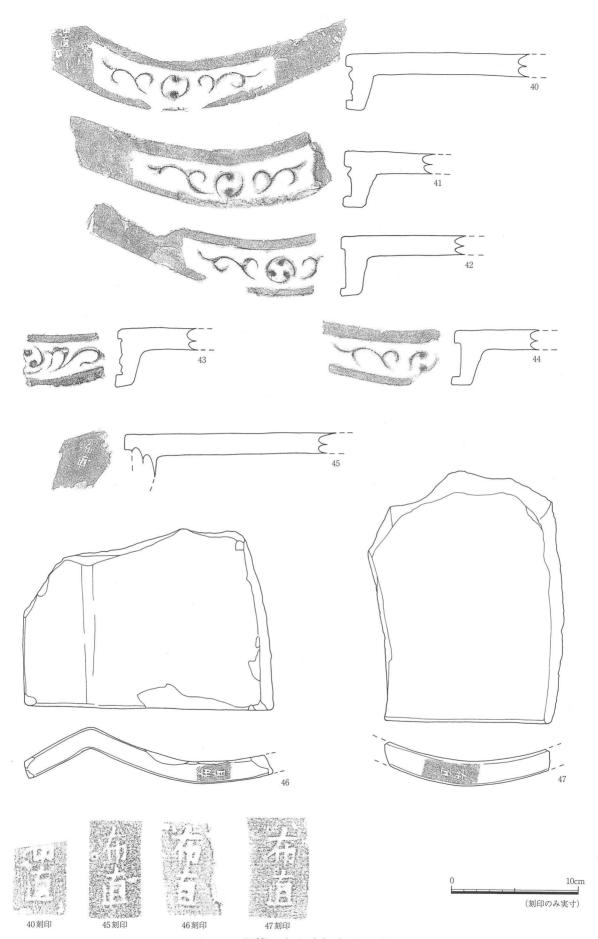


Fig.16 瓦溜2出土遺物実測図(2)

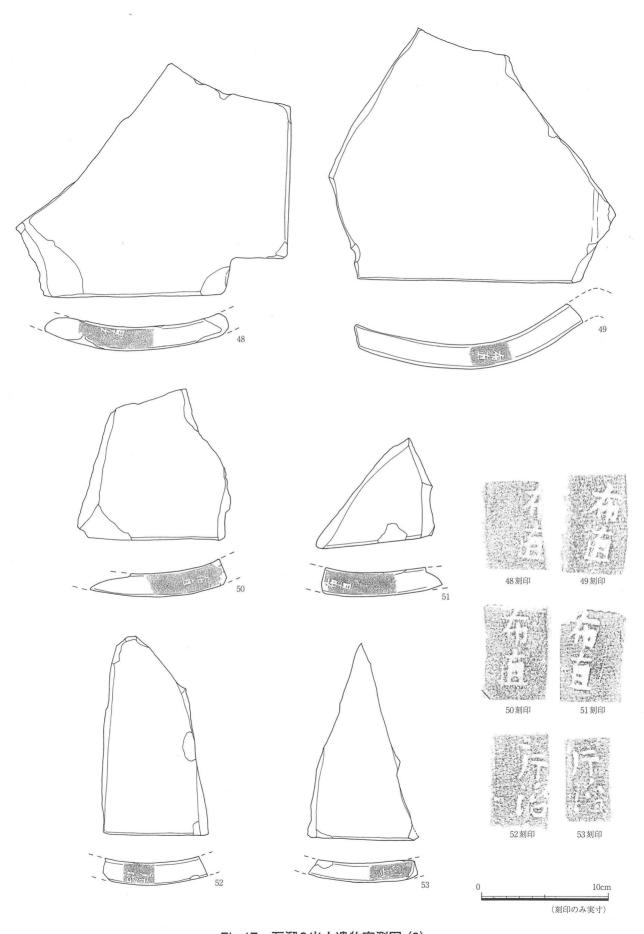
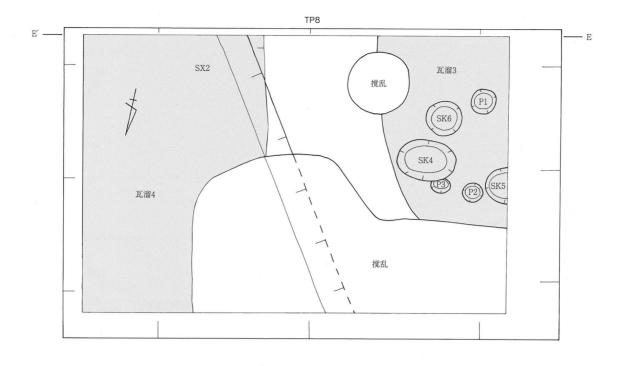


Fig.17 瓦溜2出土遺物実測図(3)



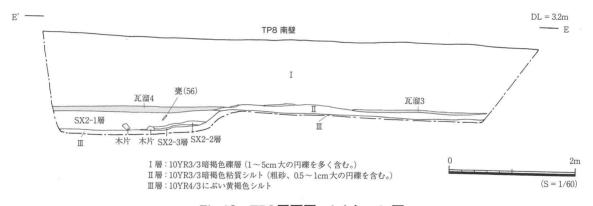


Fig.18 TP8平面図・セクション図

#### (2) 遺構と遺物

#### ①土坑

#### SK4 (Fig.18 · 19)

TP8の西部で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸94cm、短軸70cm、深さ8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は褐釉の陶器壺又は甕の体部片1点と土師質土器小皿である。

#### SK5 (Fig.18 · 19)

TP8の西部で検出された土坑である。西側が試掘坑外に出るため全体の規模と形態は不明であるが、南北長56cm、東西検出長36cm、深さ10cmを確認している。壁は緩やかに立ち上がり、床面

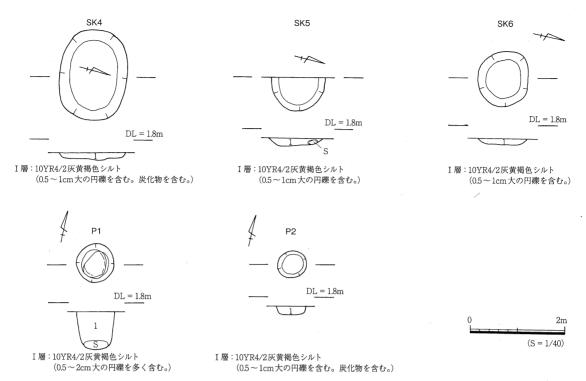


Fig.19 SK3~6・P1・2平面図・セクション図

はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿1点である。

#### SK6 (Fig.18 · 19 · 20)

TP8の西部で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸60cm、短軸52cm、深さ6cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は鉄釘1点(57)である。

2ピット

#### P1 (Fig.18 · 19)

TP8の西部で検出された。検出規模は径40cm、深さ38cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、床面から扁平な砂岩円礫が出土している。

遺物は上層から瀬戸・美濃産の太白手広東形碗と染付碗、肥前系の染付碗、陶器の灰釉碗、鉄釉壺が、下層から備前焼擂鉢が出土している。P1は19世紀に比定される。

#### P2 (Fig.18 · 19)

TP8の西部で検出された。検出規模は径30cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は土師質土器小皿、鉄釘である。

#### P3 (Fig.18)

TP8の西部で検出されたピットである。SK4と切り合うが前後関係は不明である。検出規模は径30cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は土師質土器小皿である。

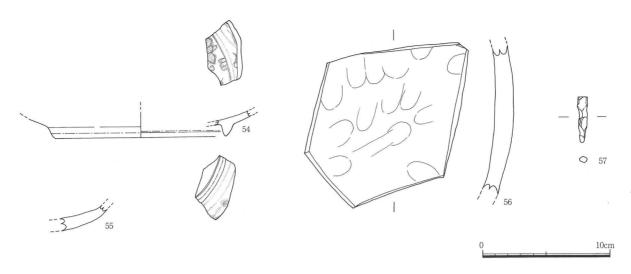


Fig.20 SK6·SX2出土遺物実測図 (SK6:57, SX2:54~56)

### ③性格不明遺構

#### SX2 (Fig.18 · 20)

TP8の東部で検出された落ち込み状の遺構である。西壁以外の三方が試掘坑外に出ているため全体の規模や形態は不明であるが、東西2.6m、南北4.4mを確認している。北側部分については上面が現代の攪乱によって削平されるが、床面付近の埋土の一部が残存しており、西壁が南東から北西に向かって延びることが分かる。切り合い関係では、19世紀の瓦溜4に上面を切られている。

深さは30cmを測り、壁は斜め上方に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。埋土は1層:粗砂と円礫を含むにぶい黄褐色粘質シルト、2層:褐灰色粘土、3層:腐蝕土で、最下層にあたる3層には木片と植物遺体が多く含まれている。こうした堆積状況等からみて、SX2は床面に水が溜まっていた池状の遺構や落ち込み状の遺構であった可能性が考えられる。

出土遺物は、景徳鎮窯の色絵皿、志野焼、備前焼甕で、何れも1層からの出土である。

図示したものは、54~56である。54は景徳鎮窯の古赤絵皿で、16世紀前半の製品である。内面に赤、緑の花唐草文を描き、外面にも文様の一部が見える。55は志野焼の体部片で、16世紀末から17世紀初頭のもの。56は備前焼甕の体部片である。

#### ④瓦溜まり

#### 瓦溜3 (Fig.18·21~28)

TP8の西部で検出された瓦溜まりである。西側が試掘坑外に出るため全体の規模は不明であるが、東西2m、南北3mまでの範囲を確認している。多量の瓦片が10cm前後の厚みをもって堆積しており、瓦片とともに炭化物、近世の陶磁器、土器等が出土している。

出土遺物は磁器染付中碗・大碗・小碗・小杯・小皿・五寸皿・鉢・盃台・中瓶、青磁染付中碗、色絵 染付蓋物蓋、陶器中碗・小碗・小皿・擂鉢・鍋・土瓶・土瓶蓋・蓋物蓋・甕・火鉢・火入れ・灯明受皿・ 鳥の水入れ、施釉土器のミニチュア、土師質土器杯・中皿・焙烙・焜炉・焼塩壺、瓦質土器焜炉、鉄 釘、硯、瓦である。

図示したものは、58~128である。

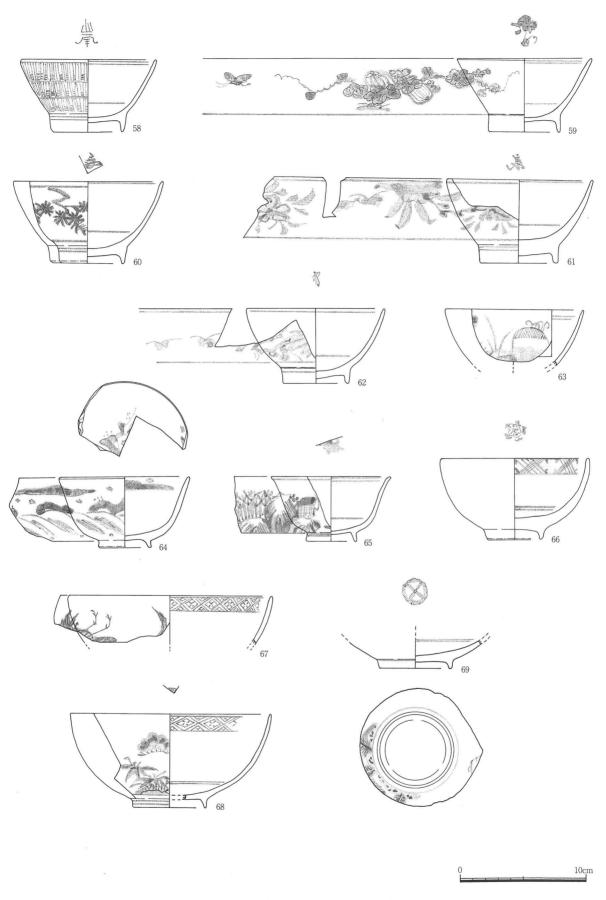


Fig.21 瓦溜3出土遺物実測図(1)

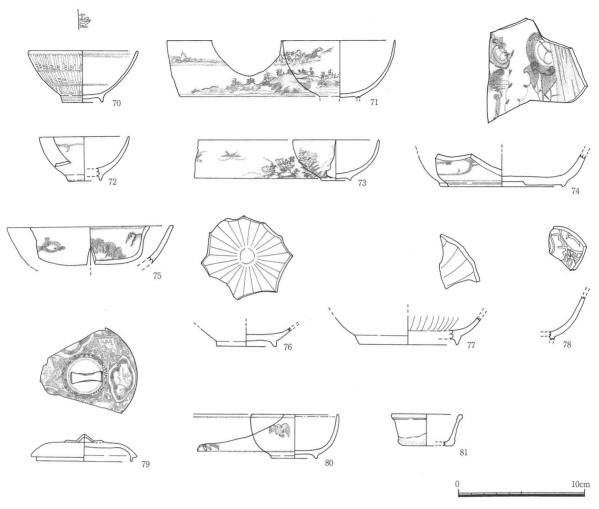


Fig.22 瓦溜3出土遺物実測図(2)

58~81は磁器。75は瀬戸・美濃産、その他は肥前産または肥前系である。

58~65 は染付中碗である。58~63 は広東形碗で、58 は暦手、59 は野菜文を描く。64 は端反形碗で、外面と口縁部内面に波と千鳥、見込みに岩と波を描く。65 は端反形碗で山水文を描くものか。66 は青磁染付の丸形碗で、口縁部内面に四方襷、見込みに手描きによる五弁花、高台内に渦福を描く。67・68 は肥前産の染付大碗。67 は外面に鶴、口縁部内面に四方襷を描くもの、68 は外面に松・竹、口縁部内面に四方襷を描くものである。69 は碗の底部で、外面に若松文を描くものである。70・71 は染付小碗。70 は広東形碗で暦手を描く。71 は肥前産の染付半球形碗で山水文を描くものである。72・73 は染付小杯。72 は肥前系の笹文小杯、73 は肥前産の浅半球形小杯で、草花文と蝶を描く。

74~77は皿。76・77は白磁の菊花形小皿である。74は染付の五寸皿で蛇の目凹型高台をもつ。 外面に連続唐草文、内面に山水文を描き、呉須は暗緑灰色に発色している。75は瀬戸・美濃産の太 白手の五寸皿である。内面に松と竹、外面に宝文を描き、呉須は暗緑灰色に発色している。78は白 磁の皿又は鉢で、内面に陽刻による花文を施す。

80は染付の蓋物で、外面に鳥と植物を描く。79は色絵染付の蓋物蓋。窓を呉須、草花文を上絵付

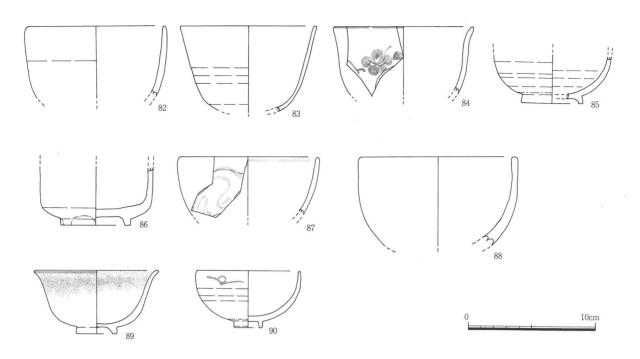


Fig.23 瓦溜3出土遺物実測図(3)

け、四方襷と唐草を赤絵の具で描き分けている。81は白磁で器種不明。型押し成形によるもので、 外面にチヂレ目が残る。

82~107は陶器。

82~88は中碗。82~85は尾戸窯の灰釉碗である。84は外面に梅文を描くもので、花弁を白土、枝を鉄錆で描き分けている。86は尾戸窯の鉄釉碗か。高台内を曲線的に削り出し高台内に渦状の鉋痕が残る。87は瀬戸・美濃産の太白手碗である。88は灰釉の丸形中碗で、灰釉は白濁する。89・90は小碗。89は信楽産の端反形小碗。灰釉を施釉し、口縁部内外面に緑釉を施す。高台内に墨書を認める。90は京都系の半球形小碗で、灰釉を施釉する。外面には鉄錆で略化した鳥文を描いている。

91は捏鉢である。92は堺産、93は堺・明石系の擂鉢である。94は鉄釉の鍋で、鉄釉を施釉し、外底を曲線的に削り出している。95も鉄釉の鍋で、尾戸窯又は能茶山窯の製品とみられる。96は灰釉の急須。外面上位に多段の強いロクロ目を巡らせている。97は灰釉土瓶で外面に白泥で花文を描く。98は鉄釉の土瓶。99は鉄釉の土瓶蓋で、摘みを花形に成形している。

100は丹波焼の甕で、外面に黒褐色の釉を施釉し、肩部から黒色の釉を流し掛けする。口縁端部から内面には灰釉を施釉する。101は関西系の鉄釉甕である。鉄釉はにぶい赤褐色で、肩部に黒色の釉を流し掛けする。102は器種不明。褐釉を施釉し、頸部の外面には丸彫による縦筋が巡らされる。103は底部の中央に円孔を穿つもので、植木鉢に転用されたものか。内底に砂目が残る。104は蓋物の蓋。灰釉を施釉し、外面には呉須、鉄錆、白土で菊花を描く。105は火入れ。外面に白化粧土を施した後、灰釉を施釉する。106は灰釉の灯明受皿で、内面に型押しによる菊花を貼付する。107は鳥の水入れである。小判形で、灰釉を施釉し、外底と口縁端部は無釉である。尾戸窯又は能茶山窯産の可能性をもつ。

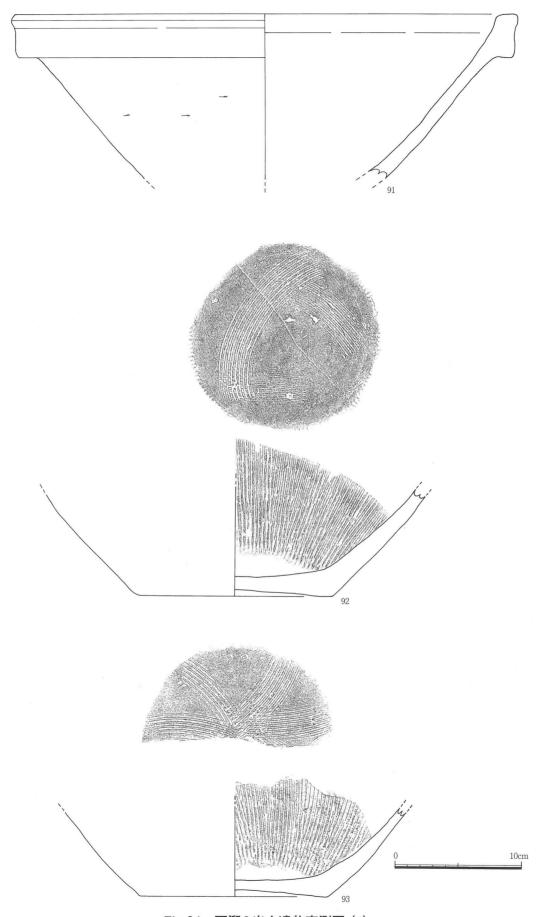


Fig.24 瓦溜3出土遺物実測図(4)

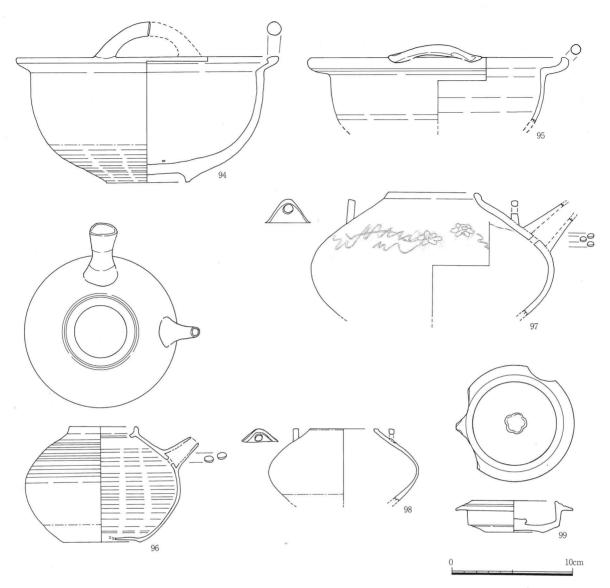


Fig.25 瓦溜3出土遺物実測図(5)

### 108~118は土器。

109は施釉土器で、片口を形取ったミニチュアである。型押し成形で、外面に緑色の低下度釉を施釉している。110は焼塩壺の蓋で、内面に布目痕が残る。胎土中には石英・長石・チャートの粗砂を含んでいる。108は関西産の焙烙である。111・112は関西系の土師質土器焜炉で、体部の前方に口縁部から切り込む窓を設け、内面には手捏ねによる突起を貼付する。113も土師質土器焜炉で、外底に墨書を認める。114は関西系の焜炉で、筒型のもの。体部前方に窓をもち、窓下側の受けは剥離している。底部には輪高台を貼付している。前面の下位には花状の透かしを設け、外面に赤彩を施している。115・116は焜炉のさなである。117・118は瓦質土器の焜炉である。117は体部の両側に松笠形の把手を貼付している。118は箱形で、体部の前方に四角形の窓を設ける。外底の四隅には脚を貼付する。

119~122は鉄釘である。

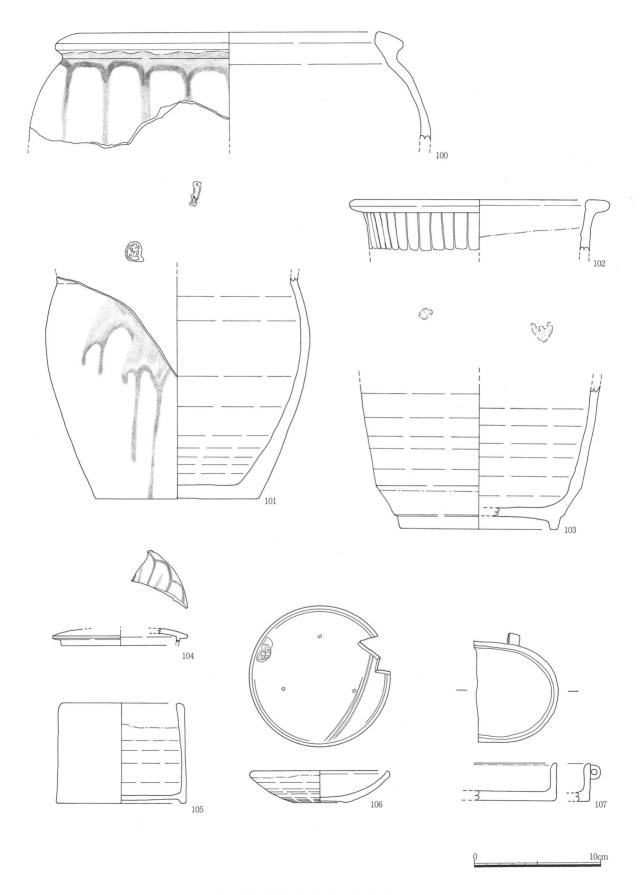


Fig.26 瓦溜3出土遺物実測図(6)

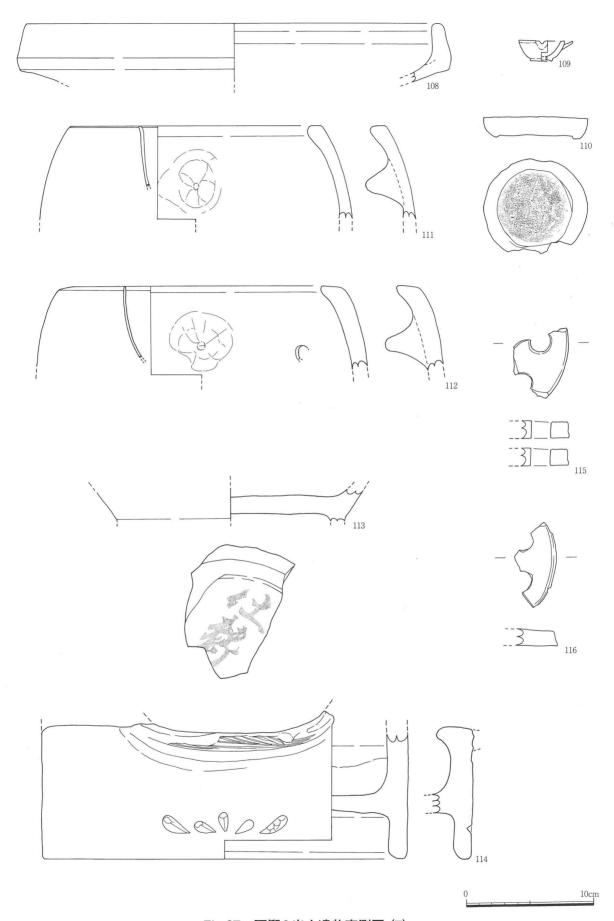


Fig.27 瓦溜3出土遺物実測図(7)

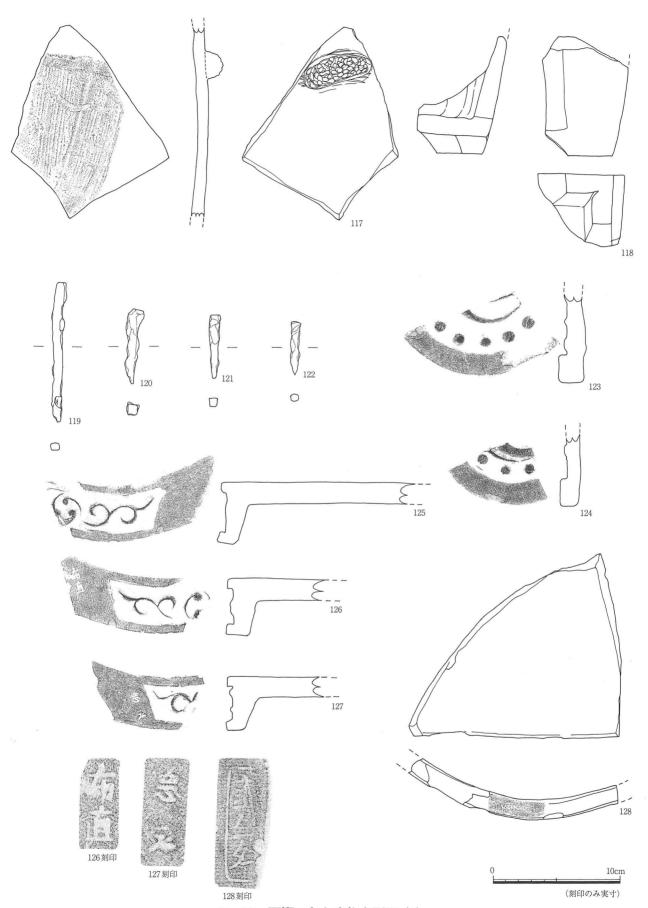


Fig.28 瓦溜3出土遺物実測図(8)

123・124は軒丸瓦、125~127は軒平瓦、128は平瓦である。126は瓦当に「布直」銘印をもち、布師田産(高知県高知市布師田)と推定される。128は角枠内「韮生□」の銘印をもち、韮生野産(高知県香美市香北町韮生野)の製品である。

図示したものの他に、瀬戸・美濃産の染付碗、瀬戸・美濃産の緑釉火鉢、備前焼擂鉢等が出土している。瓦溜3は19世紀前葉に比定される。

#### 瓦溜4 (Fig.18·29~42)

TP8の東部で検出された瓦溜まりである。東部以外の三方が試掘坑外に出るため全体の規模は不明であるが、東西2.9m、南北4.4mまでの範囲を確認している。15cm前後の厚みをもって多量の瓦片、炭化物、近世の陶磁器、土器等が出土している。

出土遺物は磁器染付碗・小碗・小杯・皿・鉢・猪口・碗蓋・瓶・蓋物・段重・水滴、白磁小皿・紅皿・ミニチュア、色絵磁器小碗・小杯、陶器中碗・小碗・小杯・碗蓋・小皿・鉢・擂鉢・捏鉢・片口・鍋・蓋物・土瓶・瓶・徳利・甕・溲瓶・火鉢・灯明受皿・水滴・餌鉢・鳥の水入れ・ミニチュア・植木鉢、土師質土器小皿・杯・中皿・羽釜・焙烙・焜炉・火消し壺・焼塩壺・人形・型、瓦質土器焜炉・火鉢、鉄釘、硯、銅製煙管、ガラス製品(簪か)、瓦である。

図示したものは、129~332である。

 $129 \sim 196$  は磁器。 $143 \sim 148 \cdot 151 \cdot 166$  は瀬戸・美濃産、153 は関西系、その他は肥前産または肥前系である。

129~153 は碗。129・130 は丸形碗で、130 は外面に草花文、口縁部内面には帯線と墨弾きによる 唐草文を配する。131 は肥前産の染付大碗で、外面に鶴、花、垣、口縁部内面に四方襷、見込みに 鶴を描く。132~138・141 は広東形碗。139 は肥前系の草花文碗である。140 は肥前産の端反形碗で、 外面に草文、見込みにコンニャク印判による五弁花文を描く。142 は端反形碗で、花文を描く。143 ~148 は瀬戸・美濃産の端反形碗である。149 は肥前産の丸形小碗で、外面に人物と竹、見込みに手 描きによる五弁花文を描く。150 は肥前産、151 は瀬戸・美濃産の端反形小碗、152 は蛍手の白磁小 碗である。153 は関西系の色絵小碗で、外面に赤、黒、その他による上絵付を施す。

154は肥前産の薄手酒杯で、内面に花文を描く。156~162は染付小杯。156は山水文、157は和歌を描く。155·163は色絵小杯。155は赤、緑の上絵付けによる花卉文が施される。163は赤、黒、その他による上絵付を施しており、輪郭を黒で描いている。

 $164 \sim 166$  は碗の蓋。 $164 \cdot 165$  は広東形碗の蓋で、164 は葡萄、165 は外面に松、内面に鷺を描く。166 は瀬戸・美濃産で、外面に唐草文、口縁部内面は帯線と墨弾きによる如意頭文を描く。

 $167 \sim 174$  は皿。 $167 \cdot 168$  は肥前系の染付小皿である。 $169 \sim 171$  は肥前系の五寸皿で、蛇の目凹型高台をもつ。 $169 \cdot 171$  は外面に連続唐草文、内面に山水文、170 は内面に松と竹を描く。172 は蛇の目凹型高台の染付小皿で、口錆。内面には雲鶴と山水文を描いている。173 は白磁の菊花形皿。174 は白磁の菊花形極小皿で口錆である。

175~178は鉢。175は肥前産の浅丸形鉢である。蛇の目凹型高台で、外面に連続唐草文、内面に草花文と手描きによる五弁花文を描く。176は芙蓉手の八角形鉢。177は六角形鉢で外面に植物、内面に宝文を描く。178は肥前系の端反形鉢で、外面に波、内面に不明文様を描く。

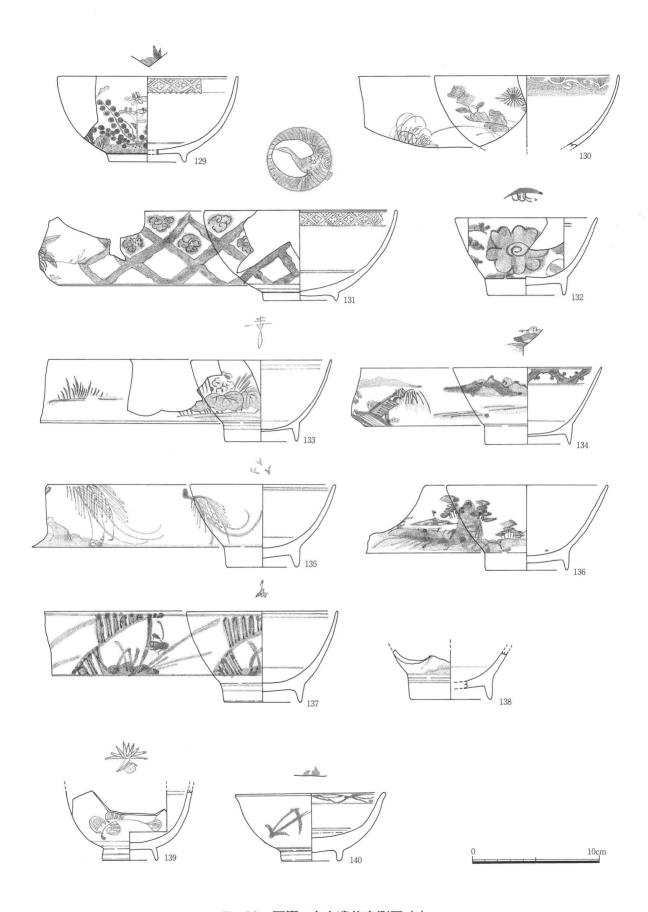


Fig.29 瓦溜4出土遺物実測図(1)

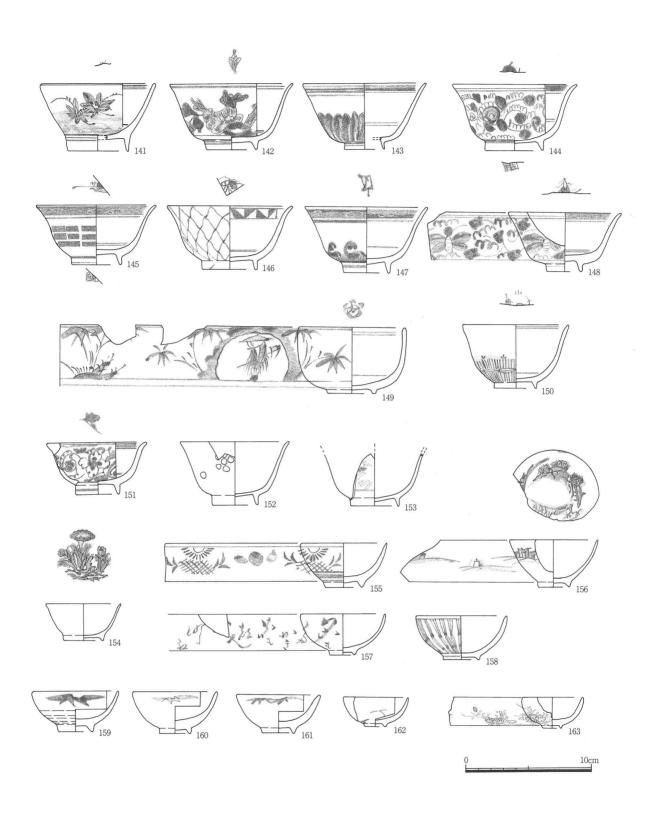


Fig.30 瓦溜4出土遺物実測図(2)

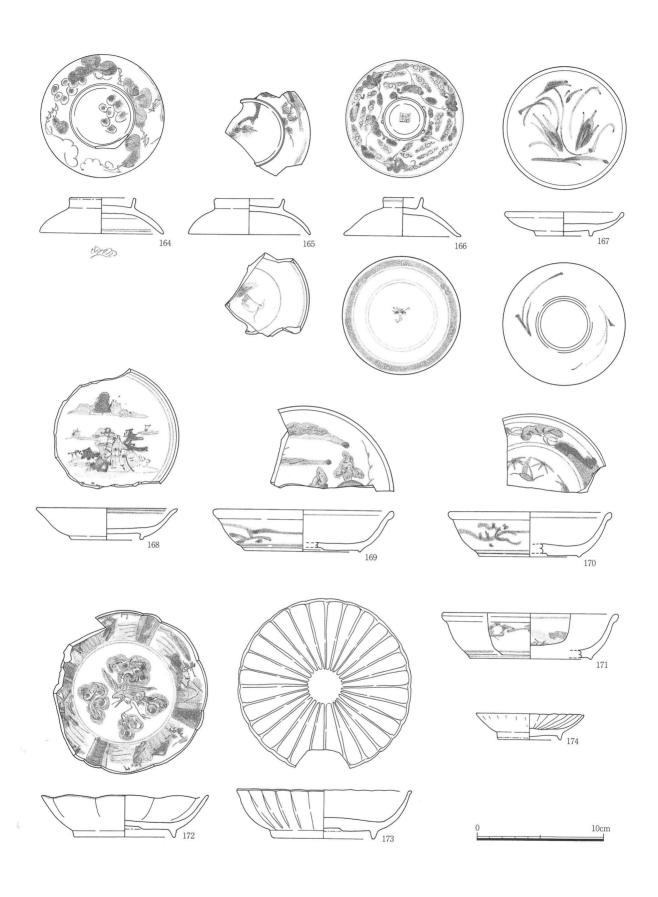


Fig.31 瓦溜4出土遺物実測図(3)

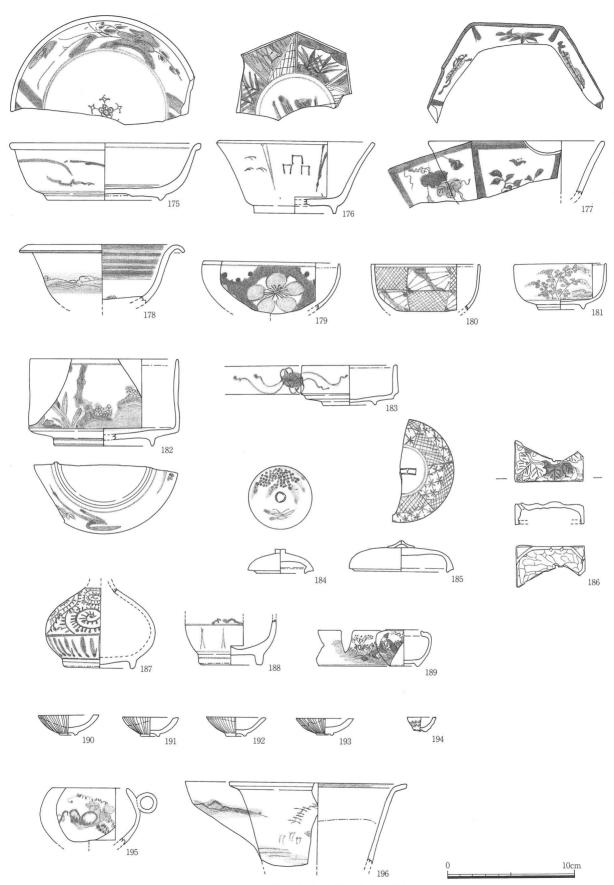


Fig.32 瓦溜4出土遺物実測図(4)

179~182は蓋物。179は肥前産の蓋物で梅と雪輪を描く。180は外面に半菊と網目、181は外面に草花文を描くものである。182は半筒形蓋物で、外面に草花と岩を描く。183は肥前産の段重で宝文を描く。184:185は蓋物の蓋で、184は草花文、185は外面に網目文と四方襷を描く。

186 は水滴で、陽刻による葡萄文を施す。187 は髪油壺で、外面は蛸唐草文である。188 は肥前系の瓶で、外面に唐草文と松葉を描く。190~193 は白磁紅皿である。195 は餌鉢か。外面に葡萄文を描く。

194は白磁のミニチュア。型押し成形で、外面には陽刻の蓮弁文を施す。189はミニチュアの壺で、外面に人物文を描く。196は植木鉢か。

197~268は陶器。

197~206・208~210 は碗。197~206 は尾戸窯の灰釉碗で、199 は焼成不良、197・198・200~204・206 は灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。205 は広東形碗で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉し、鉄錆で宝文を描く。201~203 は高台内に渦状の鉋痕が残る。207 は尾戸窯の碗又は鉢である。208 は京都系又は尾戸窯産の灰釉半筒形小碗である。209 は灰釉小碗で、尾戸窯産の可能性をもつ。高台内には墨書を認める。210 は関西系の灰釉端反形小碗である。211 は丸形の灰釉小杯で、尾戸窯産か。

212~214は皿。212は尾戸窯の灰釉中皿で、口縁部は溝縁状を呈する。見込み蛇の目釉剥ぎで、 釉剥ぎ部分には白泥を塗る。灰釉はオリーブ黄色を帯び、一部にオリーブ色の釉を流し掛けしてい る。213は見込み蛇の目釉剥ぎの鉄釉小皿である。釉は黒褐色に発色し、釉剥ぎ部分に白泥を薄く 塗る。外面上位には一条の沈線を巡らせている。尾戸窯又は能茶山窯の製品である。214も尾戸窯 の蛇の目釉剥ぎ鉄釉小皿である。

215 は尾戸窯の灰釉鉢で、口縁部を輪花形に作り出すものである。216 は鉄釉の捏鉢で、口縁を内側へ肥厚させる。暗赤灰色の釉を施釉している。217 は片口で、灰白色の白濁した釉を施釉する。218 は備前焼擂鉢である。

219は行平か。にぶい黄橙色を帯びる透明の釉を施釉し、三足を添付する。220も行平で、外面に 鉄釉を刷毛塗りし、飛鉋を施す。221は灰釉の鍋で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。222は 灰釉の鍋蓋で、外面上位に多条の沈線を巡らす。灰釉はにぶい黄橙色に発色している。

223~225・228~230は土瓶。223は外面に白化粧土施釉の後、灰釉を施し、体部上位に緑釉を流し掛けする。224は鉄釉土瓶で、体部上位に灰釉を流し掛けする。225は上位に多条の沈線を巡らせ、黒褐色の鉄釉を施釉する。228は灰釉土瓶で外面に白化粧土施釉の後、灰釉を施す。229も灰釉土瓶である。230は隠元形の灰釉土瓶。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉し、白土のイッチン描きで草花文を描く。226は尾戸窯又は能茶山窯産の土瓶蓋で、黒褐色の釉を施釉する。227も鉄釉の土瓶蓋である。

231は備前の人形徳利である。胴部を窪ませ、型作りによる布袋を貼付する。232は瓶で、白化粧土施釉の後、灰釉を掛ける。233は関西系の鉄釉甕。釉は褐色で、黒色の釉を肩部から流し掛けする。234は壺又は甕の底部で、鉄釉を施釉する。235は尾戸窯産の灰釉小瓶。胎土は灰白色で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。236は鉄釉の小壺で、釉は暗褐色に発色する。237は鉄釉の瓶

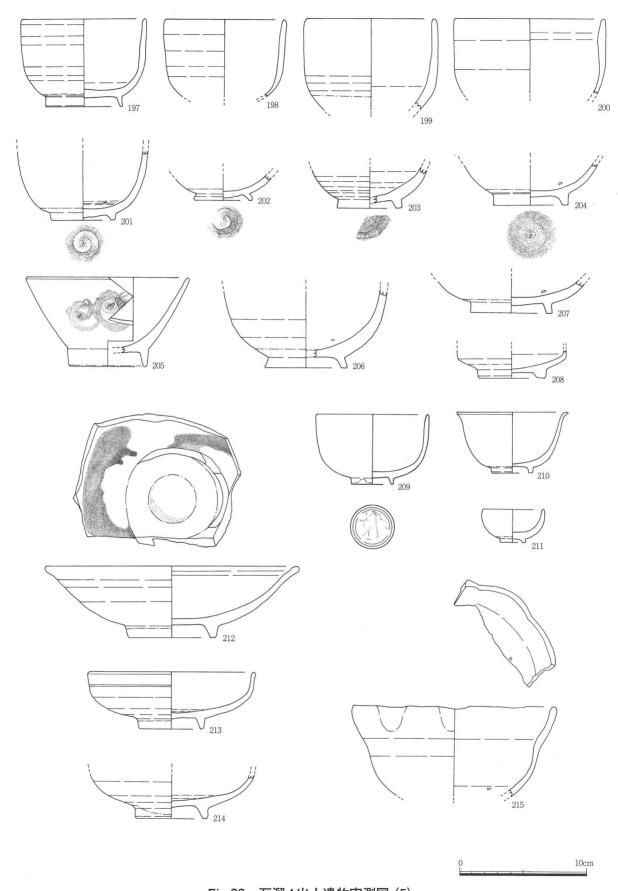


Fig.33 瓦溜4出土遺物実測図(5)

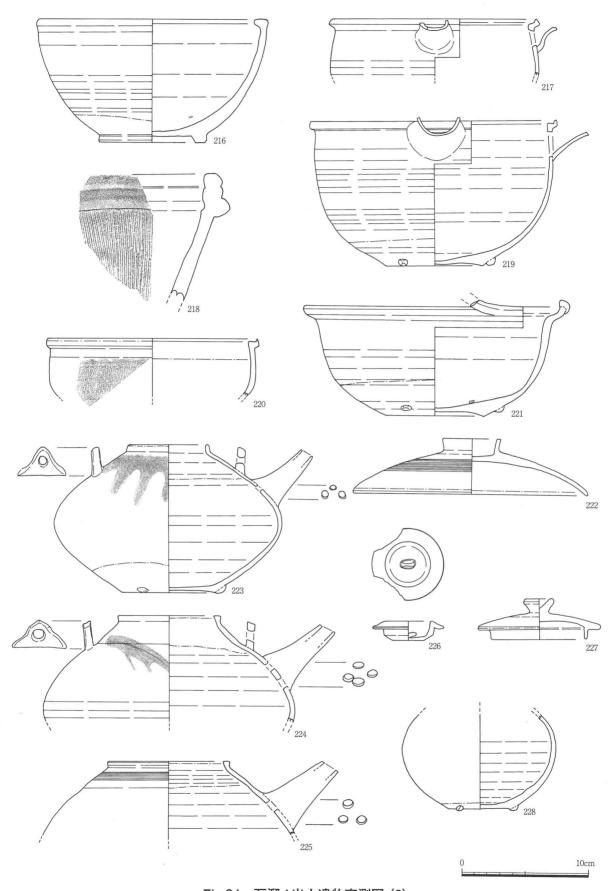


Fig.34 瓦溜4出土遺物実測図(6)

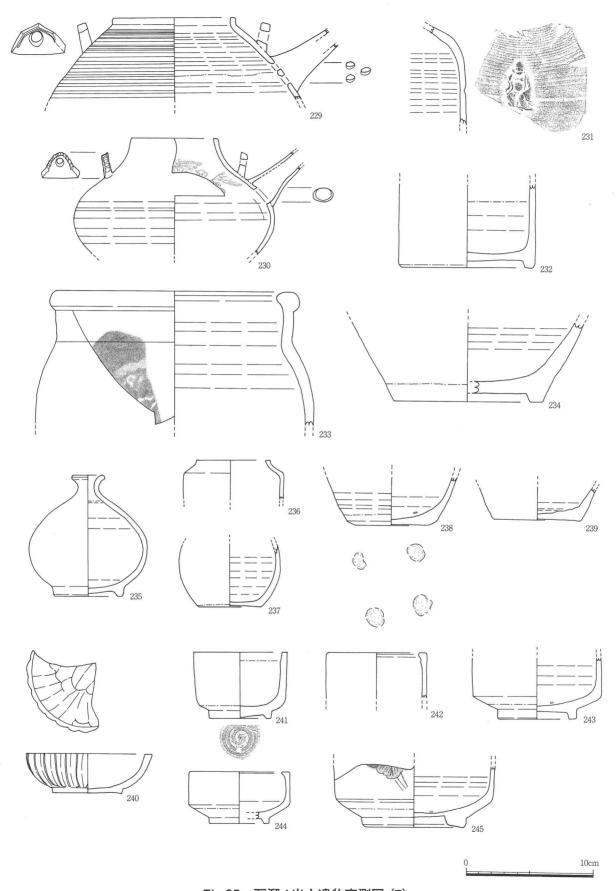


Fig.35 瓦溜4出土遺物実測図(7)

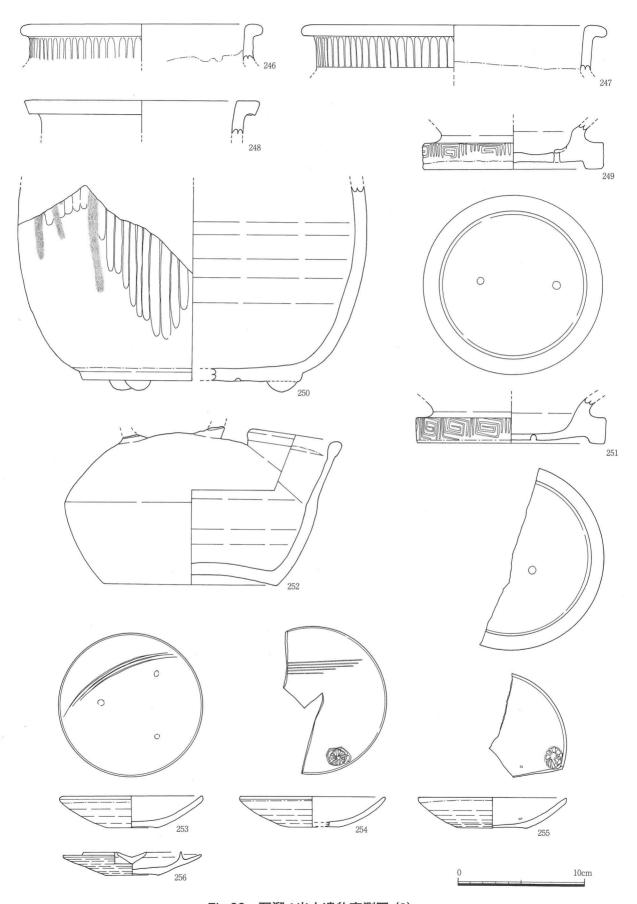


Fig.36 瓦溜4出土遺物実測図(8)

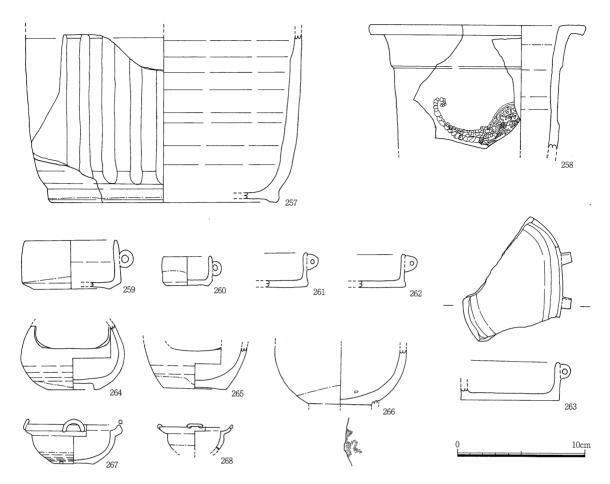


Fig.37 瓦溜4出土遺物実測図(9)

で、釉は黒褐色に発色する。238は瓶類か。鉄釉は褐色に発色する。内底に目痕3足、外底の4箇所に団子状の砂目痕が残る。239は鉄釉の瓶で、釉は暗赤褐色に発色する。

240~242・244は蓋物。240は菊花形の灰釉蓋物で尾戸窯産か。型押し成形で、外面に型による菊弁を施す。灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。241は尾戸窯の灰釉蓋物。外面は灰黄色に発色し、高台内に乱れた渦状の鉋痕が残る。242は尾戸窯又は京都系の灰釉蓋物で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。244は関西系の灰釉蓋物である。243は尾戸窯の中碗又は蓋物で外面は灰黄色に発色する。245は器種不明の底部。灰釉を施釉し、外面に呉須絵を描く。

246・247・249~251 は火鉢で、何れも瀬戸・美濃産である。250 は外面に丸彫りによる縦筋を施す。淡黄色を帯びる灰釉を施釉し、部分的に青色の釉を流し掛けする。内面は錆釉を刷毛塗りする。248 も瀬戸・美濃産で、器種不明。252 は鉄釉の溲瓶で、釉は黒褐色に発色する。

253~256は灯明受皿。254·255は京都系の灯明受皿で、内面に櫛目を施し、菊花を貼付する。灰 黄色を帯びる半透明の釉を施釉している。253·256は関西系の灯明受皿である。

257は器種不明。外面に丸彫りによる縦筋を巡らせ、鉄釉は褐灰色に発色している。胎土は黄灰色を呈する。258は瀬戸・美濃産の植木鉢で、外面に陽刻文様が施される。緑色の釉を施釉している。

259・260は灰釉の餌鉢。261~263は灰釉の鳥の水入れで尾戸窯産か。264・265は体部前方に楕円形の窓をもつもので、鉄釉は褐色に発色し、胎土は灰白色を呈する。尾戸窯の製品である。266は器種不明の底部で、高台内に墨書が残る。267・268はミニチュアの鍋。267は胎土が黄灰色を呈し、にぶい赤褐色の鉄釉を施釉する。268は灰白色の胎土をもち、褐色の鉄釉を施釉している。

269~322は土器。

280 は土師質土器の杯である。内外面回転ナデで、外底の周縁にナデを施している。269 は椀状の 形態をもつもので、内外面回転ナデの後、外面下半に回転ケズリを施している。内底に焦げ痕が残 る。

270~274は土師質土器小皿。270は内外面回転ナデで、外底に回転糸切り痕が残る。口縁部には 灯芯油痕を認める。271~274は尾戸窯産の土師質土器小皿で、外面下半と外底に回転ケズリとナデ を施すものである。胎土は橙色またはにぶい橙色に発色している。271・272は内底に不定方向のナ デを加えている。

275~279は土師質土器中皿で、尾戸窯産とみられるものである。275は外面下半と外底に回転ケズリを施し、胎土はにぶい橙色である。276・278は外面下半と外底に回転ケズリ、内底に直線方向のナデを施し、胎土は橙色を呈する。外底に焦げ痕が残る。277は外面と外底に回転ケズリとナデを施し、胎土は淡い橙色を呈する。279は薄手の作りで、外面下半に回転ケズリを施す。外底に焦げ痕が残る。

286~292は焼塩壺、281~285は焼塩壺の蓋である。蓋281・282・284・285、身286・287は関西産で、胎土中に石英・長石・金雲母他の粗砂を含む。286・287は外面ナデ調整で、内面に粗い布目痕が残る。286は外底に粘土塊の貼付痕が明瞭に残り、287も外底に粗いユビオサエ痕が残っている。蓋283・身288~292は産不明で、胎土中に石英・長石・チャート(灰色)他の粗砂を含むものである。288~292は内外面ともにナデ調整を施しており、289・291・292は体部内面と内底に工具による回転方向のナデが認められる。外底はユビオサエとナデである。285は上面に墨書を認めている。

293~295は土師質土器の焙烙、297・298は瓦質土器の焙烙である。293~295は口径が約30cm、297・298は約19cmの小型のものである。293~295は内面と口縁部外面が回転ナデで、外底は型によるチヂレ目や凹凸が残る。297・298は内面回転ナデ調整で、外面は口縁端部の直下までチヂレ目や凹凸が残っている。299は土師質土器の羽釜で、灰白色の胎土をもつ。底部は厚手で、外面下半と外底に回転ケズリを施している。296は土師質土器で、把手の部分か。300は火消し壺、301は不明土器の部品である。

302~311は土師質土器の焜炉。302~307は丸形の体部に輪高台を貼付するもので、303は前方に 楕円形の窓を認める。308は筒型の焜炉で、前方に窓をもち窓の下部に受けを貼付する。外面に赤 彩を施している。309は筒型の焜炉で、体部内面の中位に断面三角形の突帯を貼付している。310も 筒型の体部をもつもので、内面中位に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ調整、体部外面に はチヂレ目が残る。311は練り込み手の土師質土器焜炉で、窓の形状は不明である。312・313は焜炉 のさなである。314・315は瓦質土器の焜炉。314は箱形で体部前面に四角形の窓をもつ。315は箱形 で、松笠形の把手を貼付している。

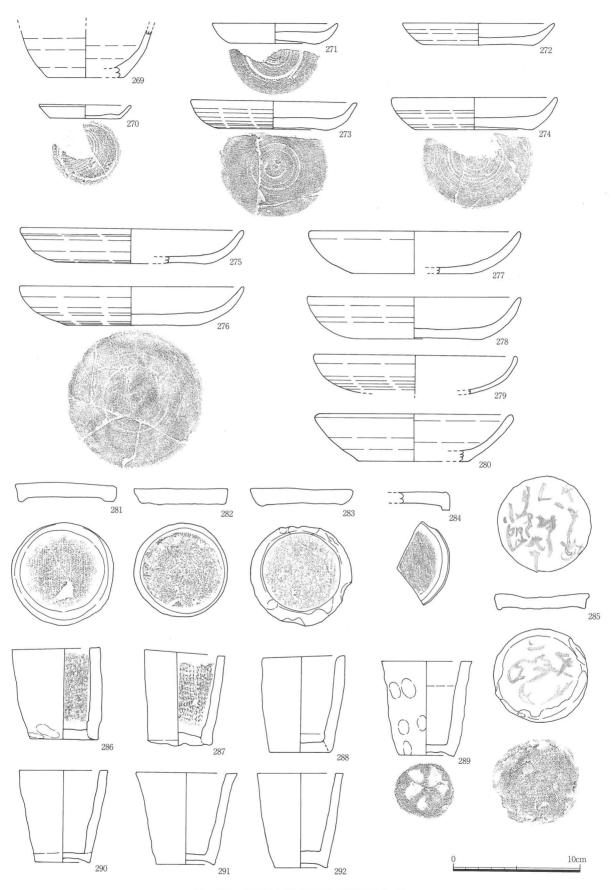


Fig.38 瓦溜4出土遺物実測図(10)

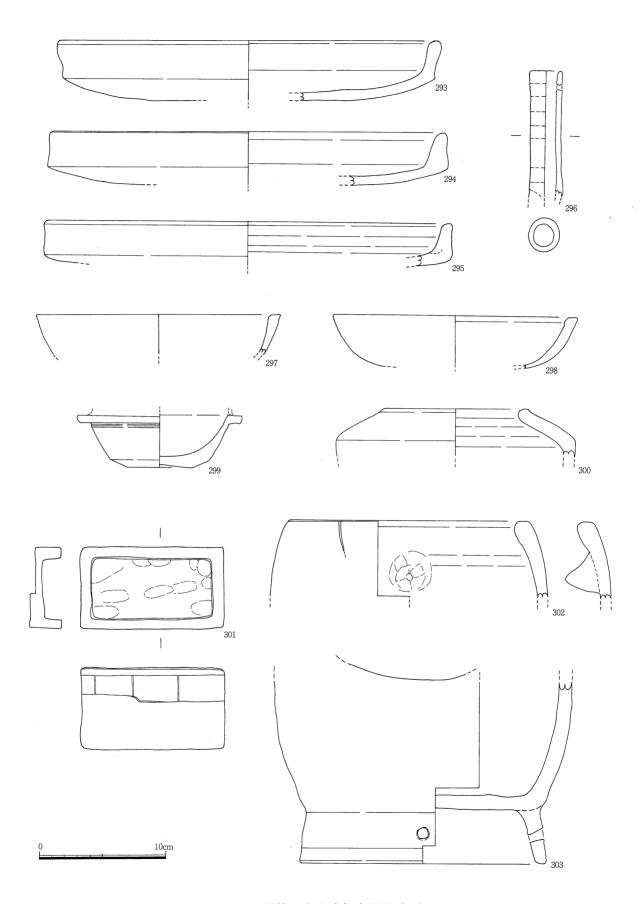


Fig.39 瓦溜4出土遺物実測図(11)

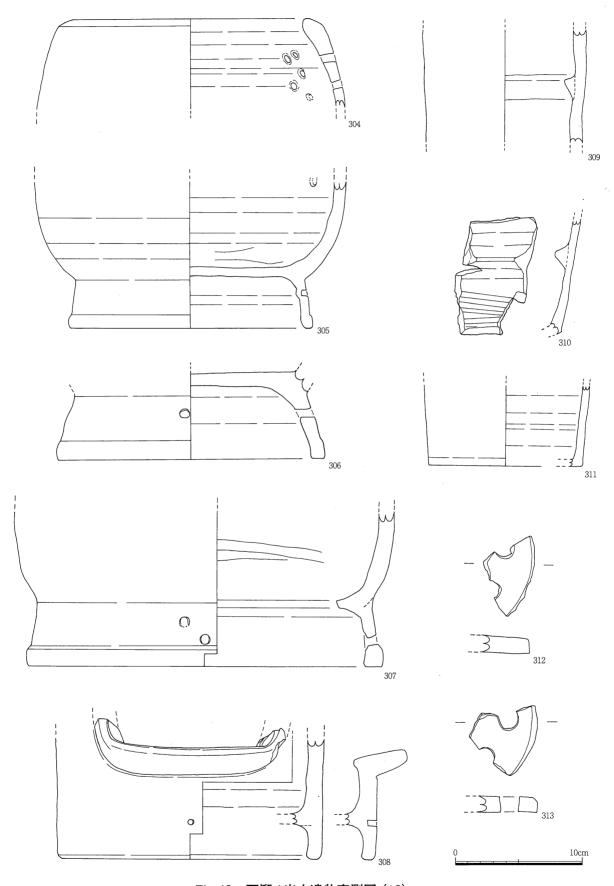


Fig.40 瓦溜4出土遺物実測図 (12)

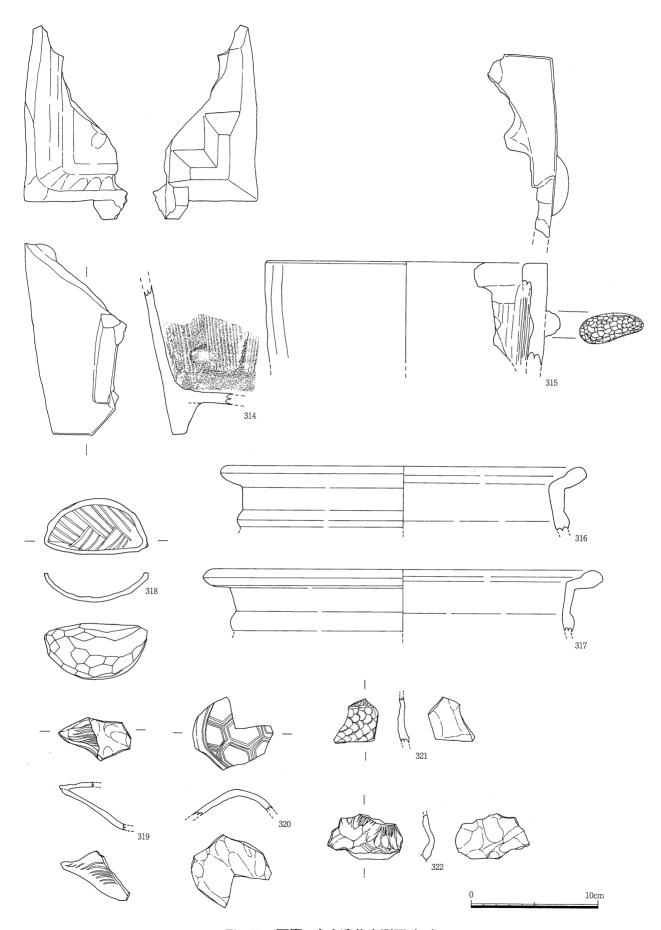


Fig.41 瓦溜4出土遺物実測図(13)

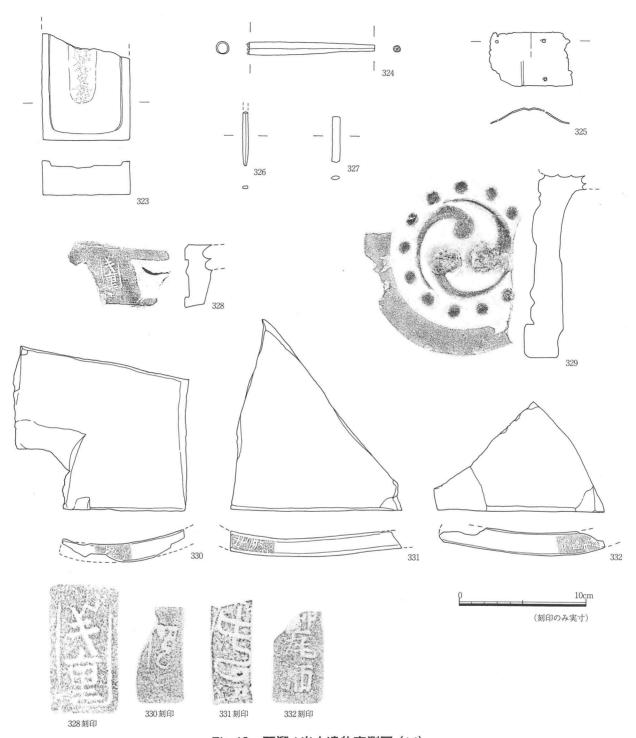


Fig.42 瓦溜4出土遺物実測図(14)

316・317は瓦質土器の火鉢で、外面にミガキ、内面に回転ナデを施す。

319~322は土師質土器の人形である。319は鳥、320は亀、321は魚、322は人物で、何れも中空で、型作り貼り合わせによる。胎土はにぶい橙色またはにぶい黄橙色に発色している。318は土師質土器の型で、内面に凸状の松笠の文様が入る。外面に面取りを施し、内面にはチヂレ目が残る。

323は硯で、海部を欠損する。324は銅製の煙管吸口。325は用途不明の銅製品。薄い板状で、両

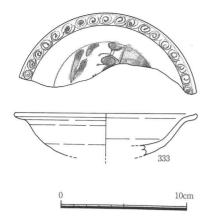


Fig.43 TP8包含層Ⅱ層出土遺物実測図

端に円孔を穿つ。326はガラス製の簪で、先端部は丸みをもつ。327もガラス製品で、簪か。

329は軒丸瓦、328は軒平瓦、330~332は平瓦である。 328は角枠内「アキ重」銘印をもち、安芸産(高知県安芸市)である。331は「中己」銘印をもつ。332は「御瓦師」 銘印をもち、安芸産(高知県安芸市)である。

## ⑤包含層出土の遺物 (Fig.43)

333は初期伊万里の皿で、口縁部内面に渦文を描く。 包含層Ⅱ層からの出土である。

### 7. TP9

調査区の南部に設定した試掘坑である。該当地点は、平成13年度に高知県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った高知城伝下屋敷跡の調査区北側に接している。そのため、両調査区の関連性を確認するために、幅2mのトレンチを東西12mにわたって掘削し検出作業を行った。

高知城伝下屋敷跡の調査では、17世紀~18世紀初めの遺物を含む瓦溜まりや焼土層、江戸前期の 堀跡の存在が報告されているが、本試掘坑においても同様に、焼土と被熱した瓦片を含む遺構SX1 を検出した。

#### (1) 層序 (Fig.44)

近・現代の整地層(I 層)と攪乱の下面で、近世の遺物包含層である II 層: 灰黄褐色シルト層 (標高  $2.1 \text{m} \sim 2.4 \text{m}$ ) を検出した。 II 層の下面には、 II 層: にぶい黄褐色シルト層 (標高  $1.9 \text{m} \sim 2.1 \text{m}$ )、 IV 層: 褐灰色粘質シルト層 (標高 1.0 m 以下  $\sim 1.9 \text{m}$ ) が堆積している。

焼土を含む遺構SX1は、Ⅲ層を掘り込んでおり、SX1の上面にⅡ層が堆積している。

SX1との関係からみて、Ⅱ層は江戸中期以降、Ⅲ層、Ⅳ層は江戸前期またはそれ以前の堆積層と考えられる。Ⅳ層からは土師質土器片が少量出土している。

#### (2) 遺構と遺物

#### ①性格不明遺構

#### SX1 (Fig.44 $\sim$ 46)

TP9の西部で、遺構の西壁を検出した。南北長2m、東西長7.3mまでを確認したが、調査区上の制約から、南北と東側の壁は未検出である。深さは80cmを測る。床面はほぼ平坦で、西壁は斜め上方へ緩やかに立ち上がっている。埋土は1層:焼土ブロックと炭化物を多量に含む暗赤褐色シルト、2-1・2-2層:焼土ブロックと炭化物を含むにぶい黄褐色粘質シルト、3層:焼土ブロックを少量含むにぶい黄褐色粘質シルトである。このうち、2-2層は瓦片を多量に含んでおり、2-1層からも少量の瓦片が出土している。

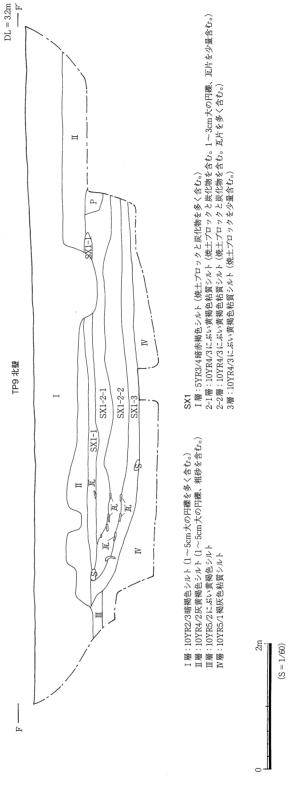
出土遺物は磁器染付碗・皿・鉢・壺、青磁猪口又は碗・瓶、陶器碗・小皿・擂鉢・瓶、土師質土器 小皿、瓦である。

図示したものは334~348・350・351・353~365である。このうち、334・335・337・338・340~

 $343 \cdot 346 \sim 348 \cdot 350 \cdot 351$  は最上位の焼土層  $(1 \, \mathbb{R})$  からの出土、 $336 \cdot 339 \cdot 344 \cdot 345 \cdot 353 \sim 361$  は中層  $(2 \cdot 2 \, \mathbb{R})$  から多量の瓦片とともに出土したものである。また、359 は $3 \, \mathbb{R}$  から出土したものである。これらのうち  $341 \cdot 343 \cdot 347 \cdot 348 \cdot 351 \cdot 359$  は二次被熱によって釉が変質している。

334~348・350・351は磁器。何れも 肥前産である。334は染付の半筒形中碗 で、山水文を描くものか。335は染付中 碗。336は染付碗か。内面に寿字文、高 台内に角枠内福銘をもつ。337は青磁の 猪口又は碗で、釉は明緑灰色に発色する。 338は青磁中碗で明緑灰色の釉を施釉す る。339は青磁猪口又は碗である。340 は染付の変形皿で、外面に笹文を描く。 341は染付の丸形小皿である。薄手で、 外面に唐草文、内面に松を描く。342は 染付の皿または鉢で、外面に草文を描く。 343 は染付の丸形中皿で、外面に花唐草 文、内面に籠と草花、水を描く。344は 青磁の変形皿で、内面に陽刻文様を施 す。345は青磁の鉢又は変形皿である。 ともに釉は明緑灰色に発色する。346は 染付磁器の底部で器種不明。内面は無釉 である。347は鉢か。外面に梅文を描く。 348・350は青磁で器種不明。内面は無釉 である。351は染付壺で、頸部に縞と雷 文、体部外面に桐文を描く。

353~359は陶器。353·354は肥前産の 褐釉碗で、354は黒褐色の釉を施釉する。 355は肥前産の灰釉丸碗で、浅黄色を帯 びる半透明の釉を施釉する。356·357は 唐津系灰釉陶器の小皿である。358は擂 鉢。359は鉄釉の小瓶で、釉は二次被熱



によって変質している。

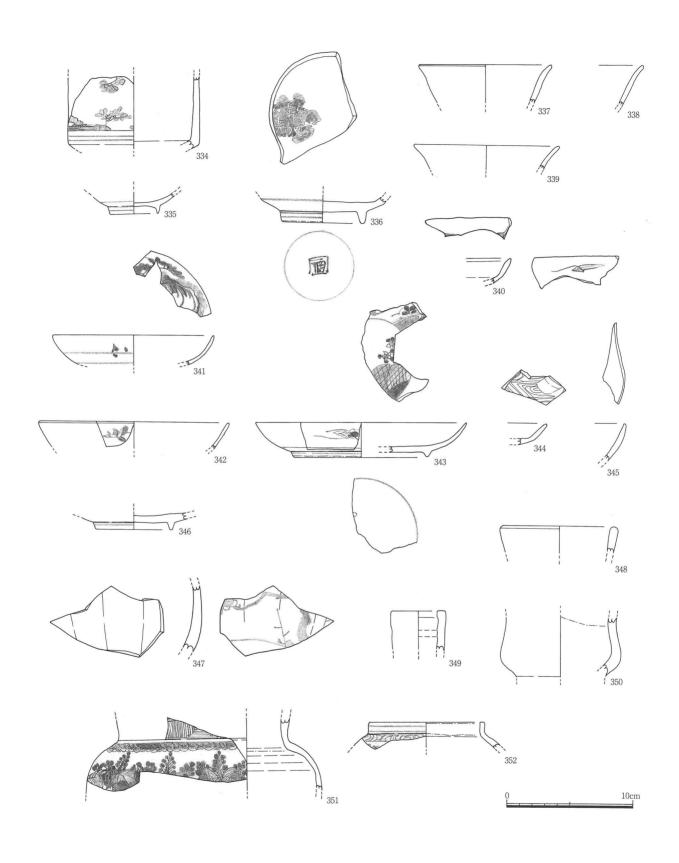
360・361 は土師質土器小皿である。

 $362 \sim 364$ は軒丸瓦、365は軒平瓦である。図示したものの他にも、 $21 \cdot 2 \cdot 2$ 層内から瓦片が多量に出土しており、二次被熱によって変色したものが多く認められた。出土した瓦片のうち、平瓦は厚手のものが多く含まれる。また、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦とも銘印をもつものは確認できなかった。

SX1からは17世紀初頭~18世紀前葉の遺物が出土している。これらの内容より、SX1は18世紀前葉に比定される。

## ②包含層出土の遺物 (Fig.45)

349・352は包含層Ⅱ層出土の遺物である。349は肥前産の青磁瓶、352は肥前産の染付壺である。



**Fig.45 SX1・TP9 包含層 Ⅱ 層出土遺物実測図** (SX1:334~348·350·351, Ⅱ 層:349·352)

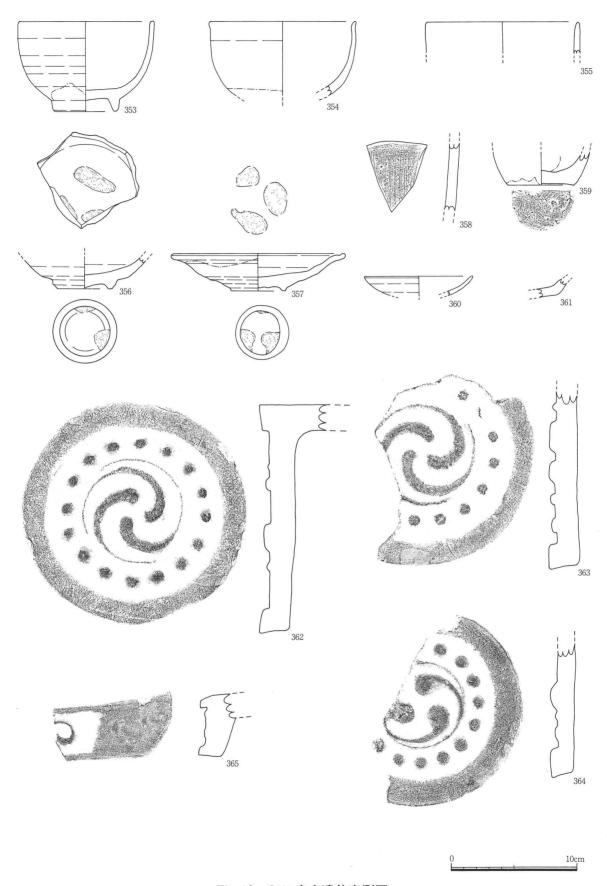


Fig.46 SX1出土遺物実測図

## Tab.1 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版	出土		BE ##	法量 (cm)							備考(生産地・
番号	地点	種類	器種器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
1	SK1	磁器 染付	IIIL	_	_	_	_	外) 白 断) 白	外) 梅文 内) 花文 高台外) 多重圏線	口縁部輪花形。	肥前産
2	SK1	白磁	水滴		_	_	_	外) 白 断) 白	鳥か	型押し整形貼り合わせ。上部に 穿孔。内面ユビオサエ・ユビナデ。 内面と外底無釉。	肥前産
3	瓦溜1· SK1 下層	磁器 染付	Ш		-	6.8	_	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰N7/	内) 草花文		肥前産
4	SK1床	陶器	蓋	笠部 径 一	3.6	摘み 径 2.3	_	外) 黒 2.5 Y 2/1 断) 灰白 2.5 Y 7/1	鉄釉	宝珠形の摘みをもつ。回転糸切り。鉄釉は黒褐色で、薄く掛かる部分はオリーブ褐色に発色。	
5	SK1 下層	陶器	小瓶	_	_	3.4		外) 黒褐10YR3/1 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	内面ロクロ目。外底回転糸切り。 内面無釉。黒褐色の釉。	
6	SK1 下層	陶器	擂鉢	30.2	11.5	12.6	_	外) 灰赤10R4/2 断) 黄灰2.5Y6/1	焼締め	口縁部外面に凹線。外面回転ナデ、内面回転ナデ・横目。外底ナデ。	備前
7	TP6 瓦溜1	磁器染付	中碗端反形	10.8	5.8	4.4	_	外) 白 断) 白	外) 草花文 口縁内) 多重圏線 見込み) 宝文 高台外) 二重圏線	呉須は青灰色。透明釉は貫入が 入る。	能茶山窯 1820年代~幕末
8	TP6 瓦溜1	磁器 染付	中碗端反形	10.4	5.7	4.4	_	外) 白 断) 白	外) 宝文 口縁内) 雲 見込み) 宝文か	胎土は透明感をもつ。	関西系
9	TP6 瓦溜1	磁器 染付	中碗 広東形			6.0	_	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 不明 高台外) 二重圏線 見込み) 不明	呉須は青灰色。透明釉は貫入が 入る。	肥前系 1780年代~幕末
10	TP6 瓦溜1	青磁 染付	中碗	ı	_	5.5		外) 明緑灰 10GY7/1 断) 白	外) 青磁釉 見込み) 二重圏線 ・唐草文	青磁釉は明緑灰色。	肥前産 18世紀後半
11	TP6 瓦溜1	白磁	小杯	7.0	3.0	3.0	_	外) 白 断) 白		透明釉は灰白色を帯びる。	肥前系
12	TP6 瓦溜1	青花	Ш.	_	_	_		外) 白 断) 白	内) 芙蓉手	呉須は暗青色。部分的に口縁端 部の釉が剥がれる。	景徳鎮窯系 17世紀前葉~ 中葉
13	TP6 瓦溜1	青磁染付	碗蓋	笠部 径 10.6	3.3	摘み 径 4.5	_	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 青磁釉 内) 四方襷・二重 圏線・銀杏 摘み内) 角枠内渦 福		肥前産18世紀後半
14	TP6 瓦溜1	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 12.8	_	摘み 径 3.6	かえり 径 10.8	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外)山・丸に山水 文	摘みを貼付する。内面ロクロ目。 かえりは無釉で灰白色の砂が付 着する。	肥前系
15	TP6 瓦溜1	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 13.0	_	摘み 径 4.6	かえり 径 12.0	外) 白 断) 白	外) 笹・蝶・不明	摘みを貼付。	肥前系
16	TP6 瓦溜1	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 9.5	3.4	摘み 径 4.0	かえり 径 8.4	外) 白 断) 白	外)圈線	摘みを貼付する。かえり無釉。 呉須は青灰色。	肥前系
17	TP6 瓦溜1	磁器 染付	蓋物	12.0	-	_	_	外) 白 断) 白	外) 笹 · 蝶 · 不明	口縁内面と端部無釉。	肥前系
18	瓦溜1	磁器 染付	水滴か	_	_	_	_	外) 白 断) 白	外) 陽刻文様	型押し成形。内面ナデ・ユビオサ エ。内面と外底無釉。	肥前産
19	TP6 瓦溜1	磁器 染付	火入れ	12.4	_	_	_	外) 白 断) 白	外) 山水文	焼成不良で透明釉は白濁する。 呉須は灰オリーブ色に発色。	肥前系
20	TP6 瓦溜1	陶器	中碗丸形	12.2	7.9	5.0	_	外) 淡黄 2.5Y8/3 断) 灰白	灰釉	高台施釉。淡黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
21	TP6 瓦溜1	陶器	鍋	16.6	-	_	_	外) オリーブ黄 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内面施釉。かえり無釉。オリーブ黄色を帯びる透明の釉で1mm 前後の貫入が入る。	
22	TP6 瓦溜1	陶器	行平	_		_	_	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰白5Y8/1	把手) 陽刻による 唐草文	把手は型作り貼り合わせによる。 かえり無釉。灰オリーブ色を帯 びる半透明の釉で貫入が入る。	
23	TP6 瓦溜1	陶器	土瓶蓋	笠部 径 7.8	2.9	摘み 径 1.2	かえり 径 5.8	外) 明緑灰 10GY8/1 断) 灰 5Y6/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰オリーブ 色を帯びる透明の釉。釉は部分 的に焼成不良で白濁。	尾戸窯か
24	TP6 瓦溜1	陶器	火鉢	_	_	8.8	_	外) 浅黄5Y8/3 断) 灰白5Y8/1	灰釉外) 灰釉・青 緑色の釉流し掛け 高台内) 鉄錆刷毛	外底に径4mmの貫通しない穿孔 あり。外面に多段の強いロクロ 目。外面に浅黄色を帯びる灰釉を 施釉後、青緑色の釉を流し掛け。	瀬戸・美濃産
34	瓦溜2	磁器 青磁 染付	中碗平形	11.4	4.8	3.6	_	外) 明緑灰7.5Y7/1 断) 白	外) 青磁釉 内) 松	呉須は青色。	肥前系近代か
35	瓦溜2	磁器染付	小碗	8.0	_	_	_	外) 白 断) 白	外)松・梅・波と 亀 口縁内)山水文	呉須は鮮やかな青色。	肥前系

## Tab.2 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土		BB #新		法量	(cm)					備考(生産地・
	地点	種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色 調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
36	瓦溜2	磁器 染付	壺又は 火入れ	_	_	7.8	_	外) 灰白5Y8/1 断) 白		内面ロクロ目。内面と高台内無 釉。焼成不良気味で透明釉は白 濁。内底に灰白色の砂が付着。	肥前系 近代か
37	瓦溜2	陶器	水注類		_		_	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	注口部の上面に長方形の切り込みあり。灰釉は灰黄色を帯びる 半透明の釉で1mm前後の貫入が 入る。	
38	瓦溜2	陶器	擂鉢	22.2	_	_	_	外) 黒褐2.5Y3/1 断) 黒2.5Y2/1	鉄釉	内面に細かい櫛目。内外面緩や かなロクロ目。外面と口縁部内面 施釉。	能茶山窯 近代
39	瓦溜2	瓦質 土器	火鉢	20.0	8.0	18.6	_	外) 暗灰黄 2.5Y5/2 断) 黒 5Y2/1		内面回転ナデ。外面ヨコナデ。外 底に円形の三足を貼付。	
54	SX21層	磁器 色絵	ш	_		13.6	_	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	内) 上絵付け (赤・緑) 花唐草文 外) 不明	畳付の両側に面取り。高台施釉。	中国産景徳鎮窯 系 16世紀
55	SX21層	陶器	碗		_	_	_	外) 灰 N5/ 断) 灰白 2.5 Y8/1	長石釉	鉄錆を施した後長石釉を厚く掛 ける。	志野焼 16世紀末~1610 年代
56	SX21層	陶器	甕	_	_	1	_	外) 赤灰 2.5YR4/1 断) 赤灰 2.5YR4/1	焼締め	外面横方向のイタナデ、内面ユビ オサエ・ナデ。	備前
58	瓦溜3	磁器染付	中碗 広東形	10.6	5.7	5.6		外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	外)暦手 高台外)二重圏線 口縁内)二重圏線 見込み)梵字文	呉須は暗青色。	肥前産
59	瓦溜3	磁器 染付	中碗	10.6	5.8	5.6	_	外) 白 断) 白	外) 野菜文 口縁内) 二重圏線 見込み) 植物		肥前産又は肥前 系
60	瓦溜3	磁器 染付	中碗 広東形	11.8	6.5	5.8	_	外) 白 断) 白	外) 松 高台外) 二重圏線 口縁内) 圏線 見込み) 寿字		肥前系
61	瓦溜3	磁器染付	中碗 広東形	11.6	6.6	6.0	_	外) 白 断) 白	外) 草花文・蝶 高台外) 二重圏線 口縁内) 圏線 見込み) 寿字か	呉須は淡青色。	肥前系
62	瓦溜3	磁器染付	中碗 広東形	10.8	5.9	5.2	_	外) 白 断) 白	外) 草花文・蝶 高台外) 二重圏線 口縁内) 圏線 見込み) 略化した 寿字か	呉須は青灰色。	肥前系
63	瓦溜3	磁器 染付	中碗 広東形	10.8	_		-	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 草花·岩 口縁内) 二重圏線		肥前系
64	瓦溜3	磁器染付	中碗 端反形	10.2	5.6	4.0	_	外) 白 断) 白	外)岩・波・千鳥 口縁内)岩・千鳥 見込み)岩・波		肥前産又は肥前 系
65	瓦溜3	磁器染付	中碗端反形	9.4	5.1	3.8	_	外) 灰白 2.5GY8/1 断) 白	外) 山水文か 高台外) 圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 圏線・水 に岩か		肥前系
66	瓦溜3	青磁染付	中碗丸形	5.8	6.4	4.2	_	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	外) 青磁釉 口縁内) 四方襷 見込み) 二重圏 線・手描きによる 五弁花 高台内) 角内渦福		肥前産 18世紀後半
67	瓦溜3	磁器 染付	大碗 丸形	15.2	_	_	_	外) 白 断) 白	外)鶴·花·垣 口縁内)四方襷		肥前産
68	瓦溜3	磁器染付	大碗丸形	16.0	7.4	5.8	_	外) 白 断) 白	外)松・竹 高台外)二重圏線 口縁内)四方襷 見込み)二重圏 線・花文		肥前産18世紀
69	瓦溜3	磁器染付	碗	_	_	5.6	_	外) 白 断) 白	外) 若松 高台外) 二重圏線 見込み) 十字花文	呉須は暗青色。	肥前産
70	瓦溜3	磁器染付	小碗 広東形	8.6	4.1	3.2		外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白N8/	外)暦手 高台外)二重圏線 口縁内)二重圏線 見込み)寿字	呉須は青灰色。透明釉は白濁す る。	肥前産又は肥前 系
71	瓦溜3	磁器 染付	小碗 半球形	8.8	_	_		外) 白 断) 白	外) 山水文		肥前産 18世紀
72	瓦溜3	磁器染付	小杯 丸形	7.0	3.5	2.6	_	外) 白 断) 白	外) 笹文		肥前系
73	瓦溜3	磁器 染付	小杯 浅半球形	6,8	3.2	2.2	_	外) 白  断) 白	外) 草花文・蝶		肥前産

## Tab.3 遺物観察表 (陶磁器・土器)

INTERNATION	111		00.74	法量(cm)							備考(生産地・
図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
74	瓦溜3	磁器 染付	五寸皿	_	_	9.6	_	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 連続唐草文 内) 山水文	蛇の目凹型高台。呉須は暗緑灰 色。	肥前系
75	瓦溜3	陶胎 染付	五寸皿	13.2	_	_	_	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白7.5Y8/1	外) 宝文 内) 松·竹	呉須は暗緑灰色。	瀬戸・美濃産か
76	瓦溜3	白磁	小皿		_	4.6		外) 灰白5GY8/1 断) 白	内) 型による菊弁	型打成形。	肥前系か
77	瓦溜3	白磁	小皿 菊花形	7.8		_		外) 明青灰5B7/1 断) 白	白磁釉 内) 型による菊弁	型打成形。白磁釉は明青灰色を 帯びる。	肥前系
78	瓦溜3	白磁	皿又は鉢	_	_		_	外) 白 断) 白	内)陽刻による花 文	陽刻型打成形。	肥前産
79	瓦溜3	色絵染付	蓋物蓋	笠部 径 8.4	2.1	摘み 径 3.0	かえり 径 7.5	外) 白 断) 白	外)窓に草花文・ 四方襷・唐草	内面施釉。かえり無釉。窓は呉 須、草花文は上絵付け(剥離)、 四方襷と唐草は赤絵の具で描き 分ける。	肥前産
80	瓦溜3	磁器 染付	蓋物	6.8	3.5	3.6		外) 白 断) 白	外)鳥·植物·圏 線	内面施釉。口縁部無釉。	肥前産
81	瓦溜3	白磁	不明	5.6	2.5	4.0	_	外) 白 断) 白		型押し成形。外面にチヂレ目。内 面回転ナデ。外底無釉。	
82	瓦溜3	陶器	中碗 丸形	11.0	_	_	_	外) 浅黄5Y7/3 断) 灰白5Y8/2	灰釉	浅黄色を帯びる半透明の釉で lmm前後の貫入が入る。	尾戸窯
83	瓦溜3	陶器	中碗	10.8	_		_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	灰オリーブ色を帯びる半透明の 釉で0.5~1mm大の貫入が入る。	尾戸窯
84	瓦溜3	陶器	中碗端反形	11.0				外) 灰白2.5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	灰釉 外)鉄錆・白土に よる梅文(花弁は 白土、枝は鉄錆で 描く)	灰オリーブ色を帯びる半透明の 釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
85	瓦溜3	陶器	中碗	_	_	4.8	_	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	灰釉	内外面ロクロ目。外面下位に鉋痕が残る。畳付外側にナデ。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
86	瓦溜3	陶器	碗か	_	_	5.4	_	外)にぶい黄褐 10YR4/3 断)灰白2.5Y7/1	鉄釉	畳付両側にナデ。高台内に渦状 の鉋痕。高台無釉。鉄釉はにぶ い黄褐色で、部分的に黒褐色に 発色する。	尾戸窯
87	瓦溜3	陶胎 染付	中碗	11.0	_	, <del>-</del>	_	外) 灰白 5Y8/1 断) にぶい黄橙 10YR7/2	外) 唐草か 口縁内) 圏線	外面に白化粧土施釉の後、呉須 絵、透明釉。	瀬戸・美濃産
88	瓦溜3	陶器	中碗丸形	12.4	_			外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	灰釉	灰釉は白濁	
89	瓦溜3	陶器	小碗 端反形	9.8	5.0	3.2	_	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白7.5Y8/1	灰釉・緑釉	口縁部内外面に緑釉を浸け掛け。	信楽か 高台内に墨書。
90	瓦溜3	陶器	小碗 半球形	8.2	4.5	2.2	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉 外)鉄錆による略 化した鳥	外面緩やかなロクロ目。畳付外側 を小さく面取る。高台無釉。浅 黄色を帯びる半透明の釉で1mm 前後の貫入が入る。	京都系
91	瓦溜3	陶器	捏鉢	39.6	_	_	_	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 断) にぶい赤褐 2.5YR5/4	焼締め	外面回転ケズリ・回転ナデ。内面 回転ナデ。	
92	瓦溜3	陶器	擂鉢	_	_	15.6	_	外) 赤10R5/6 断) 赤10R5/6	焼締め	外面回転ナデ。内面櫛目、内底 にウールマーク状の櫛目。	堺産
93	瓦溜3	陶器	擂鉢	_	_	18.0	_	外) 明赤褐 2.5YR5/6 断) 明赤褐 2.5YR5/6	焼締め	内面櫛目。内底に放射状の櫛目。 外面ヨコナデ。外底に凹凸。	堺·明石系
94	瓦溜3	陶器	鍋	21.6	11.3	6.3	_	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰褐5Y4/2	鉄釉	外面下半ケズリ後ナデ。外底を曲線的に削り出す。外底に乱れた 渦状の鉋痕。内底に目痕4足。	尾戸窯か
95	瓦溜3	陶器	鍋	21.0	_	_	_	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白10YR7/1	鉄釉	内面ロクロ目。把手を貼付。	尾戸窯又は能茶 山窯
96	瓦溜3	陶器	急須	5.5	9.6	6.2	12.7	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	把手を貼付。外面上位に多段の 強いロクロ目を巡らす。内面ロ クロ目。灰オリーブ色を帯びる 透明の釉で2mm前後の貫入が入 る。	
97	瓦溜3	陶器	土瓶	6.8	_	_	20.0	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白7.5Y7/1	灰釉 外) 白土による花 文	体部両側面に白土を盛上げるように花文を描き、イッチン描き を加える。内面と口縁端部無釉。	
98	瓦溜3	陶器	土瓶	5.0	_	_	12.4	外) 黒褐2.5Y3/1 断) 黄灰2.5Y6/1	鉄釉	外面下半ケズリ後丁寧なナデ。内 面無釉。口縁端部と外面下半無 釉。鉄釉は黒褐色。	
99	瓦溜3	陶器	土瓶蓋	笠部 径 6.8	2.6	4.6	摘み 径 2.0	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	摘みは花形。外面無釉。鉄釉は にぶい褐色に発色。	
100	瓦溜3	陶器	獲	23.6	_	_		外)黒褐10YR3/1 断)にぶい黄橙 10YR3/1	内) 灰釉 口縁部) 灰釉 外) 鉄釉	外面に黒褐色の釉。肩部に黒色 の釉を流し掛けする。	丹波産

# Tab.4 遺物観察表 (陶磁器・土器)

ton ite:			nn er.	法量(cm)							備考(生産地・
図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・使用痕・他)
101	瓦溜3	陶器	甕	_	_	13.0	21.0	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰白N8/	鉄釉	内面ロクロ目。鉄釉はにぶい赤褐色。肩部から黒色の釉を流し掛け。内面施釉。	関西系
102	瓦溜3	陶器	不明	20.0	-	_	_	外) 暗褐10YR3/4 断) 黄灰2.5Y6/1	褐釉	頸部外面に丸彫による縦筋を巡 らす。黒褐色の半透明の釉で、 厚く掛かる部分は青白色に発色。	
103	瓦溜3	陶器	不明	_		12.8	_	外) 褐7.5Y4/3 断) 灰白2.5Y8/2	鉄釉	内面ロクロ目。外面ケズリ。畳付 両側にナデ。内底に灰白色の砂 目。	底部中央に径 2cmの円孔を穿 つ。植木鉢に転 用か。
104	瓦溜3	陶器	蓋物蓋	笠部 径 10.8	_	_	_	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/3	灰釉外) 呉須・鉄 錆・白土による菊 花	内面施釉。かえり無釉。	尾戸窯又は京都 系
105	瓦溜3	陶器	火入れ	10.0	7.9	10.2	_	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y6/1	白化粧土·灰釉	内面無釉。外面に白化粧土施釉 の後、灰釉施釉。灰釉は透明で 粗い貫入が入る。	
106	瓦溜3	陶器	灯明受皿	10.4	2.5	4.2	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉内) 菊花・櫛 目	内面に型押しによる菊花を貼付。 外面下半回転ケズリ。内底に目痕 3足。	口縁部外面に煤 と灯芯油痕。
107	瓦溜3	陶器	鳥の 水入れ	8.0	3.0	_	_	外) 灰黄 2.5Y7/2 断) 灰黄 2.5Y7/2	灰釉	小判形。たたら成形。把手は貼付。外底直線方向のナデ。外底 と口縁端部無釉。	尾戸窯又は能茶 山窯
108	瓦溜3	土師質 土器	焙烙	32.4	_		_	外) にぶい橙7.5YR6/4 断) にぶい橙7.5YR6/4		口縁部外面と内面回転ナデ。外 底に凹凸。外底に石英・長石の粗 砂が付着。	関西産
109	瓦溜3	施釉 土器	ミニチュア 片口	3.6	1.6	1.6	_	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	緑色の低火度釉	型押し成形。内面施釉。外面無 釉。	
110	瓦溜3	土師質 土器	焼塩 壺蓋	径8.0	厚さ 1.4	_	_	外) にぶい橙5YR6/4 断) にぶい橙5YR6/4	石英・長石・チャート (灰色)の粗砂を含む。	上面ナデ。下面布目。側面ヨコナデ。	
111	瓦溜3	土師質 土器	焜炉	20.0	_	_	_	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石・金雲 母・チャート (灰色) の粗砂を含む。	粘土紐積み上げ成形。前方に口 縁部から切り込む窓をもつ。手 捏ねによる内部突起を貼付。外 面ナデ、内面ユビオサエ・ナデ。	関西系 口縁部に煤と黒 色の滲み。
112	瓦溜3	土師質 土器	焜炉	22.0	_	_		外) にぶい橙 10YR7/3 断) にぶい橙 7.5YR8/4	石英・長石・チャート (灰色) の粗砂を 含む。	粘土紐積み上げ成形。前方に口 縁部から切り込む窓をもつ。側 面に径1.1cmの円孔。手捏ねに よる内部突起を貼付。外面ナデ、 内面ユビオサエ・ナデ。	関西系
113	瓦溜3	土師質 土器	焜炉	_	_	_	_	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR7/6	石英・長石、灰黒 色の粗砂を含む。	内底に回転方向のナデ、外底ナデ。	外底に墨書。
114	瓦溜3	土師質 土器	焜炉 筒形	_		28.5	_	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	赤彩 石英·長石·金雲	粘土紐積み上げ成形。前方に窓。 窓下側の受けは剥離し接合部に 櫛目が残る。前面下位に花弁状	関西系
115	瓦溜3	土師質 土器	焜炉 さな	径12.6	厚さ 1.4	_	穿孔径 1.5	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		円孔径1.5cm。上面ナデ、下面チ デレ目。側面回転ナデ。	
116	瓦溜3	土師質 土器	焜炉 さな	径11.8	厚さ 1.2	<u>.</u>	穿孔径 1.5	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		円孔径1.5cm。上面と下面ナデ。 下面は糸切り痕が一部残る。側 面回転ナデ。	
117	瓦溜3	瓦質 土器	焜炉 箱形	_	_		_	外) 黄灰2.5Y4/1 断) にぶい黄橙 10YR6/3	石英・長石・雲母・ チャートの粗砂を 含む。	側面に松笠を形取った把手を貼 付。内外面ナデ。	
118	瓦溜3	瓦質 土器	焜炉 箱形		_		_	外) 黒褐 2.5YR3/1 断) にぶい橙 10YR7/4	石英・長石、灰黒 色の粗砂を含む。	たたら成形。前方に四角形の窓をもつ。窓の枠は剥離し接合部 に櫛目が残る。底部の四隅に脚 を貼付。外面不定方向のナデ、 内面ナデ。	
129	瓦溜4	磁器染付	中碗丸形	14.4	6.7	6.0		外) 白 断) 白	外) 草花文 口縁内) 四方襷 見込み) 草花文か ・二重圏線		肥前産
130	瓦溜4	磁器染付	中碗丸形	14.6	_		_	外) 白 断) 白	外) 草花文 口縁内) 帯線に墨 弾きによる唐草文		肥前産
131	瓦溜4	磁器染付	大碗丸形	15.2	7.1	5.8	_	外) 白 断) 白	外) 鶴·花·垣 口縁内) 四方襷 見込み) 鶴·二重 圏線		肥前産
132	瓦溜4	磁器染付	中碗 広東形	11.4	6.1	6.2	_	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 花唐草文 口縁内) 二重圏線 見込み) 笠文・圏線	内底凸状。	肥前系 1780年代~幕末

# Tab.5 遺物観察表 (陶磁器・土器)

回悔 山	ili i.		R0 14		法量 (cm)						備考(生産地・
図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
133	瓦溜4	磁器染付	中碗 広東形	11.0	6.5	5.6		外) 灰白 2.5GY8/1 断) 白		呉須は青灰色。透明釉は貫入が 入る。	肥前系
134	瓦溜4	磁器 染付	中碗 広東形	11.8	6.1	6.6	_	外) 白 断) 白	外) 山水文 口縁内) 帯線に雪 輪 見込み) 岩波・圏線		肥前産
135	瓦溜4	磁器染付	中碗 広東形	11.4	6.5	5.6	_	外) 灰白5YG8/1 断) 白	外) 柳 口縁内) 二重圏線 見込み) 略化した 不明文様、雁か	呉須は淡い青灰色。	肥前系
136	瓦溜4	磁器 染付	中碗	12.8	6.7	6.4	_	外) 白 断) 白	外) 山水文	内底に目痕3足。	肥前系 1780年代~幕末
137	瓦溜4	磁器染付	中碗 広東形	12.0	7.2	6.0	_	外) 白 断) 白	外)草花文 高台外)二重圏線 口縁内)二重圏線 見込み)不明・圏 線		肥前産又は肥前系 1780年代~幕末
138	瓦溜4	磁器染付	中碗 広東形	_	_	6.4	_	外) 灰白5Y8/1 断) 白	外) 不明 高台外) 二重圏線 見込み) 圏線		肥前産又は肥前 系
139	瓦溜4	磁器 染付	中碗	_		4.4	_	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重圏線 口縁内) 多重圏線 か 見込み) 草花文	呉須は青灰色。透明釉は白濁す る。	肥前系
140	瓦溜4	磁器染付	中碗端反形	11.8	5.3	4.6	_	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白N7/	外) 草文 口縁内) 不明	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部 に砂が付着。呉須は暗オリーブ 色に発色。	肥前産
141	瓦溜4	磁器 染付	中碗 広東形	9.2	5.3	4.8	_	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	外) 草花文 口縁内) 圏線 見込み) 不明・二 重圏線	焼成不良で透明釉は白濁。	肥前産
142	瓦溜4	磁器 染付	中碗端反形	9.8	5.2	3.8		外) 白 断) 白	外) 花文 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 草文・二 重圏線		
143	瓦溜4	磁器染付	中碗端反形	9.8	5.2	3.2	_	外) 白 断) 白	外) 蓮弁文·帯線· 圏線 高台外) 二重圏線 口縁内) 帯線·圏線 見込み) 不明・二 重圏線		瀬戸・美濃産
144	瓦溜4	磁器染付	中碗端反形	9.8	5.2	4.6	_	外) 白 断) 白	外) 花唐草文 高台外) 圈線 口縁内) 帶線・圈 線 見込み) 草花文・ 二重圏線		瀬戸・美濃産
145	瓦溜4	磁器染付	中碗端反形	9.4	4.7	3.8	_	外) 白 断) 白	外) 八卦 口縁内外) 帯線・ 墨弾文・圏線 高台外) 圏線 見速線 高台内) 銘		瀬戸・美濃産
146	瓦溜4	磁器染付	中碗端反形	9.8	5.0	4.4	_	外) 白 断) 白	外)網目文 口縁内)幾何文 見込み)不明・圏線		瀬戸・美濃産
147	瓦溜4	磁器 染付	中碗端反形	9.8	5.2	3.6	_	外) 白 断) 白	外)波 口縁内外) 帯線に 墨弾きによる如意 頭文 高台外) 圏線 見込み) 帆掛け 船・圏線		瀬戸・美濃産
148	瓦溜4	磁器染付	中碗端反形	9.0	4.6	2.6		外) 白 断) 白	外)昆虫·花唐草 高台外)二重圈線 口縁内)带線·圈 線 見込み)草花文· 二重圏線		瀬戸・美濃産

# Tab.6 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版	出土		器種		法量	(cm)					備考 (生産地・
番号	地点	種類	器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
149	瓦溜4	磁器染付	小碗 丸形	8.4	5.2	3.8		外) 白 断) 白	見込み) 手描きに よる五弁花・圏線	呉須は青灰色。透明釉は貫入が 入る。	肥前産
150	瓦溜4	磁器染付	小碗 端反形	8.4	5.0	3.4	_	外) 灰白 N8/ 断) 白	外) 垣 口縁内) 二重圏線 見込み) 草花文・ 圏線		肥前産
151	瓦溜4	磁器 染付	小碗端反形	7.4	4.1	3.4	_	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	外) 花唐草文 口縁内) 帯線 見込み) 花文・二 重圏線		瀬戸・美濃産
152	瓦溜4	白磁	小碗 端反形	8.6	5.0	3.6	_	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 蛍手・花文	白磁釉は明緑灰色を帯びる。	
153	瓦溜4	磁器 色絵	小碗 端反形	_	_	3.8	_	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外)上絵付(赤・黒・その他は剥 離)による草花文		関西系
154	瓦溜4	磁器 染付	薄手酒杯 端反形	6.0	2.9	3.2	_	外) 白 断) 白	内) 花文		肥前産
155	瓦溜4	磁器 色絵	小杯 丸形	6.8	3.5	2.8		外) 明緑灰 7.5GY8/1 断) 白	外)上絵付(赤・ 緑)による花卉・ 圏線	透明釉は明緑灰色を帯びる。	
156	瓦溜4	磁器 染付	小杯	7.0	3.7	2.4		外) 白 断) 白	外) 山水文か 内) 山水文	呉須は暗青色。	肥前産
157	瓦溜4	磁器 染付	小杯 浅半球形	6.6	3.2	2.0	_	外) 白 断) 白	外)和歌文		肥前産
158	瓦溜4	磁器 染付	小杯 丸形	7.2	3.4	2.8	_	外) 白 断) 白	外)網目文 高台外) 圈線		肥前産
159	瓦溜4	磁器 染付	小杯	6.9	3.2	2.6	_	外) 白 断) 白	外) 笹文	外面下位にケズリ痕が残る。畳付 に砂が付着。	肥前系
160	瓦溜4	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	3.3	2.4	_	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	外) 笹文	呉須は暗オリーブ灰色、透明釉 は白濁する。	肥前系
161	瓦溜4	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	3.0	2.6	_	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 笹文		肥前系
162	瓦溜4	磁器 染付	小杯 丸形	5.2	2.3	1.6	_	外) 白 断) 白	外) 松葉か		肥前産
163	瓦溜4	磁器色絵	小杯 丸形	4.8	2.4	1.4	_	外) 灰白 10Y8/1 断) 白	外)上絵付(赤・黒・その他は剥離)による花文	色絵は黒で輪郭を描く。	肥前産又は肥前 系
164	瓦溜4	磁器 染付	碗蓋	笠部 径 9.8	2.8	摘み 径 5.2	_	外) 白 断) 白	外) 草文 口縁内) 二重圏線 見込み) 不明・圏 線	広東形碗の蓋	肥前系
165	瓦溜4	磁器 染付	碗蓋	笠部 径 9.6	2.8	摘み 径 5.4	_	外) 白 断) 白	外) 松 口縁内) 二重圏線 見込み) 鷺	広東形碗の蓋。呉須は暗青灰色。	肥前系
166	瓦溜4	磁器染付	碗蓋	笠部 径 9.4	3.1	摘み 径 3.0	_	外) 白 断) 白	外) 唐草文 摘み内) 銘 口縁内) 帯線に墨 弾きによる如意頭 文 見込み) 草花・圏 線		瀬戸・美濃産
167	瓦溜4	磁器 染付	小皿	9.6	1.9	4.4		外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	内) 草花文 外) 草花文	呉須は暗緑灰色、透明釉は白濁 する。	肥前系
168	瓦溜4	磁器 染付	小皿 端反形	11.0	2.5	5.6	_	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白N8/	内) 山水文 口縁内) 二重圏線	呉須は暗オリーブ灰色、透明釉 は白濁する。	肥前系
169	瓦溜4	磁器染付	五寸皿	14.4	3.2	9.2	_	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 灰白 N8/	外)連続唐草文 高台外) 圏線 内) 山水文 口縁内) 圏線	口縁部玉縁状。蛇の目凹型高台。 呉須は灰オリーブ色に発色。	肥前系
170	瓦溜4	磁器染付	五寸皿	12.8	3.5	8.0	_	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N8/	外)連続唐草文 内)若松·竹	口縁部玉縁状。蛇の目凹型高台。 呉須は暗オリーブ灰色。	
171	瓦溜4	磁器染付	五寸皿	13.8	3.6	9.6	_	外) 明緑灰 7.5GY7/1 断) 灰白 N8/	外) 連続唐草文 内) 山水文 口縁内) 圏線	蛇の目凹型高台。	肥前産
172	瓦溜4	磁器 染付	小皿	13.2	3.3	8.0	_	外) 灰白 2.5GY8/1 断) 白	口錆内) 雲鶴・区 画内に山水文	口縁部輪花形。蛇の目凹型高台。	肥前産
173	瓦溜4	白磁	五寸皿 菊花形	13.8	3.8	8.0	_	外) 明緑灰 7.5GY8/1 断) 白	内) 型による菊弁	型打成形。	肥前系
174	瓦溜4	白磁	極小皿	8.6	2.0	5.0	_	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	口錆内)型による 菊弁と花芯	型打ち成形。	肥前産又は肥前 系
175	瓦溜4	磁器染付	鉢 浅丸形	14.6	4.5	9.0	_	外) 灰白 2.5GY8/1 断) 白	外) 連続唐草文	口縁部玉縁状。蛇の目凹型高台。	肥前産

# Tab.7 遺物観察表 (陶磁器・土器)

			Ī .		法量	(cm)					備考(生産地・
図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
176	瓦溜4	磁器染付	鉢 八角形	12.2	5.7	6.4	_	外) 白 断) 白	外) 芙蓉手 内) 区画に草・格 子		肥前産又は肥前 系
177	瓦溜4	磁器 染付	鉢 六角形	14.0	_	_	_	外) 白 断) 白			肥前産
178	瓦溜4	磁器 染付	鉢 端反形	12.0	_	_	_	外) 白 断) 白	外)波 口縁内)不明文様 ・濃み		肥前系
179	瓦溜4	磁器 染付	蓋物 丸形	10.8	_	_	_	外) 白 断) 白	外) 梅·雪輪		肥前産
180	瓦溜4	磁器 染付	蓋物 腰張形	8.6	_		_	外) 白 断) 白	外) 半菊・網目	内面施釉。口縁部内面無釉。	肥前産
181	瓦溜4	磁器 染付	蓋物 腰張形	7.2	3.6	3.5	_	外) 白  断) 白	外) 草花文 高台外) 二重圏線		
182	瓦溜4	磁器 染付	蓋物 半筒形	11.8	6.9	7.8	_	外) 白 断) 白	外) 草花・岩 高台外) 二重圏線	内面施釉。口縁端部と口縁部内 面無釉。	肥前產
183	瓦溜4	磁器 染付	段重	7.6	3.2	4.2	_	外) 白 断) 白	外) 宝文	内面施釉。口縁端部無釉。	肥前産
184	瓦溜4	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 5.2	1.9	摘み 径 0.8	かえり 径 3.8	外) 白 断) 白	外) 草花文	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
185	瓦溜4	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 8.2	2.4	摘み 径 2.2	かえり 径 7.4	外) 白 断) 白	外)網目文·四方 襷	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
186	瓦溜4	磁器 染付	水滴箱形	全長 一	全厚 1.7	全幅 5.4	_	外) 白 断) 白	外)陽刻による葡 萄文、葉の一部を 呉須で塗り分ける	型押し成形底部貼り合わせ。上面の2箇所に円孔。内面ユビオサエ・ユビナデ。外底布目。外底施釉、側面の1箇所が無釉。	肥前産
187	瓦溜4	磁器 染付	鬢油壺	_	_	5.4	8.7	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 蛸唐草・蓮弁 文 高台外) 二重圏線	内面無釉。	肥前産
188	瓦溜4	磁器 染付	瓶	ı	_	4.8	_	外) 白 断) 白	外) 唐草·松葉	内面無釉。透明釉は白濁する。	肥前系
189	瓦溜4	磁器 染付	ミニチュア 壺	2.8	2.8	2.2		外) 白 断) 白	外) 人物文	内面施釉。呉須は青色。	
190	瓦溜4	白磁	紅皿 菊花形	4.8	1.5	12.0	_	外) 白  断) 白	外) 型による菊弁	型押し成形。外面下半無釉。	肥前産
191	瓦溜4	白磁	紅皿 菊花形	4.4	1.5	1.4		外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押し成形。外面下半無釉。	肥前産
192	瓦溜4	白磁	紅皿 菊花形	4.9	1.6	1.4	_	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押し整形。外面無釉。	肥前産
193	瓦溜4	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.3	1.2	_	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押し成形。外面下半無釉。	肥前産
194	瓦溜4	白磁	ミニチュア 碗	2.2	1.1	1.0	_	外) 白 断) 白	外)陽刻による蓮 弁文	型押し整形	肥前産
195	瓦溜4	磁器 染付	餌鉢か	6.0	_	_	_	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 葡萄	内面施釉。	肥前系
196	瓦溜4	磁器 染付	植木鉢か 鍔縁桶形	14.0	_			外) 白 断) 白	外) 山水文 口縁内) 濃み	内面下半無釉。	肥前系
197	瓦溜4	陶器	中碗 筒丸形	9.8	6.9	6.0	_	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内平坦。畳付両側に面取り。 高台無釉。	尾戸窯
198	瓦溜4	陶器	中碗 筒丸形	9.6	_	_	_	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	外面緩やかなロクロ目。灰白色を 帯びる半透明の釉。	尾戸窯
199	瓦溜4	陶器	中碗 筒丸形	10.2	_	_	_	外)にぶい黄橙 10YR7/2 断)淡黄 2.5Y8/3	灰釉	灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
200	瓦溜4	陶器	中碗	12.0		_	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1		灰白色を帯びる半透明の釉で 1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
201	瓦溜4	陶器	中碗	_		5.0	_	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。畳付外側 にナデ。高台無釉。灰白色を帯 びる半透明の釉で0.5mm前後の 貫入が入る。内底に目痕3足。	尾戸窯
202	瓦溜4	陶器	中碗	_	_	4.4	_	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。畳付外側 にナデ。高台無釉。灰釉は焼成 不良気味で白濁。	尾戸窯
203	瓦溜4	陶器	中碗	_	_	5.0		外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内外ロクロ目。高台内に渦状の鉋 痕。畳付外側にナデ。灰白色を 帯びる半透明の釉。	
204	瓦溜4	陶器	中碗	_	_	5.8	_	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内兜巾状。畳付外側にナデ。 高台無釉。灰釉は焼成不良気味 で白濁。内底に目痕4足。	尾戸窯
205	瓦溜4	陶器	中碗 広東形	12.8	7.0	6.0	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉 外)鉄錆による宝 文(宝珠)	鉄絵を両側面に配する。高台施 釉。灰釉は灰オリーブ色を帯び る透明の釉で1mm前後の貫入が 入る。	

# Tab.8 遺物観察表 (陶磁器・土器)

					法量	(cm)					備考(生産地・
図版 番号	出土地点	種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・使用痕・他)
206	瓦溜4	陶器	中碗	_	_	6.4		外) 灰白 2.5Y8/2 断) 淡黄 2.5Y8/3	灰釉	外面下位に乱れた鉋痕。内底に 渦状の鉋痕。畳付外側にナデ。 高台無釉。灰釉は焼成不良で部 分的に白濁。内底に目痕。	尾戸窯
207	瓦溜4	陶器	碗又は鉢	_	_	6.4	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内凸状。畳付外側にナデ。 灰白色を帯びる半透明の釉で 1mm前後の貫入が入る。内底に 目痕。	尾戸窯
208	瓦溜4	陶器	小碗 半筒形	_		5.2	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内平坦。畳付け外側に面取 り。高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。	京都系又は尾戸 窯
209	瓦溜4	陶器	小碗 腰張形	8.8	5.5	3.2	_	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	高台内兜巾状。高台内無釉。高 台外側まで無釉。灰オリーブ色 を帯びる半透明の釉で1mm前後 の貫入が入る。	
210	瓦溜4	陶器	小碗端反形	8.8	4.8	3.2	_	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	高台内平坦。畳付け外側に面取 り。高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉で1~2mm大の貫入 が入る。	関西系
211	瓦溜4	陶器	小杯 丸形	4.8	2.6	2.0	_	外) 浅黄 2.5Y7/3 断) 灰白 2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯か
212	瓦溜4	陶器	中皿	20.2	5.6	6.8		外) オリーブ黄5Y6/3 断) 灰白5Y7/1	灰釉	口縁部溝縁状。高台内平坦。畳付外側にナデ。見込み蛇の目釉 剥ぎ。釉剥ぎ部分に白土を塗る。 灰釉はオリーブ黄色で、内面の 一部に暗オリーブ色を釉を流し 掛けする。	尾戸窯
213	瓦溜4	陶器	小皿	13.2	4.5	5.0	_	外) 黒褐 10YR3/2 断) 黄灰 2.5Y6/1	鉄釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部 に白泥を薄く塗る。外面上位に 1条の沈線。高台内兜巾状。畳付 外側にナデ。高台無釉。	
214	瓦溜4	陶器	小皿	_	_	5.6	-	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台内平 坦。畳付外側を面取り後ナデ。	尾戸窯
215	瓦溜4	陶器	鉢	16.0	_	_		外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	口縁部輪花形。灰白色を帯びる 半透明の釉で厚く掛かる部分は 白濁する。内底に目痕。	尾戸窯
216	瓦溜4	陶器	捏鉢	16.4	9.7	8.4	_	外) 暗赤灰 2.5Y3/1 断) 黄灰 2.5Y6/1	鉄釉	口縁を内側へ肥厚させる。内外面に緩やかなロクロ目。高台内平 坦。畳付外側に面取り。内底に 目痕3足。	
217	瓦溜4	陶器	片口	16.2	_	_	_	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰5Y6/1	灰釉	内面施釉。端部無釉。灰白色の白濁した釉。	
218	瓦溜4	陶器	擂鉢	_	_			外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰赤2.5YR4/2	焼締め	口得郊内面に叩迫 内面とずり	備前
219	瓦溜4	陶器	行平か	19.4	11.4	7.6		外)にぶい黄橙 10YR6/3 断)にぶい黄橙 10YR7/2	灰釉	内外面に緩やかなロクロ目。三足を貼付。外底無釉。にぶい黄橙色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
220	瓦溜4	陶器	行平	16.6	_	_		外) 暗赤褐5YR3/3 断) にぶい橙5YR7/4	鉄釉 外) 飛鉋	外面に鉄釉を刷毛塗り後飛鉋。 内面鉄釉。受けと口縁部内面無 釉。	能茶山窯か
221	瓦溜4	陶器	鍋	20.4	8.6	7.8	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内面に緩やかなロクロ目。底部に 3足を貼付。外底ケズリ。灰白色 を帯びる半透明の釉で1mm前後 の貫入が入る。内底に目痕4足。	外底に煤。
222	瓦溜4	陶器	鍋蓋	笠部 径 18.4	4.4	摘み 径 4.7	_	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 7.5Y7/4	灰釉 外) 上位に多条の 沈線	内面施釉。端部無釉。にぶい黄 橙色を帯びる半透明の釉	
223	瓦溜4	陶器	土瓶	6.4	11.7	7.2	18.1	外)淡黄 2.5Y8/3 断)にぶい橙 7.5YR7/4		三足を貼付。内面ロクロ目。外面 と外底に白化粧土。口縁端部と 内面上位無釉。灰釉は淡黄色を 帯びる透明の釉。	
224	瓦溜4	陶器	土瓶	8.0	_	_	20.0	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 浅黄橙10YR8/4	鉄釉 外)上位に釉 (焼 成不良で白濁)を 流し掛け	内面無釉。	
225	瓦溜4	陶器	土瓶	8.8		_	_	外) 黒褐10YR3/1 断) 灰黄2.5Y7/2	鉄釉 外) 上位に多条の 沈線	内面ロクロ目。内面と口縁端部無 釉。鉄釉は黒褐色に発色。	
226	瓦溜4	陶器	土瓶蓋	笠部 径 3.6	1.5	摘み 径 1.2	底径2.2	外) 黒褐10YR2/2 断) 黄灰2.5Y6/1	鉄釉	外面ケズリ。外面無釉。黒褐色の 釉。	尾戸窯又は能茶 山窯
227	瓦溜4	陶器	土瓶蓋	笠部 径 9.8	3.2	摘み 径 2.4	径	外)暗褐7.5YR3/3 断)にぶい黄橙 10YR7/2	鉄釉	内面施釉。かえり無釉。暗褐色 の釉。	

## Tab.9 遺物観察表 (陶磁器・土器)

			00 ta		法量	(cm)					備考(生産地・
図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
228	瓦溜4	陶器	土瓶	_	_	4.8	12.2	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	外) 白化粧土施釉 後、灰釉 内) 灰釉	三足を貼付。内面ロクロ目。内面 施釉。灰釉は灰オリーブ色を帯 びる。	
229	瓦溜4	陶器	土瓶	9.6	_	_		外) 灰白5Y7/2 断) 灰5Y6/1	灰釉 外) 上半に多条の 沈線	内面ロクロ目。内面上半と口縁端 部無釉。	
230	瓦溜4	陶器	土瓶隠元形	6.8	_	_	16.0	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰白 2.5Y7/1	外)灰釉・白土の イッチン描きによ る草花文 内) 鉄釉	内面上半無釉。内面下位に鉄釉。 灰釉は灰オリーブ色を帯びる透 明の釉で貫入が入る。	
231	瓦溜4	陶器	徳利 人形徳利	_	_		_	外) にぶい褐7.5YR5/4 断) 明赤褐2.5YR5/6	焼締め	胴部を窪ませ、型による布袋を 貼付。内外面に多段のロクロ目。	備前
232	瓦溜4	陶器	瓶	_	_	10.4	_	外) 灰白 2.5GY8/1 断) 灰白 2.5Y7/1	白化粧土施釉後、 灰釉	高台内平坦。内面下半無釉。	
233	瓦溜4	陶器	甕	18.6	_	_	_	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白5Y8/1	鉄釉	口縁部玉縁状。褐色の釉。肩部 から黒色の釉を流し掛けする。	関西系
234	瓦溜4	陶器	壺又は甕	_	_	11.8		外) 褐7.5YR4/4 断) 灰白2.5Y8/1	鉄釉	内面強いロクロ目。高台内平坦。 畳付両側にナデ。内面下位施釉。 底部無釉。	関西系又は尾戸 窯
235	瓦溜4	陶器	小瓶	2.4	9.5	5.2	9.4	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	内底に渦状のロクロ目。畳付の両側に面取り。内面無釉。高台施 釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
236	瓦溜4	陶器	小壺	5.6		_	7.9	外) 暗褐10YR3/4 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	内面施釉。口縁端部無釉。暗褐 色の釉。	
237	瓦溜4	陶器	瓶	_	_	4.8	8.0	外) 黒褐10YR3/1 断) にぶい橙2.5YR6/4	鉄釉	内面ロクロ目。内面と外底無釉。 黒褐色の釉。	
238	瓦溜4	陶器	瓶類か		_	5.6	_	外) 褐7.5Y4/3 断) 黄灰2.5Y5/1	鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。褐色の 釉。内底に目痕3足。外底の4箇 所に団子状の砂目。	尾戸窯又は能茶 山窯
239	瓦溜4	陶器	瓶		_	7.0	_	外) 暗赤褐 2.5YR3/2 断) 褐灰 10YR6/1	鉄釉	内面ロクロ目。暗赤褐色の釉。内 面無釉。	
240	瓦溜4	陶器	蓋物 菊花形	9.8	3.1	5.4	_	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉 外) 型による菊弁	型押し成形。ベタ底。内面ユビナデ、外底ナデ。内面と外底無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉で0.5 ~1mm大の貫入が入る。	尾戸窯か
241	瓦溜4	陶器	蓋物	7.4	5.2	4.4	_	外) 灰黄2.5Y7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	内底に乱れた渦状の鉋痕。畳付 外側にナデ。高台無釉。端部と 口縁部内面無釉。	尾戸窯
242	瓦溜4	陶器	蓋物 半筒形	8.0	_	_	_	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	内面施釉。口縁端部無釉。灰白 色を帯びる半透明の釉で1mm前 後の貫入が入る。	尾戸窯又は京都 系
243	瓦溜4	陶器	中碗又は 蓋物	_	_	6.0	_	外) 灰黄 2.5Y7/2 断) 灰白 2.5Y8/1	灰釉	内面ロクロ目。高台内平坦。畳付 外側に面取り。内面施釉。高台 無釉。内底に目痕3足。	尾戸窯
244	瓦溜4	陶器	蓋物	7.8	4.1	4.6	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	口縁端部無釉。内面施釉。高台 無釉。灰オリーブ色を帯びる透 明の釉で1~2mm大の貫入が入 る。	関西系
245	瓦溜4	陶器	不明	_		7.8		外) 灰白2.5GY7/1 断) 灰白N8/	灰釉 外) 呉須による文 様	内面ロクロ目。畳付両側に面取 り。内面施釉。高台無釉。灰釉 は灰白色を帯びる透明の釉で 2mm前後の貫入が入る。内底に 目痕4足。	
246	瓦溜4	陶器	火鉢			18.4	_	外) 灰オリーブ 7.5Y5/3 断) 灰白5Y8/1	頸部外) 丸彫りに よる縞 外・口縁内) 緑釉 内) 鉄錆刷毛塗り	緑釉は灰オリーブ色に発色。	瀬戸·美濃産
247	瓦溜4	陶器	火鉢	_		22.8	_	外) 緑 断) 灰白2.5Y8/1	頸部外) 丸彫りに よる縞 外・口縁内) 緑釉	緑色の釉。	瀬戸・美濃産
248	瓦溜4	陶器	火鉢か	18.4	_	_	_	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	瀬戸・美濃産
249	瓦溜4	陶器	火鉢	_	_	14.2		外) 褐7.5YR4/3 断) 白灰2.5Y7/1	高台外) 陰刻によ る雷文帯 外) 緑釉 内) 鉄錆刷毛塗り	外底に貫通しない円孔2穴。外底 無釉。	瀬戸・美濃産
250	瓦溜4	陶器	火鉢		_	17.0	27.4	外) 淡黄5Y8/3 断) 灰白5Y8/1	灰釉 外) 丸彫りによる	外面の一部に縦筋。外底に円形 の三足を貼付。外底に貫通しな い径4mmの円孔。	瀬戸・美濃産
251	瓦溜4	陶器	火鉢	_	_	14.8		外) オリーブ5Y5/4 断) 灰白2.5Y8/1	高台外) 陰刻によ る雷文帯 外) 緑釉 内) 鉄錆刷毛塗り	外底に貫通しない円孔。外底無 釉。内底に灰白色の砂目。	瀬戸·美濃産
252	瓦溜4	陶器	溲瓶	7.6	_	13.6	20.0	外) 黒褐2.5Y3/1 断) 灰白N7/	鉄釉	上部に紐手。外底施釉。内面無 釉。	
								D1/ W > D1 + 31/	L	THO .	

# Tab.10 遺物観察表 (陶磁器・土器)

					法量	(cm)					供本 ( 山 太 山
図版 番号		種類	器種 器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	備考(生産地・ 生産年代・銘・ 使用痕・他)
253	瓦溜4	陶器	灯明 受皿	11.2	2.5	4.0	_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白25Y8/1	灰釉 内) 櫛目	外面と外底回転ケズリ。外面無 釉。オリーブ黄色を帯びる透明 の釉。内底に目痕3足。	
254	瓦溜4	陶器	灯明 受皿	11.4	2.4	4.1	_	外) 灰黄 2.5Y7/2 断) 灰白 2.5Y7/1	灰釉 内) 櫛目・菊花	内面に型による菊花を貼付。外面下半と外底回転ケズリ。外面無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	芯油痕。
255	瓦溜4	陶器	灯明 受皿	11.8	2.4	2.8	_	外) 灰黄 2.5Y7/2 断) 灰白 2.5Y8/1	灰釉 内) 型による菊花	内面に型による菊花を貼付。外 面下半と外底回転ケズリ。内底に 目痕。	
256	瓦溜4	陶器	灯明 受皿	7.8	1.8	4.2		外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	油溝半月状。外面ケズリ後回転ナデ。外底回転ケズリ。かえり端部無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	関西系
257	瓦溜4	陶器	不明		_	17.8	_	外) 褐灰 7.5YR4/1 断) 黄灰 2.5Y6/1	鉄釉 外) 丸彫りによる 縦筋を巡らす	内面ロクロ目。畳付外側に面取り 後ナデ。内面に鉄錆。	尾戸窯か
258	瓦溜4	陶器	植木鉢	17.0	_	_	_	外)緑 断)灰白2.5Y8/1	外) 陽刻文様緑釉	内面無釉。	瀬戸・美濃産
259	瓦溜4	陶器	餌鉢	7.2	4.8	6.0	_	外) 浅黄5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	把手を貼付。外底無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で1~2mm 大の貫入が入る。	
260	瓦溜4	陶器	餌鉢	3.8	2.3	3.4	_	外) 浅黄 2.5Y7/3 断) 不明	灰釉	外底回転糸切り。外底無釉。浅 黄色を帯びる半透明の釉で貫入 が入る。	
261	瓦溜4	陶器	鳥の 水入れ		2.7	_		外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	灰釉	外底ナデ。口縁端部と外底無 釉。灰白色を帯びる半透明の釉 0.5mm前後の貫入が入る。外底 周縁に白泥を薄く塗る。	尾戸窯
262	瓦溜4	陶器	鳥の 水入れ	_	2.6	-	_	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	楕円形。外底と口縁端部無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
263	瓦溜4	陶器	鳥の水入れ		3.0		_	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	楕円形。たたら成形。外底ナデ。 外底無釉。灰オリーブ色を帯び る透明の釉で1~2mm大の貫入 が入る。外底周縁に白泥を薄く 塗る。	尾戸窯か
264	瓦溜4・5	陶器	不明	<u> </u>	_	4.0	8.2	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	前方に楕円形の窓をもつ。クリ 底。内面ナデ。畳付外側にナデ。 内面下半と底部無釉。	尾戸窯
265	瓦溜4	陶器	不明	_		5.0	_	外) 褐7.5YR4/4 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	前方に窓をもつ。内面ナデ。外 底回転ケズリ。外底無釉。	尾戸窯か
266	瓦溜4	陶器	不明	_	_	5.0	_	外) 灰黄 2.5Y7/2 断) 灰白 2.5Y8/2	灰釉	高台を欠損する。高台内平坦。 内面施釉。内底に目痕。	高台内に墨書。
267	瓦溜4	陶器	ミニチュア 鍋	7.2	3.5	3.0	_	外) にぶい赤褐 5YR4/4 断) 黄灰 2.5Y6/1	鉄釉	三足を貼付。外面下半と外底ケ ズリ。	尾戸窯か
268	瓦溜4	陶器	ミニチュア 鍋	5.6	-	-	_	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白5Y7/1	鉄釉	把手を貼付。	尾戸窯か
269	瓦溜4	土師質 土器	椀か	_		3.0	_	外) にぶい橙5YR7/4 断) にぶい橙5YR7/4	石英・長石、灰色 系の粗砂を含む。	内面と外面上位回転ナデ。外面 下半回転ケズリ。	内底に焦げ。
270	瓦溜4	土師質 土器	小皿	7.2	1.1	5.6	_	外)にぶい橙10YR7/3 断)にぶい橙10YR7/3	石英・長石、灰色・ 赤褐色の粗砂を含 む。	内外面回転ナデ。外底回転糸切 り。	口縁部に灯芯油 痕。
271	瓦溜4	土師質 土器	小皿	10.0	1.6	7.0	_	外) にぶい橙5YR7/4 断) にぶい橙5YR7/4		口縁部内外面回転ナデ。外面下 半と外底回転ケズリ。内底不定方 向のナデ。	尾戸窯
272	瓦溜4	土師質 土器	小皿	12.0	1.7	8.8		外) にぶい橙5YR7/4 断) にぶい橙5YR7/4		口縁部内外面回転ナデ。外面下 半ケズリ後ナデ。外底ナデ。内底 不定方向のナデ。	尾戸窯
273	瓦溜4	土師質 土器	小皿	13.2	2.2	8.6	_	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	石英・長石、灰黒 色の細砂を含む。	外面上半回転ナデ、外面下半回 転ケズリ。外底回転ケズリ。内面 回転ナデ、内底直線方向のナデ。	尾戸窯 外底に薄い煤、 内底に黒色の滲 み。
274	瓦溜4	土師質 土器	小皿	13.0	2.5	9.2	_	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	石英・長石の細砂 を含む。	転ケズリ。外底回転ケズリ。内面 と内底回転ナデ。	尾戸窯 外面と口縁部の 一部に煤。
275	瓦溜4	土師質 土器	中皿	17.6	2.7	11.6		外)にぶい橙7.5YR7/4 断) にぶい橙7.5YR7/4	石英・長石・雲母 の粗砂を含む。	内外と外面上位回転ナデ。外面 下半と外底回転ケズリ。	尾戸窯か
276	瓦溜4	土師質 土器	中皿	17.8	3.1	11.0	_	外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/6	色の細砂を含む。	転ケズリ。外底回転ケズリ。内面 回転ナデ、内底直線方向のナデ。	尾戸窯 口縁部と外底の 一部に焦げ。
277	瓦溜4	土師質 土器	中皿	16.6	3.3	9.6	_	外) 淡橙 7.5YR7/4 断) 淡橙 7.5YR7/4	石英・長石の粗 砂・細砂を含む。	外面回転ケズリ後ナデ。内面回転 ナデ。外底回転ケズリ。	尾戸窯か
278	瓦溜4	土師質 土器	中皿	16.8	3.3	10.4	_	外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/6	石英・長石、灰黒 色の細砂を含む。	外面上半回転ナデ、外面下半回 転ケズリ後ナデ。外底回転ケズリ 後ナデ。内面回転ナデ、内底直線 方向のナデ。	尾戸窯 口縁部に煤。内 底に弱い焦げ。

## Tab.11 遺物観察表 (陶磁器・土器)

	111. 1		00.14		法量	(cm)					備考 (生産地・
図版 番号	出土 地点	種類	器種器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
279	瓦溜4	土師質 土器	中皿	16.0		_	_	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石・金雲 母の細砂、赤色粒 を含む。	薄手。内外と外面上位回転ナデ。 外面下半回転ケズリ。	外面に薄い煤。 内底に焦げ。
280	瓦溜4	土師質 土器	杯	15.2	3.7	8.8	_	外)にぶい橙10YR7/3 断)にぶい橙10YR7/3	石英・長石・雲母、 灰色・赤褐色の粗 砂を含む。	内外面回転ナデ。外底周縁ナデ。	
281	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺 蓋	径 8.1	厚さ 1.5	_	_	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	石 英 ・長 石 の 粗 砂、灰黒色の粗砂、 金雲母を含む。	上面ナデ。下面粗い布目。側面 ヨコナデ。	関西産
282	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺 蓋	径 7.3	全厚 1.2	_	_	外) 橙7.5YR7/6 断) にぶい橙7.5YR7/4	石英・長石の粗砂、赤色系半透明 の粗砂、金雲母を含む。	上面ナデ。下面凹凸、部分的に 布目が残る。下面周縁をユビオサ エし段を設ける。側面ヨコナデ。	関西産
283	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺 蓋	径 7.9	厚さ 1.3	_	_	外) にぶい橙7.5YR5/4 断) にぶい橙7.5YR5/4		上面ナデ。下面細かい布目。側 面ユビオサエ・ナデ。	
284	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺 蓋	径 7.8	全厚 1.0	_	_	外)にぶい黄橙 10YR6/4 断)にぶい黄橙 10YR6/4	石英・長石・金雲 母、灰黒色の粗砂、 赤色風化粒を含 む。	上面ナデ、周縁に押圧による段。 下面細かい布目、周縁に押圧に よる段。側面ヨコナデ。	関西産
285	瓦溜4	土師質土 器	焼塩壺 蓋	径 7.6	厚さ 1.2	_	_	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6	石英・長石・金雲 母、灰褐色半透明 の粗砂を含む。	上面ナデ。下面布目。側面ヨコナ デ。	関西産 上面に墨書。
286	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺	7.0	7.2	5.4	_	外) にぶい橙7.5YR6/4 断) にぶい橙7.5YR6/4		外面ナデ、内面に粗い布目。外 底に粘土塊の貼付痕が明瞭に残 る。	関西産
287	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺	6.3	7.6	5.0	_	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石・金雲 母、灰黒色の粗砂 を含む。	外面ナデ。内面粗い布目。外底 粗いユビオサエ。	関西産
288	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺	6.5	7.7	4.8		外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	石英・長石・チャート(灰色)、灰黒色の粗砂を含む。	内外面ナデ。外底ナデ。	
289	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺	7.0	7.4	4.4	_	外)明赤褐5YR5/6 断)明赤褐5YR5/6		外面ユビオサエ・ナデ。外底強い ユビオサエ。内面と内底に工具に よる回転方向のナデ。	
290	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺	7.0	7.3	4.4	-	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	石英・長石・チャート (灰色) の粗砂、 灰白色の円礫を含む。	内外面ナデ。内底ナデ、外底ユビ オサエ。	
291	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺	8.0	7.3	4.6	_	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		外面に凹凸。外底ユビオサエ・ユ ビナデ。内面と内底に工具による 回転方向のナデ。	
292	瓦溜4	土師質 土器	焼塩壺	6.8	7.5	4.2		外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/6		外面摩耗し調整不明。外底ユビオ サエ・ユビナデ。 内面と内底に工 具による回転方向のナデ。	
293	瓦溜4	土師質 土器	焙烙	30.0	4.7	_		外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石、灰色 系の粗砂を含む。	内外面回転ナデ。外底に凹凸。	関西系 外底に薄い煤 内底に薄い焦げ。
294	瓦溜4	土師質 土器	焙烙	31.0	4.2	_	_	外)にぶい橙7.5YR7/4 断)にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底に凹凸。	関西系 19世紀内底に診 みと焦げ。
295	瓦溜4	土師質土器	焙烙	32.0	_	_	_	外) にぶい黄橙 2.5Y4/1~黄灰 断) にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石、灰黒 色の粗砂を含む。	口縁部外面回転ナデ。外底チヂレ 目。内面回転ナデ。	関西系
296	瓦溜4	土師質 土器	不明	2.6	_	_	_	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	石英・長石の細砂 を含む。	把手か。ロクロ成形。外面にロクロ目。端部付近に径4mmの穿孔あり。	
297	瓦溜4	瓦質 土器	焙烙	19.4	_	_	_	外) 灰5Y4/1 断) 灰5Y6/1	石英・長石の細砂 を含む。	外面に凹凸。内面回転ナデ。	
298	瓦溜4	瓦質 土器	焙烙	19.2	_		_	外)灰7.5Y4/ 断)にぶい黄橙 10YR7/2	石英・長石・チャート (灰色)の粗砂を含む。	外面チヂレ目・ナデ。内面回転ナ デ。	
299	瓦溜4	土師質 土器	羽釜	_		5.0	_	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白10YR8/2	石英・長石、灰色 の細砂を含む。	厚手の底部。外面下半と外底回 転ケズリ。内面ナデ。	外底に強い煤。
300	瓦溜4	土師質 土器	火消し壺	11.6	_			外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石・金雲 母の粗砂、赤色風 化粒を含む。	粘土紐積み上げ成形。内外面回 転ナデ。	
301	瓦溜4	土師質 土器	不明土器 の部品	全長 11.3	全厚 2.5	全幅 6.5	_	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4		外底に段を設け、ヘラで線を描 く。外側面イタナデ。外底ユビナ デ。内面チヂレ目・強いユビナデ。	
302	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	19.0		_	_	外)にぶい橙7.5YR7/4 断)にぶい橙7.5YR7/4	石英・長石・金雲 母、橙色の粗砂を 含む。	内面に手捏ねによる突起を貼付。 外面ナデ・ミガキ、内面回転ナデ。	

# Tab.12 遺物観察表 (陶磁器・土器)

real fire:			番緪 器種			(cm)					備考(生産地・
図版 番号	出土 地点	種類	器種器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
303	瓦溜4	土師質 土器	焜炉		_	19.4	_	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石、灰黒 色・赤褐色の粗砂 を含む。	前方に楕円形の窓。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。高台を貼付し 内外面回転ナデ。高台前方に円 孔。	
304	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	18.0	_		_	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6	石英・長石、灰色 の粗砂を含む。	囲回転デア。側面に径7mmの円  孔数穴。	
305	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	_	_	19.0	_	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	石英・長石、灰黒 色の粗砂、赤色風 化粒を含む。	側面に円孔あり。体部内外面回 転ナデ。外底に凹凸。高台を貼 付し内外面回転ナデ。高台に貫 通しない円孔。	
306	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	_	_	21.0	_	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石・雲母・ チャート(灰色) の粗砂を含む。	輪高台を貼付。高台前方に径 7mmの穿孔。高台の一部に浅い アーチ状の抉り。高台内外面回 転ナデ。外底に凹凸。内底回転 方向のナデ。	
307	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	_	_	28.0	_	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6	石英・長石、灰黒 色の粗砂を含む。	窓は不明。体部内外面ヨコナデ。 高台を貼付し内外面回転ナデ。 高台前方に円孔。	
308	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	_	_	20.2	_	外)明赤褐2.5YR5/6 断)にぶい橙7.5YR7/4	色風化粒を含む。	しない径5mmの円孔。内面回転 ナデ。	
309	瓦溜4	土師質 土器	焜炉 筒型	_	_		_	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		内面に断面三角形の突帯を貼付 して段を設ける。外面ナデ、内面 ヨコナデ。整形・調整とも荒い。	
310	瓦溜4	土師質土器	焜炉	_	_	_	_	外)にぶい黄橙 10YR7/4 断)にぶい黄橙 10YR7/4	石英・長石・雲母 の粗砂を含む。	断面三角形の突帯を内面に貼付。 接合部に回転方向のナデ。外面 チヂレ目。内面ハケ。	口縁部付近に煤。
311	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	_	_	12.0	_	外) 浅黄橙7.5YR8/4 断) 浅黄橙7.5YR8/4	練り込み手。 石 英・長 石 の 細 砂、黒色粒を含む。	内外面回転ナデ。窓の有無は不明。橙色土と白色土を斑に混ぜ合わせる。	
312	瓦溜4	土師質 土器	焜炉	_	厚さ 1.3	_	_	外)にぶい黄橙 10YR5/4 断)にぶい黄橙 10YR5/4	石英・長石、灰黒 色の粗砂を含む。	円孔径1.5cm。下面に凹凸とチヂ レ目。側面回転ナデ。	
313	瓦溜4	土師質 土器	焜炉 さな	_	厚さ 1.3	_	-	外) にぶい橙10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	石英・長石、灰黒 色の粗砂を含む。	円孔径1.6cm。下面に凹凸とチヂ レ目。側面回転ナデ。	
314	瓦溜4	瓦質 土器	焜炉 箱形	_	_		- [	外)オリーブ黒5Y3/1 断)にぶい黄橙 10YR6/3		前面に四角形の窓をもつ。窓枠 を貼付。底部の4隅に脚を貼付。 外面ナデ、内面ユビナデ・ハケ。	
315	瓦溜4	瓦質 土器	焜炉 箱形	_	_	_		外)オリーブ黒5Y3/1 断)にぶい黄橙 10YR7/3		松笠形の把手を貼付。外面ナデ、 内面ユビオサエ・ユビナデ・縦ハ ケ。	
316	瓦溜4	瓦質 土器	火鉢	28.0		_	-	外) 黒 断) 灰7.5Y4/1	石英・長石の粗砂 を含む。	外面ミガキ、内面回転ナデ。	
317	瓦溜4	瓦質 土器	火鉢	30.0	_	_		外) 灰5Y4/1 断) 灰黄2.5Y7/2	石英・長石、灰色 系の粗砂を含む。	外面ミガキ、内面回転ナデ。	
318	瓦溜4	土師質 土器	型松笠	全長 8.1	全厚 2.3	全幅 4,4		外) 浅黄橙7.5YR8/3 断) 浅黄橙7.5YR8/3		内面凸状の松笠文様。内面チヂレ 目。外面面取り。	
319	瓦溜4	土師質 土器	人形	_	_	_	_	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) にぶい黄橙 10YR7/4	鳥か	型作り上下貼り合わせ。中空。外面ナデ、内面ユビオサエ・ナデ。	
320	瓦溜4	土師質 土器	人形	_	_	_		外) にぶい橙7.5YR7/4 断) にぶい橙7.5YR7/4	亀	型作り貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ナデ。外面にキラ粉。	
321	- 瓦溜4	土師質 土器	人形	_	_	-	- 1	外)にぶい黄橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4	魚	型作り貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ナデ。	
322	瓦溜4	土師質 土器	人形	_	_		-	外)にぶい黄橙 10YR7/4 断)にぶい黄橙 10YR7/4	亀・人物	型作り貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ナデ。	
333	TP8 包含層 II層	磁器 染付	ш	15.6	_	_		外) 明緑灰 7.5GY8/1 断) 白	内) 不明 口縁内) 渦	透明釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産 17世紀前半
334	SX1 1層	磁器 染付	中碗 半筒形	- ]	-	_		外) 灰白5GY8/1 断) 灰白 N8/	外) 山水文か・二 重圏線	呉須は暗青灰色	肥前産
335	SX1 1層	磁器 染付	中碗	_	-	3.8	_		高台州) 一重團組	焼成不良で透明釉は白濁。	肥前産
336	SX1 2-2層	磁器 染付	碗か		_	6.4		外) 灰白 10Y8/1 断) 灰白 N8/	内) 寿字 高台外) 二重圏線 高台内) 角内に福		肥前産
337	SX1 1層	青磁	碗 又は猪口	10.4		_		外) 明緑灰 10GY8/1 断) 白	青磁釉	明緑灰色の釉。	肥前産

## Tab.13 遺物観察表 (陶磁器・土器)

	版 出土 森鄉 器種				法量	(cm)					備考(生産地・
図版 番号	地点	種類	器種器形	口径	器高	底径	最大 径	色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調等)	生産年代・銘・ 使用痕・他)
338	SX1 1層	青磁	碗	_	_	_	_	外) 明緑灰 10GY7/1 断) 白	青磁釉	明緑灰色の釉。	肥前産
339	SX1 2-2層	青磁	猪口 又は碗	11.4	_	-	_	外) 明緑灰 10GY8/1 断) 白		明緑灰色の釉。	肥前産
340	SX1 1層	磁器 染付	Ⅲ 変形形	_	_	_	_	外) 白 断) 白	外) 笹文 内) 不明		肥前産
341	SX1 1層	磁器 染付	小皿 丸形	12.8	_	_	_	外) 灰白5Y8/1 断) 白	外) 唐草文 内) 松	薄手。	肥前産 二次被熱により 釉は変質。
342	SX1 1層	磁器 染付	皿 又は鉢	15.0	_	_	_	外) 白 断) 白	外) 草文		肥前産
343	SX1 1層	磁器染付	中皿丸形	16.8	2.7	10.3	_	外) 白 断) 白	外) 花唐草文 内) 草花·籠·水 高台外) 二重圈線 高台内) 銘·圈線	高台内にハリ支え痕。	肥前産 17世紀後葉~18 世紀前半 二次被熱により 釉は変質。
344	SX1 2-2層	青磁	皿 変形形	_	_			外) 白 断) 白	内) 陽刻文様	陽刻型打ち成形。内面に明緑灰 色の釉、外面に透明の釉。	肥前産
345	SX1 2-2層	青磁	鉢又は皿 変形形	_		_		外) 明緑灰 10GY8/1 断) 白		明緑灰色の釉。	肥前産
346	SX1 1層	磁器 染付	不明	_	_	6.0	_	外) 白 断) 白	高台外) 二重圏線	内面無釉。	肥前産
347	SX1 1層	磁器 染付	鉢か	_	_	ı	_	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 梅文	内面施釉	肥前産 二次被熱により 釉は変質。
348	SX1 1層	青磁	不明	9.2	_	ŀ	_	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 白	青磁釉	口縁部内面施釉。明緑灰色の釉。	肥前産 二次被熱により 釉は変質。
349	TP9 包含層 II 層	青磁	瓶	4.2		_	_	外) 緑灰10GY6/1 断) 白	青磁釉	内面ロクロ目。内面無釉。口縁端 部に砂が付着。	肥前産
350	SX1 1層	青磁	不明	-		ı	9.5	外) 明緑灰 10GY7/1 断) 白	青磁釉	内面無釉。明緑灰色の釉。	肥前産
351	SX1 1層	磁器 染付	壺	_		_	18.7	外) 白 断) 白	頸部外) 縞·雷文 体部外) 桐文	内面無釉。口縁部内面まで施釉。	肥前産 二次被熱により 釉は変質。
352	TP9 包含層 II 層	磁器 染付	壺	9.2	_			外) 白 断) 白	外)雲・二重圏線	内面無釉。口縁部内面まで施釉、 口縁端部無釉。	肥前産
353	SX1 2-2層	陶器	碗 丸形	10.8	7.1	5.0	_	外) 暗褐10YR3/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	褐釉	畳付外側に面取り。高台無釉。 褐釉は褐色~黒褐色に発色。	肥前産 17世紀前半
354	SX1 2-2層	陶器	碗	11.5	_	_	_	外) 黒褐10YR2/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	褐釉	底部無釉。黒褐色の釉。	肥前産 17世紀前半
355	SX1 2-2層	陶器	中碗	12.0	_	_	_	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 浅黄2.5Y7/3	灰釉	浅黄色を帯びる半透明の釉。	肥前産 17世紀後後半~ 18世紀前半
356	SX1 2-2層	陶器	小皿	_	_	4.4	_	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台内兜巾状。 畳付外側に面取り。高台無釉。 灰白色を帯びる透明の釉。内底 と高台に砂目痕。	
357	SX1 2-2層	陶器	小皿	13.6	2.9	4.2	_	外) オリーブ黄5Y6/3 断) 灰黄25Y7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。 内底に段。高台内兜巾状。外面 下半無釉。灰釉はオリーブ黄色 を帯びる。内底と高台に砂目痕。	
358	SX1 2-2層	陶器	擂鉢		_	_		外) 褐7.5YR4/3		外面ユビオサエ・回転ナデ。内面 に櫛目。	産不明
359	SX1 Ⅲ層	陶器	小瓶	1	_	5.4	_	外) 黒10YR2/1 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	内底に渦状のロクロ目。外底回転 糸切り。内面未釉。鉄釉は黒色 で厚く掛かる部分は灰白色に発 色。	
360	SX1 2-2層	土師質 土器	小皿	8.6	_	_		外) 浅黄橙10YR8/4 断) 浅黄橙10YR8/4	石英・長石の細砂、赤色風化粒を 含む。		
361	SX1 2-2屠	土師質 土器	小皿			_	_	外) にぶい橙7.5YR7/4 断) にぶい橙7.5YR7/4		器面は摩耗し調整不明。	

Tab.14 遺物観察表(石製品・金属製品・ガラス製品)

図版 番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)			重量 (g) []は残存分	色調	特徴
33	TP6 瓦溜1	石製品	現 箱形	全長 15.1	全厚 2.5	全幅 6.0	[400.2]	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰オリーブ 7.5Y6/2	粘板岩製。平面形は長方形。裏面に長方形の窪み あり。海部の縁を欠損する。砥石に転用し、両側 面に線状の擦痕が多数残る。
57	SK6	鉄製品	釘	残存長 3.6	全厚 0.5	全幅 0.6	[1.6]	_	断面四角形。
119	瓦溜3	鉄製品	釘か	残存長 11.0	全厚 0.6	全幅 0.7	[12.9]	_	頭部を欠損する。断面四角形。
120	瓦溜3	鉄製品	釘	全長 5.9	全厚 0.9	全幅 0.9	8.2		頭部をもつ。断面四角形。
121	瓦溜3	鉄製品	釘	全長 5.0	全厚 0.5	全幅 0.6	2.8	_	頭部をもつ。断面四角形。
122	瓦溜3	鉄製品	釘	全長 4.1	全厚 0.6	全幅 0.7	2.0	_	頭部をもつ。断面四角形。
323	瓦溜4	石製品	硯 箱形	残存長 8.4	全厚 2.6	全幅 6.7		外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) 灰白 2.5Y8/1	海部を欠損する。陸部は使用により窪む。墨が薄 く付着する。
324	瓦溜4	銅製品	煙管 吸口	全長 9.8	ラウ接合部 径 0.4	吸口 径 1.0	10.5	_	胴部は長く、口付部に向かって緩やかに細くなる。 ラウが残存する。
325	瓦溜4	銅製品	不明	残存長 6.5	全厚 0.08	全幅 4.2	[7.3]	_	薄い板状。両側に穿孔あり。
326	瓦溜4	ガラス 製品	簪	全長	全厚 0.2	全幅 0.4	[1.0]	外) 無色透明 断) 無色透明	断面は扁平な隅丸長方形。先端部は丸みをもつ。
327	瓦溜4	ガラス 製品	簪か	残存長 3.6	全厚 0.3	全幅 0.6	[1.7]	外)明緑灰7.5GY8/1	淡緑色を帯びる透明のガラス。断面は扁平な楕円 形。

Tab.15 遺物観察表(瓦)

図版	th L			法量 (cm)				
番号	出土 地点	種類	瓦当高	文様区高	平瓦厚	色調・胎土	特徴	備考 (生産地·銘)
25	瓦溜1	軒平瓦	4.5	2.8	1.5	外) 黄灰 2.5Y5/1 断) 灰白 2.5Y7/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキ ラ粉。	高知県香南市夜須町手結 「手結長」銘印あり。
26	瓦溜1	軒平瓦	4.1	2.5	1.5	外) 灰 N4/ 断) 黄灰 2.5Y5/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキラ粉。	
27	瓦溜1	軒平瓦	4.8	3.3	1.5	外) 黒5Y2/1 断) 灰白5Y7/1	中心飾りは丁子。両側に均整唐草文。	
28	瓦溜1	軒平瓦		_	1.5	外) 黒5Y2/1 断) 灰白 N7/	中心飾りは丁子。両側に均整唐草文。	高知県香美市土佐山田町 片地「片□」銘印あり。
29	瓦溜1	平瓦	_	_	1.5	外) 黒5Y2/1 断) 黄灰 2.5Y5/1		高知県香美市土佐山田町 片地「片□」銘印あり。
30	瓦溜1	平瓦		_	1.5	外) 灰 N4/ 断) 灰白 2.5Y7/1		高知県安芸市 角枠内「□キ重」銘印あ り。
31	瓦溜1	平瓦	_	_	1.5	外) 黒5Y2/1 断) 黄灰2.5Y5/1		小判形枠内「中己」銘印 あり。
32	瓦溜1	平瓦	_	_	1.5	外) 黒5Y2/1 断) 黄灰2.5Y5/1		角枠内「中友」銘印あり。
40	瓦溜2	軒平瓦 左桟瓦	_	_	1.6	外) 黒2.5Y2/1 断) 黄灰2.5Y6/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。	高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。
41	瓦溜2	軒平瓦	4.6	2.2	1.5	外) 黄灰 2.5Y5/1 断) 黄灰 2.5Y6/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。	
42	瓦溜2	軒平瓦 左桟瓦	4.5	3.0	1.5	外) 灰 N4/ 断) 灰白 2.5Y7/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。	
43	瓦溜2	軒平瓦	_	2.7	1.6	外) 黄灰 2.5Y5/1 断) 黄灰 2.5Y6/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。	
44	瓦溜2	軒平瓦		_	1.5	外) 灰 4N/ 断) 黄灰 2.5Y6/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。	
45	瓦溜2	軒平瓦	_	_	1.6	外) 暗灰 N4/ 断) 灰 N6/	中心飾りは不明。両側に均整唐草文。	高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。
46	瓦溜2	平瓦	_		1.6	外) 黒 2.5Y2/1 断) 黄灰 2.5Y6/1		高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。
47	瓦溜2	平瓦		_	1.6	外) 黄灰 2.5Y4/1 断) 黄灰 2.5Y6/1		高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。
48	瓦溜2	平瓦	_	_	1.8	外) 黒5Y2/1 断) 黄灰2.5Y6/1		高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。
49	瓦溜2	平瓦		_	1.6	外) 黒2.5Y2/1 断) 黄灰2.5Y6/1		高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。
50	瓦溜2	平瓦			1.6	外) 灰 N4/ 断) 黄灰 2.5Y6/1		高知県高知市布師田 「布直」 銘印あり。
51	瓦溜2	平瓦	_	_		外) 灰 N4/ 断) 黄灰 2.5Y6/1		高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。

Tab.16 遺物観察表(瓦)

図版	出土			法量 (cm)				
番号	地点	種類	瓦当高	文様区高	平瓦厚	色調·胎土	特徴	備考(生産地·銘)
52	瓦溜2	平瓦	_	_	1.6	外) 黄灰2.5Y4/1 断) 灰白5Y7/1		高知県香美市土佐山田町 片地 「片治」銘印あり。
53	瓦溜2	平瓦	_	_	1.5	外) 黒5Y2/1 断灰白) N7/		高知県香美市土佐山田町 片地 「片治」銘印あり。
123	瓦溜3	軒丸瓦	_	_	_	外) 灰 N4/ 断) 灰 N6/	巴文。珠。瓦当にキラ粉。	
124	瓦溜3	軒丸瓦	_	_		外) 灰 N4/ 断) 灰黒 7.5 Y6/1	巴文。珠。	
125	瓦溜3	軒平瓦 左桟瓦	4.5	2.9	1.5	外) 黒7.5Y2/1 断) 灰5Y5/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキ ラ粉。	
126	瓦溜3	軒平瓦 右桟瓦	4.6	2.6	1.6	外) 黒7.5Y2/1 断) 灰5Y5/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐草文。瓦当にキラ粉。	高知県高知市布師田 「布直」銘印あり。
127	瓦溜3	軒平瓦 右桟瓦	_	_	1.5	外) 灰 N4/ 断) 灰白 N7/1	中心飾りは不明。両側に均整唐草文。	•
128	瓦溜3	平瓦	_		1.3	外) 灰N4/ 断) 灰白N8/1		高知県香美市香北町韮生 野 角枠内「韮生□」銘印あり。
328	瓦溜4	軒平瓦 右桟瓦	4.8	3.0	_	外) 暗灰 N3/ 断) 灰白 7.5 Y8/1	中心文様は不明。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 角枠内「アキ重」 銘印あり。
329	瓦溜4	軒丸瓦	_	_		外) 暗灰 N3/ 断) 灰 5Y5/1	三ツ巴文と連珠14個。	
330	瓦溜4	平瓦	_	_	1.2	外) 灰5Y4/1 断) 灰白5Y7/1		銘印あり。
331	瓦溜4	平瓦	_	_	1.5	外) 暗灰 N3/ 断) 黄灰 2.5Y6/1		小判形枠内 「中己」 銘印 あり。
332	瓦溜4	平瓦	_	_	1.6	外) 暗灰 N3/ 断) 黄灰 2.5Y4/1		高知県安芸市 「御瓦師」銘印あり。
365	SX1 2-2屠	軒平瓦 右桟瓦	4.5	3.1		外) 黄灰 2.5Y5/1 断) 黄灰 2.5Y4/1	中心文様は不明。両側に均整唐草文。	
362	SX1 2-2屠	軒丸瓦	18.0	14.0	_	外) 黒5Y2/1 断) 灰白5Y7/1	三ツ巴文・連珠16個。瓦当に粗い砂が付着。	
363	SX1 2-2屠	軒丸瓦	_	_	_	外) 黄灰 2.5Y5/1 断) 灰白 5Y7/1	三ツ巴文・連珠。瓦当に粗い砂が付着。	
364	SX1 2-2層	軒丸瓦	16.1	11.7	_	外) 黄灰2.5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	三ツ巴文・連珠16個。瓦当に粗い砂が付着。	

## [遺物観察表凡例]

- 色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。
- 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

# 第 \ 章 考 察

# 第1節 史料にみる高知城跡西堀地区の性格と変遷

## はじめに

高知城西堀の周辺地域は城郭の西側に接するという立地環境にあり、江戸前期には侍屋敷、その後は堀端の緑地と広小路へと転じ、幕末頃には馬場が設けられるなど、近世を通じて、情勢の変化に応じながらその景観を変えた一帯である。

平成19年度に確認調査を行った高知地方裁判所北側の地点は、この西堀の南角付近にあり、高知城伝下屋敷跡 (駐1) の北側に隣接している。学術目的の試掘確認調査であったため、調査面積は対象区全体の一部にすぎないが、各所に設けた試掘坑内からは内堀跡及び近世前期から後期の遺構と遺物が検出されており、高知城西堀とその周辺の土地利用の在り方を知る貴重な情報が得られている。これらの検出遺構の性格を知る手掛かりとして、ここではまず、関連の絵図、文献史料などを取り上げながら、その歴史的背景と変遷をみていくこととする。

## 1. 江戸前期

## 17世紀の景観と居住者

高知城の西堀に接する一帯には、西大門から西に向かう「西大門筋」と、内堀に沿って南北に延びる筋があり、南北筋の両側に侍屋敷が並んでいた。

寛永元年(1624)から万治2年(1659)間の作成と推察されている『侍町小割帳』(駐2)(史料1-B)によると、堀西側の侍屋敷は、南北筋の東に面して北から「岡村平次」「安藤宇右衛門」「沼津玄達」の武家名が記されている。位置関係からみて、今次調査区は「沼津玄達」の屋敷が該当すると考えられ、同史料には「沼津玄達」の項に「弐拾六間五尺」「南面拾九間半」と屋敷地の間口も記入されている。また同史料では、城の南側を東西に延びる「御屋敷筋」の西端に「御屋敷下やしき」の記載があり(史料1-A)、前後の屋敷との位置関係から、堀の南西角外側の一角、すなわち「沼津玄達」屋敷の南側に接する地点が、「御屋敷下やしき」にあたると考えられる。(駐3)同屋敷については、間口「四拾間半」とその規模が記されており、「沼津玄達」屋敷の南側には、倍程の広さをもつ藩主関連の屋敷が存在したことが分かる。

次に、寛文9年(1669)とされる『寛文己酉高知絵図』<sup>(註4)</sup>(Fig.47-図1)には、西大門に至る南北筋の東に面して北から「桑山伊左衛門」、その隣地は空白、南端に「福岡内丞」の侍屋敷がみえ、今次調査区は「福岡内丞」の屋敷となっている。また「福岡内丞」屋敷の南側に接して、堀の南西角外側の一角には、塀を伴った屋敷の絵が描かれており、『侍町小割帳』に記された「御屋敷下やしき」と同一のものと推察される。

続いて、『皆山集』に収められた『元禄二、三年間之図』(1689~1690)<sup>(誰5)</sup>(Fig.47-図2)では、福岡氏の屋敷は元の堀西側南端に無く、同地点には「長屋」の武家名がある。先の寛文9年絵図では、元の長屋氏屋敷は升形にあったが、長屋氏が堀西側へ移るとともに福岡氏が升形に移っており、丁度

両氏の屋敷位置が入れ替わる形となっている。なお、元禄2·3年間絵図でも、堀の南西角外側の一角は「御下屋敷」となっている。

この様に、17世紀中葉~後葉にかけて、該当地点では「沼津」「福岡」「長屋」の武家屋敷が比較的短期間の内に入れ替わっていることが分かる。該当地は城内堀の西岸に接するとともに、藩主に関わる屋敷の北側に隣接するなど、城下でも重要な位置にあたっている。そこで、ここに屋敷を与えられた「沼津」「福岡」「長屋」各氏がどういった性格をもつものであったのか、みておきたい。

## 沼津氏について

沼津氏については、『侍町小割帳』にある「沼津玄達」の他は、絵図、系図、その他の史料に名が見えず、手掛かりが得られていない。なお、『侍町小割帳』については、他の武家の家督相続期間等も考慮すると、同資料の成立時期を正保2年(1645)以前に繰り上げることが可能で<sup>(胜6)</sup>、沼津氏が堀西側に屋敷を構えた時期も17世紀前半に推定することができよう。

#### 福岡氏について

福岡氏は、初代から藩の要職につき、3代藩主忠豊の代から明治維新まで家老職を勤めた武家である。寺石正路『土佐名家系譜』 (註7) によると、福岡氏はもと大和国添上郡狹河の城主であったもので、初代の福岡丹波干孝が江州長浜で山内一豊に仕え、遠州掛川では500石仕置役となっている。一豊の土佐入国後には、福岡丹波干孝は1000石の中老職、仕置役を勤め、2代藩主忠義の代には、国内を巡行して境界を調査し年貢を決めるなどの功績を残した。寛文10年(1670) には3代の福岡宮内孝序が家老となって、以後明治維新まで福岡氏が家老職を勤めている。

『御侍中先祖書系図牒』 (駐8) に収められた初代から3代までの跡目相続の期間と、各代の役職は次の通りである。

初代 丹波干孝 寛永9年 (1632) 没 中老 1000石

2代 圖書孝政 寛永9年 (1632) 相続 万治3年 (1660) 没 中老 知行1500石

3代 宮内孝序 寛文10年(1670)より家老宝永3年(1706)没知行2000石

4代 宮内孝紀 家老奉行職

5代 縫殿孝幹 天明元年(1781)奉行職 知行2800石

6代 内記孝誼 天明8年(1788)奉行職

7代 孫十郎孝則 近習御用

8代 縫殿孝安 近習御用

9代 宮内孝茂 家老 奉行職 知行3000石

ところで、正保年間(1644~1648)の城絵図、及び慶安4年(1651)の絵図には、城内南東隅の堀内側の平場は「侍屋敷」とされているが、この箇所について、『皆山集』に収められた絵図では「福岡丹波屋敷」との記述が認められている。また、先の『侍町小割帳』の末尾にも、「城中」との書き付け (駐9)を付して「野中主計」「福岡圖書」他数名の要職の武家名が記されている。(史料1-C) これらのことより、初代から2代目まで、福岡氏が堀内に屋敷を賜り、藩の重鎮として重用されたことが窺われる。また3代目の福岡宮内以降は、深尾家とともに城南正面の南北筋に面して屋敷を置いており、以後幕末まで、福岡家屋敷は本町に置かれている。

さて、寛文9年 (1669) の『寛文己酉高知絵図』で堀西側に屋敷を構える「福岡内丞」は福岡氏の支家にあたり、中老、福岡圖書孝政 (福岡氏2代目) の二男であった福岡左近右衛門孝章を初代として、代々御馬廻を勤めた上級武士である。8代福岡兵三孝和が藩に差し出した系図 (駐10) によると、初代の左近右衛門孝章は慶安2年 (1649) に登用されて御小姓組 (駐11) となるが、その後、万治元年 (1658) に知行200石、寛文元年 (1661) と寛文12年 (1672) にそれぞれ100石を加増して、天和2年 (1682) に御馬廻 (駐12) となっている。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた初代以降の跡目相続の期間と役職は、次の通りである。

初代 左近右衛門孝章 慶安2年(1649)登用 天和2年(1682)御馬廻 元禄11年(1698)没

2代 平馬孝輝 元禄12年 (1699) 相続 享保17年 (1732) 没 御馬廻

3代 内之丞孝周 享保18年(1733)相続 宝暦7年(1757)没 御馬廻

4代 内之丞孝惟 宝暦7年(1757)相続 安永8年(1779)没 御馬廻

5代 助之進孝時 安永8年 (1779) 相続 文政5年 (1822) 没 御馬廻

6代 平馬孝行 文政6年(1823)相続 嘉永4年(1851)没 御馬廻

7代 左門孝壽 嘉永4年 (1851) 相続 安政6年 (1859) 没 御馬廻

8代 兵三孝和(貞吉三兵衛)安政6年(1859)相続 御馬廻

各々の家督相続の期間からすると、寛文9年(1669)絵図に見える「福岡内丞」は初代の福岡左近 右衛門孝章(前名は、□□右衛門内丞)(当時、300石か)が該当するとみられる。その後の絵図では、 福岡氏は升形へ移っており、以後幕末まで升形に屋敷を置いている。(駐13)

#### 長屋氏について

長屋氏は、初代の長屋喜内重之が慶長7年に知行300石を与えられ山内一豊に仕えて以降、幕末まで御馬廻を勤めた上級武士で、山内資料に収められた『寛永五年諸士分限帳』 (駐14) では初代の長屋喜内が御馬廻、知行500石となっている。

8代の長屋数衛重次が藩に差し出した系図<sup>(駐15)</sup>に記された、長屋氏の跡目相続の期間は次の通りである。

初代 喜内重之 慶長7年(1602)

2代 喜内重吉 寛永19年(1642)相続 延宝3年(1675)没

3代 右内重孝 延宝3年(1675)相続 元禄7年(1694)没

4代 彦太夫茂良 元禄8年(1695)相続 宝暦6年(1756)没 知行300石

5代 惣四郎茂通 宝暦6年(1756)相続 寛政3年(1791)没 知行200石

6代 源内繁嗣 寛政3年(1791) 相続 文化4年(1807) 没

7代 彦太夫重直 文化4年 (1807) 相続 慶応2年 (1866) 没

8代 数衛重次 慶応2年(1866)相続 世禄80石、知行150石

このうち、寛文9年 (1669) の絵図で升形に屋敷を構えている「長屋宅内」は、2代目の長屋喜内重吉にあたると考えられ、元禄2・3年間 (1689~1690) の絵図 (Fig.47-図2) で堀西側に屋敷を移している「長屋」は3代目、元禄10~12年の絵図 (Fig.47-図3) で同位置に見える「長屋彦太夫」は4代目(当時、300石) にあたる。堀西側の屋敷群が撤去となって以降は、長屋氏の屋敷は本町に移り、幕

末まで留まったことが以後の絵図から分かる。(註16)

この様に、17世紀代において該当地には、藩の重鎮の家系となる武家や、山内家初代より御馬廻を勤め知行300石以上を給された上級武士の屋敷が置かれた。3氏のうちで居住が最も早い沼津氏については、『侍町小割帳』の年代観等から、正保2年(1645)以前には居住を開始していることが推察できるが、17世紀初め以来の状況は詳細がつかめていない。しかし、今回の試掘調査では、景徳鎮窯の古赤絵皿、志野焼など16世紀~17世紀初頭の遺物を含む落ち込み状の遺構が検出され、江戸初期より高い経済力をもつ武家の屋敷が存在していたことが窺われる。

## 2. 江戸中期以降

## 18世紀の景観

さて、その後の内堀西側の動向を知るものとして、延享3年 (1746) の絵図 (Fig.47-図4) と、それ以降の近世絵図 (Fig.47・48-図5~11) を参考としたい。(Tab.17)

延享3年『高知城郭内図絵』、及び『延享三年之図』(Fig.47-図4)では、堀西岸に接する一帯には 侍屋敷は無く、黒色の帯で表記されており、堀端の土手や緑地を表したものと思われる。また、緑 地の西側は南北の広小路となっており、「西大門廣小路」と記されている。堀南西角外側の空間につ いては空白で、かつての藩主関連の屋敷は無くなっている。

17世紀末以降の景観の変化については、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年 (1698)の大火以後、堀西側の侍屋敷が撤去され、前面の筋が広小路になったとされる。これについて『皆山集』には「詒謀記事云西大門廣小路も元禄十一寅年火事以前ハ西ノ口瀬戸氏門前より南不破氏の辺迠両輪侍屋敷二て第十某なと云侍居けると也火事以後東側ハ除きて廣小路と成也」とある。(駐17)また、享保12年 (1727)の大火では、追手門他の数棟を除いて城内の大部分が焼失しており、この後、延享4年 (1747)9月27日に城門の呼称が変更される (駐18)とともに、搦手側の「西大門筋」も「西弘小路」に改められたという。

### 元禄、享保の大火と堀西側の被害

この様に、元禄11年と享保12年の大火は、内堀西側の景観にも大きな変化をもたらした。これらの火災に関連する焼土層や火災に伴う廃棄土坑は、今次調査区と南側の高知城伝下屋敷跡、北側の高知城跡(平成17年度旧営林局跡地点の調査)の発掘調査<sup>(駐19)</sup>でも確認されており、堀西側の地区一帯が被害を受けた痕跡が残っている。そこで、元禄11年及び享保12年の大火に関わる幾つかの記事のうち、特に内堀西側周辺での被害の状況が分かるものを挙げておく。

まず元禄11年の大火について、『南路志』に収められた記事「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」 (駐20) には、焼失した北奉公人町、内堤、帯屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷 176軒が列挙されているが、ここでは「内堤」の焼失した侍屋敷の中に「内堤…(中略)…岡田又兵衛 飯沼太右衛門 安藤藤十郎 長屋彦太夫」とあり、長屋氏4代目の「長屋彦太夫」屋敷が焼失したことが分かる。また、『皆山集』の『元禄二、三年間之図』(Fig.47-図2)で北隣にあった「安藤藤十郎」、南北筋の西側に対面する「岡田又兵衛」「飯沼太右衛門」の名も見え、一帯の屋敷が焼失している。

また同資料では、城内堀の南側を東西に延びる帯屋町筋について「帯屋町筋 御下屋敷 御屋敷 新

馬場御亭 同御厩 太□(鼓カ)丸 山内勘兵衛 桑山貞右衛門…(以下略)」と記しており、屋敷の位置 関係等からみて、内堀南西角外側の一角にあった「下屋敷」とされる屋敷も焼失に至ったことが分かる。(駐21)

次に享保12年の大火について、『南路志』 (駐22) に収められた「城下大火、御城本丸まで焼失附公義御差出」の記事には、城郭は、大手門、西ノ口大門、北ノ口大門が焼け残るが、天守、本丸、二の丸、三の丸をはじめとする殆どが焼失し、郭中の侍屋敷387軒と、廿代町、細工町、種崎町、蓮池町、農人町、新町、新市町、北奉公人町、堺町、唐人町、浦戸町、掛川町、朝倉町の町屋が焼失したことが記されている。この中で、郭中の侍屋敷については「郭内残家帯屋町北側山田多門屋敷より下堀端火之見迄拾六軒。同南側高屋又兵衛宅より今田清左衛門迄拾壹軒。本町乾又五郎、大黒甚左衛門、野中六左衛門迄三軒。西大門北藪際、佐藤五郎左衛門壹軒。金子橋薮之内北小笠原又右衛門外輪より南鷹匠町堺迄、東ハ大塚藤右衛門、金子傅十郎より合而八軒。鷹匠町南側西より八軒。同北側後藤甚五右衛門一軒。外江ノ口分鷲見市丞壹軒。合四拾九軒残。」と、焼け残った侍屋敷の範囲が示されており、これからみて、堀西側一帯の侍屋敷は「西大門北藪際、佐藤五郎左衛門」の屋敷1軒を除いて残らず焼失したことが窺われる。

## 大火以降の景観と変遷

これ以降の景観について、先の延享3年(1746)絵図以降、寛延年間(1748~1751)頃の『寛延年間頃高知城下郭中之図』(Fig.47-図5)、天明年間(1781~1789)頃の『天明年間前後高知絵図』(Fig.48-図6)でも堀西岸外側は帯表記で緑地。享和元年(1801)の『高知御家中等麁図』(Fig.48-図7)では堀の西岸は記載が無く、西側の南北筋に「西弘小路」。天保元年(1830)の『天保元年高知之図』(Fig.48-図8)では堀西岸に森林が描かれその西は記載が無いが広小路となっている。また、天保12年(1841)『土佐国高知城下町絵図』でも西岸に帯表記、南北筋に「廣小路」の表記がなされている。これら一連の絵図に見えるように、18世紀には堀西側の堀端は緑地、その西は「西大門廣小路」「西弘小路」「廣小路」と呼称される南北の大道となり、18世紀初めから19世紀前葉にかけてほぼ変化が無い。

次に堀西側に変化が見えるのは、弘化年間 (1844~1848) の『弘化年間旧郭中絵図』 (Fig.48-図9) で、ここではもとの広小路の一部が「新御馬場」となっている。また、天保2年 (1831) 以降とされている『天保二年後古図』、安政5年 (1858) の郭中図でも「新馬場」が見え、『皆山集』に収められた文久3年 (1863) の絵図 (Fig.48-図10) では、堀西岸に「御留杉」、その西が「新馬場」となる。また、幕末頃とされる『高知郭中図』 (Fig.48-図11) でも堀西側が「新馬場」とされている。この「新馬場」新設の時期については、『皆山集』に、「嘉永二酉年五月初テ馬場トナル東西八間南北九十六間」とあり、嘉永2年 (1849) に設けられたとされている。 (駐23)

一方、周辺での変化については、享和元年(1801)の絵図(Fig.48-図7)で広小路の南の詰めに「御厩」が現れている。以降の絵図でも、該当地には「御厩馬場」「御馬屋」などと表記されて、幕末まで継続する。

また、堀南西角外側の一角の敷地は、天保元年(1830)絵図(Fig.48-図8)では、周囲を塀で囲み南東に小さな建物を伴った施設の絵が描かれており、建物の脇に「御番所」の文字が記されている。

天保12年(1841)の絵図でも、表現が略化されるものの、やはり南東に建物を伴った施設が描かれる。続いて、弘化年間(1844~1848)の絵図(Fig.48-図9)では建物はみられないが塀で囲んだ施設が描かれており、先の天保元年、天保12年絵図に描かれる番所と同様のものかと思われる。また、天保2年(1831)以降とされる『天保二年後古図』、安政5年(1858)の絵図においては、同地点に「新番所跡」の文字が記されており、この時点では番所はその機能を失っていることが窺われる。この後、『皆山集』に収められた文久3年(1863)の絵図(Fig.48-図10)では、該当部分の西半分に「薬園」、東半分に「住吉宮」とあり、幕末の『高知郭中図』(Fig.48-図11)では堀南東角外側に「住吉神社」とされている。

## おわりに

以上、史料から、内堀西側とその周辺の景観変化をみてきた。堀西側の一帯は、内堀や藩主の屋敷に隣接するなどの立地条件をもち、17世紀までは、老中の縁戚など藩の重鎮に関係の深い武家、山内家初代より御馬廻を勤め知行300石から500石を給された上級武士などが、屋敷を与えられた。その後、元禄11年の大火を契機に緑地と広小路へと転じるが、19世紀前葉以降は周囲に厩、番所などの施設が現れるとともに、19世紀中頃には堀西岸へも馬場が設けられ、藩の施設としての機能が拡大していく。

こうした変化をみていくと、その景観変遷の画期は、大火を契機に居住地から緑地、広小路へと転じる17世紀末~18世紀初頭と、藩の施設が増設されその機能が変化し始める19世紀前半にあったといえよう。史料上にみえるこれらの画期や、空間の機能の変化が、遺跡での遺構の廃絶状況や遺物廃棄の在り方とどのように関わり合い反映されているのかについては、次節にて検討することとしたい。

#### 轩虓

今回の報告にあたっては、絵図資料の調査について吉松靖峯氏、筒井秀一氏より、多くのご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

#### [註]

- 1)『高知城伝下屋敷跡 高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 2) 『土佐国史料集成土佐國群書類第八巻』高知県立図書館2006より引用。『侍町小割帳』は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいうべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名を列記している。寛政3年(1791)と文政9年(1826)の2回書写されている。史料の成立年代は不詳であるが、書写した人物が史料末尾に付記した内容によると、寛永元年(1624)に山内家に召し抱えられた仙石忠右衛門と、万治2年(1659)に他国へ出た間宮九左衛門の屋敷が記されていることから、寛永から万治2年の間に成立したものと推測されている。ただし、『御侍中先祖書系図帳』と人名との照合など今後の研究によって、成立時期をさらに絞り込むことが可能であろうとされる。なお、『侍町小割帳』に表れる「金子弥左衛門宅明」が

正保2年(1645)に没していることなどから、史料の下限を正保2年以前まで繰り上げることも可能であ ろう。

- 3) 池澤俊幸「高知城伝下屋敷跡の調査成果と文献史料」『高知城伝下屋敷跡 高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文 化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 4) 『寛文己酉高知絵図』(高知市立市民図書館所蔵)は作成者や年時を示す奥書は欠落しており、図中の屋敷名などから松野尾章行が寛文9年頃の図と判定したと推測されている。また、同絵図は内容の詳細さと製図手法の正確さが高く評価されており、藩内用に藩が作成したものと推測されている。大脇保彦「高知城下町絵図について-歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001
- 5) 『土佐之国史料類遺纂皆山集』 第九卷
- 6) 浜田恵子「金子橋遺跡、居住者の性格と動向」『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008
- 7) 寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社昭和51年
- 8)『御侍中先祖書系図牒』土佐山内家宝物資料館
- 9) 『侍町小割帳』は寛政3年(1791)と文政9年(1826)の2回書写されており、伝世する文政9年の書写は市原辰登なる人物が行ったものである。同史料末尾の注記には、氏名の肩書傍書は本書の付札にあたるとある。
- 10)『御侍中先祖書系図牒』土佐山内家宝物資料館
- 11) 御小姓組は藩主に従って戦場や参勤交代に行くという意味が身分名となった中級武士で、30石~300石。
- 12) 御馬廻は藩主の周辺を固めるという意味が身分名になった上級武士で、150石~600石。
- 13) 延享3年(1746) 絵図には、升形に「福岡内之丞」(3代内之丞孝周か)が見える。享和元年(1801)に見える「福岡助之進」は5代の福岡助之進孝時、また、天保元年(1830) 絵図には、同地点に「福岡平馬」の記述があり、6代の平馬孝行に該当する。幕末絵図にみえる「福岡貞吉」は8代の福岡兵三孝和(前名は貞吉三兵衛)に該当するとみられる。各絵図に表れるように、福岡左近右衛門孝章から繋がる福岡家は、西広小路改修の後は、屋敷を南に移しその後幕末まで居住したことが分かる。
- 14) 『山内家史料第二代忠義公紀』 第二編土佐山内家宝物資料館
- 15) 『御侍中先祖書系図帳』 土佐山内家宝物資料館
- 16) 享和元年 (1801) 『高知御家中等麁図』では、6代目の長屋源内の名が本町筋の南側に見える。また、天保元年 (1830) 『天保元年高知之図』、弘化年間 (1844~1848) 『弘化年間旧郭中絵図』、幕末頃の『高知郭中図』では本町の同位置に7代目「長屋彦太夫」の名が見える。
- 17)「高知市街誌稿」『皆山集』巻9高知県立図書館より引用。
- 18) 『皆山集』
- 19) 『高知城跡旧営林局跡地発掘調査現地説明会資料』高知市教育委員会2006
- 20)「巻七十、豊昌公御代七付録」『土佐国史料集成南路志』第七巻高知県立図書館平成6年より引用
- 21) 『皆山集』に収められた「元禄十一年寅ノ十月六日家焼失覚」(『土佐之国史料類纂皆山集』第6巻高知県立 図書館)の内容もほぼ同様である。
- 22) 『南路志』 巻七十五、豊敷公御代一より引用。